

SHINONOI SITES 7th

# 篠ノ井遺跡群 (7)

— 市道塩崎中央線地点 —

March, 2012

2012 (平成24) 年 3 月

NAGANO City Board of Education, Nagano pref., JAPAN

長野市教育委員会



# 序

遺跡や遺物などの埋蔵文化財は、「土地に刻まれた歴史」ともいわれるように、郷土の成り立ちと文化を理解するうえで欠くことのできない貴重な遺産です。肥沃な善光寺平の中央部に位置する長野市においては、その悠久の歴史を物語るように、現時点で800箇所を超える遺跡が周知されていますが、各種の開発事業に伴って現状での保存が困難となったものについては事前に発掘調査を実施し、記録保存という形で後世に伝えていく措置を講じています。

ここに長野市の埋蔵文化財第131集として刊行いたします本書は、市道塩崎中央線建設工事に伴って実施した篠ノ井遺跡群に関する発掘調査報告書であります。調査地は、千曲川が形成する自然堤防上に展開した県内有数の大遺跡群として知られ、各時代の中心的な集落が営まれた場所と考えられております。調査の結果、弥生時代から中世にわたる各時代の遺構と遺物が確認され、その歴史の一端が明らかとされたものであります。この調査成果を、地域史解明の一助として、多くの皆様にご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対するご理解とご協力を賜りました事業関係者各位並びに、発掘作業に際して多大なご尽力をいただきました地元の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

長野市教育委員会  
教育長 堀内 征治



# 例 言

- 1 本書は、市道塩崎中央線道路改良事業にともない、平成4・9・11年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、起因事業の担当部局である長野市篠ノ井支所土木課と教育委員会埋蔵文化財センターとが協議し、埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査地は、長野市篠ノ井字古寺に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地「篠ノ井遺跡群」の範囲内である。遺跡群内での位置を示すため、「塩崎中央線地点」を遺跡名に付した。
- 4 検出遺構は、各年度において個別に番号を付け、さらに年度内で調査区が複数あることから、遺構番号の前に、調査年・地区・次面を付した。

例 97-①区-1SB1 = 97(平成4)年度調査区-1区-1次面1号住居跡

- 5 本書では、調査によって確認された遺構および遺物の概要を提示することを目的とし、資料の掲載方法は以下のとおりである。
  - ・遺構の個別図は、住居跡の内、土器実測個体があるものについて土器図版と合わせて提示した。また、土坑は特筆されるもののみを個別に示した。
  - ・土器は接合後、実測が可能なものを提示し、表5土器観察表にて残存部位および残存量を示した。
  - ・図版縮尺は、遺構個別図：1/80、土器：1/4、石器：1/3、その他の遺物は1/2を基本としているが、例外もあり、個別に縮尺を示した。
  - ・遺構図・土器実測図中では、網掛け等にて以下の事を示している。

## <遺構実測図>

焼土  炭化物  貼床範囲…………破線

## <土器実測図>

赤彩  黒色処理  須恵器…………断面黒塗り

- 6 本書の編集・執筆は、第I・II章を風間、第III～V・VII章を遠藤が担当し、VI章を(株)パリノ・サーヴェイに委託した。
- 7 調査によって得られた資料は、長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）で保管している。

# 目次

序文・例言

目次

I 調査経過	1	IV 遺構と出土土器	36
1 調査に至る経過	1	1 弥生時代後期	36
2 発掘調査の経過	2	2 古墳時代前期	36
1 平成4年度の発掘調査	2	3 古墳時代中期	39
2 平成9年度の発掘調査	3	4 古墳時代後期～奈良時代	46
3 平成11年度の発掘調査	4	5 平安時代	54
3 整理作業の経過	5	V その他遺物	77
4 調査体制	6	1 石製品	77
II 篠ノ井遺跡群の位置と調査地点	8	2 石器	77
1 篠ノ井遺跡群の位置	8	3 玉類	77
2 篠ノ井遺跡群と調査地点	10	4 土製品	77
III 発掘調査の概要	12	5 鉄製品	77
1 調査区の概要	12	VI 自然科学分析	87
2 時期別遺構の概要	13	VII まとめ	94
		報告書抄録	
		奥付	

# 挿図目次

図1 調査位置図 (S=1:50,000)	1	図14 97年度調査区1次面全体図 (S=1:150)	29
図2 調査区名 (S=1:1,000)	3	図15 97年度調査区2次面全体図 (S=1:150)	31
図3 篠ノ井遺跡群の位置図	8	図16 97年度調査区3次面全体図 (S=1:150)	32
図4 篠ノ井遺跡群と周辺遺跡分布図 (S=1:50,000)	9	図17 99年度調査区(①,②区)0次面全体図 (S=1:150)	33
図5 篠ノ井遺跡群発掘調査実施位置図 (S=1:20,000)	10	図18 99年度調査区①区1・2次面全体図 (S=1:150)	34
図6 調査地点と字名 (S=1:2,500)	11	図19 99年度調査区②・③区2次面全体図 (S=1:150)	35
図7 1次面全体図 (S=1:800)	12	図20 97-②区-3SB1実測図	36
図8 2次面全体図 (S=1:800)	12	図21 97-②区-3SB1出土土器実測図	36
図9 92年度調査区全体図 (S=1:400)	22	図22 97-②区-2SB2実測図	36
図10 97年度調査区全体図 (S=1:400)	23	図23 97-②区-2SB2出土土器実測図	37
図11 99年度調査区全体図 (S=1:400)	25	図24 99-①区-2SB6・7実測図	37
図12 92年度調査区②区全体図 (S=1:150)	26	図25 99-①区-2SB7出土土器実測図	37
図13 92年度調査区③区全体図 (S=1:150)	27		

図26	97-②区-1SB9実測図	38	図59	99-③区-2SB12・13・16・17出土土器実測図	52
図27	97-②区-1SB9出土土器実測図	38	図60	検出面出土土器実測図	53
図28	他遺構・検出面出土土器実測図	38	図61	92-SB1・2・3出土土器実測図	54
図29	検出面出土土器実測図	39	図62	97-①区-1SB1実測図	55
図30	92年度調査区①区住居(SB1,2,4,5)実測図	40	図63	97-①区-1SB1出土土器実測図	55
図31	92-SB4出土土器実測図	42	図64	97-①区-1SB2実測図	56
図32	97-①区-1SB4実測図	42	図65	97-①区-1SB2出土土器実測図	56
図33	97-①区-1SB4出土土器実測図	42	図66	97-①区-1SB3実測図	57
図34	97-②区-1SB4出土土器実測図	42	図67	97-①区-1SB3出土土器実測図	57
図35	97-②区-1SB4実測図	43	図68	97-②区-1SB1実測図	58
図36	97-②区-1SB3実測図	43	図69	97-②区-1SB1出土土器実測図	58
図37	97-②区-1SB3出土土器実測図	43	図70	97-②区-1SB2実測図	58
図38	97-②区-1SB5出土土器実測図	43	図71	97-②区-1SB2出土土器実測図	59
図39	97-②区-1SB5実測図	43	図72	97-②区-1SB7・8実測図	59
図40	97-②区-2SB7出土土器実測図	44	図73	97-②区-1SB7・8出土土器実測図	60
図41	97-②区-2SB7実測図	44	図74	97-②区-1SB12実測図	61
図42	97-②区-2SB8出土土器実測図	44	図75	97-②区-1SB12出土土器実測図	61
図43	97-②区-2SB8実測図	44	図76	97-②区-2SB1・5実測図	61
図44	他遺構・検出面出土土器実測図	45	図77	97-②区-2SB1・5出土土器実測図	61
図45	92-SB5出土土器実測図	46	図78	99-①区-1SB1実測図	62
図46	97-②区-1SB10・13出土土器実測図	47	図79	99-①区-1SB1出土土器実測図	62
図47	97-②区-1SB10・13実測図	47	図80	99-①区-1SB1出土土器実測図	63
図48	97-②区-1SB11実測図	48	図81	99-②区-2SB9実測図	63
図49	97-②区-1SB11出土土器実測図	48	図82	99-②区-2SB9出土土器実測図	64
図50	97-②区-1SB14実測図	48	図83	99-③区-2SB11・15実測図	64
図51	97-②区-SB14出土土器実測図	49	図84	99-③区-2SB11・15出土土器実測図	64
図52	99-①区-1SB4実測図	49	図85	99-③区-2SB14実測図	65
図53	99-①区-1SB4出土土器実測図	49	図86	99-③区-2SB14出土土器実測図	65
図54	99-②区-2SB8実測図	50	図87	他遺構・検出面出土土器	65
図55	99-②区-2SB8出土土器実測図	50	図88	92-SK2実測図	66
図56	99-②区-2SB10出土土器実測図	51	図89	石製品・石器実測図	79
図57	99-②区-2SB10実測図	51	図90	石製品・玉類・土製品・鉄製品実測図	80
図58	99-③区-2SB12・13・16・17実測図	51	図91	周辺調査区遺構位置図(S=1:1,000)	85

## 表 目 次

表1	調査実施状況一覧表	2	表4	遺構表	15
表2	篠ノ井遺跡群発掘調査地点一覧表	10	表5	土器観察表	69
表3	時期別検出遺構表	14	表6	他遺物観察表	78





# I 調査経過

## 1 調査に至る経過

長野市南部では、上信越自動車道ならびに中央自動車道長野線の建設・開通に伴い、高速道路へのアクセス道路網の整備が各所で行われている。特に更埴インターチェンジと直接繋がる国道18号線では、基幹道路として千曲市屋代付近をはじめに慢性的渋滞が各所で発生しており、これを緩和する目的で千曲川対岸に長野上田間のバイパス建設が進められている。この国道バイパス建設に伴い、長野市篠ノ井地区では更埴インターチェンジを回避して国道18号線篠ノ井橋北詰から新たに建設が予定される国道18号バイパスへの接続道路が計画され、主要地方道長野上田線（県道77号線）塩崎バイパス（以下、県道バイパスと略記）が建設されている。

これら主要幹線網の整備は当然、地区内での道路整備を促す結果となり、現行の県道77号線と新たに南側に開通した県道バイパスを繋ぐ道路として計画されたのが、市道塩崎中央線である。市道塩崎中央線は、総延長200m、巾員15mで、歩道を備える新設道路として計画された。

計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地「篠ノ井遺跡群」の範囲内に該当し、埋蔵文化財の包蔵は確認された。建設担当部局である長野市篠ノ井支所土木課と協議を重ね、接続する県道バイパス建設の推移に合わせ、発掘調査を実施する計画となっていた。ただし、用地取得によって隣接地への移転となった住居ならびに南側の畑地への暫定搬入路を確保する必要性が発生したため、この搬入路を設置する北半部を対象として平成4年度に発掘調査に着手することとなった。こうした経過により、平成4年9月14日に発掘調査に着手している。

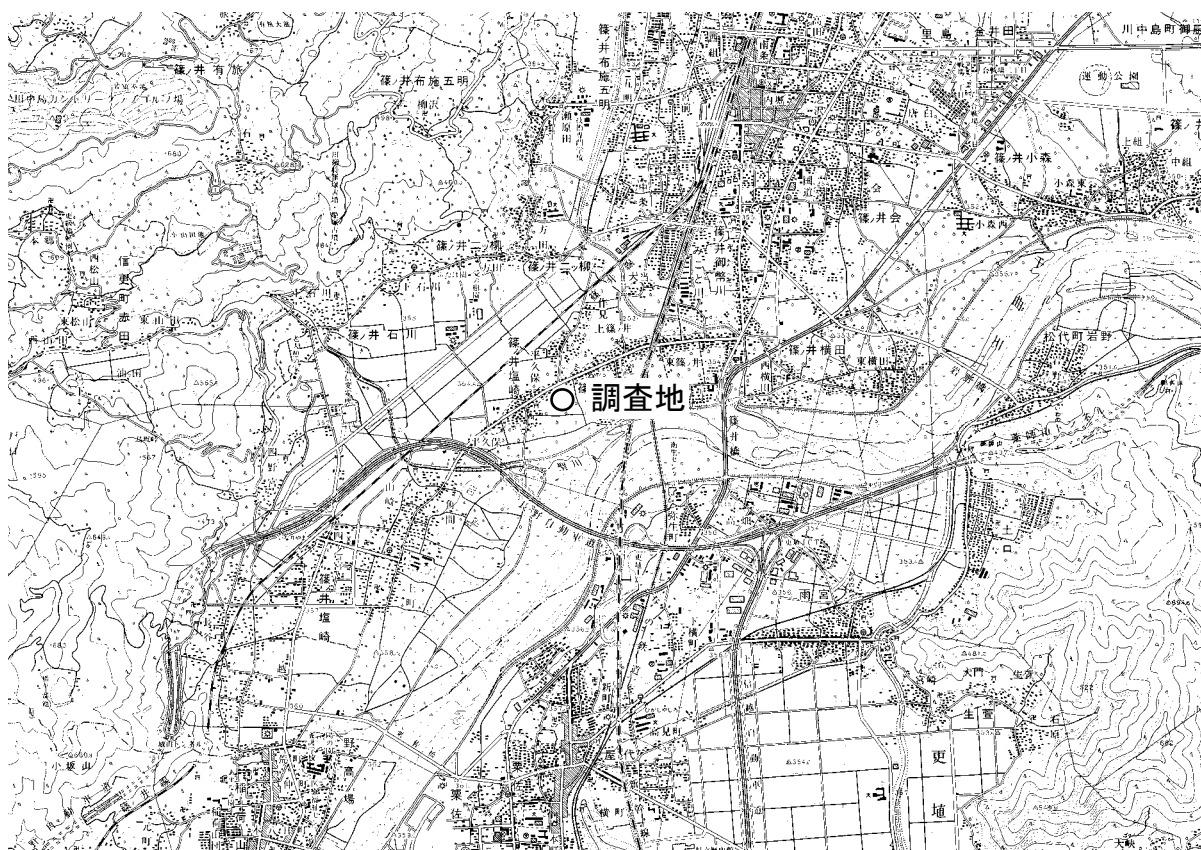


図1 調査地位置図 (S=1 : 50,000)

## 2 発掘調査の経過

### 1 平成4年度の発掘調査

隣接住宅や南側畑地へ暫定道路確保が求められたことから用地の北半部を対象に9月14日に発掘調査に着手した。掘削土の仮置場を調査区内で確保する必要性から、対象地を3分割(92-①・②・③区)して、南側の92-①区より着手している。なお、②・③区の間は隣接住宅への生活道路が存在したことから調査対象外とした。

①区は竪穴住居群が検出され、これらの調査を終えた9月22日より下層遺構の確認作業を実施した。その結果、SD1を検出し遺構の存在が明らかとなったが、1次面調査遺構直下に分布することが把握された。南端部において地山漸移層である黒色土層まで掘り下げを行ったが、遺構・遺物の確認はなかった。このため、調査済の竪穴住居の床面断割調査に合わせて下層遺構確認面を確定し掘り下げを実施した。2次面は柱穴群を主体とし、9月29日に写真撮影、30日に遺構実測を行い、①区の調査を完了した。

②区は①区の調査が完了した9月30日に着手した。表土掘削に並行して遺構検出を実施したが、従前に把握されていなかった水道管等の埋設が確認され、これらを逐一検出しながらの表土掘削・遺構検出作業となった。1次面は溝・土坑群が主な遺構で、10月7日に写真撮影ならびに遺構実測作業を実施し、2次面の掘削作業に着手した。①区同様に1次

面直下に2次面が設定されたことから掘削土量はさほどではなく、翌8日にはほぼ完了した。溝・土坑の分布は希薄で、13日に写真撮影、14日に遺構実測を行い、②地区の調査を完了した。

②区の調査完了後埋め戻し作業を行い、③地区は10月19日に着手した。1次面では水田面が確認されたが、確認面直上まで攪拌が及び一部で水田層が検出されたに過ぎない。残



平成4年度調査実施状況

地区名	調査面	調査実施期間	調査期間	実質稼働日数 (対象面積)
92-①区	1次面	平成4年9月14日～9月25日	平成4年9月14日 ～ 平成4年10月29日	31日 (1500m <sup>2</sup> )
92-①区	2次面	平成4年9月22日～9月30日		
92-②区	1次面	平成4年9月30日～10月7日		
92-②区	2次面	平成4年10月8日～10月14日		
92-③区	1次面	平成4年10月19日～10月24日		
92-③区	2次面	平成4年10月22日～10月28日		
97-①区	1次面	平成9年7月30日～8月29日	平成9年7月30日 ～ 平成10年3月16日	68日 (770m <sup>2</sup> )
97-①区	2次面	平成9年9月1日～9月18日		
97-①区	3次面	平成9年9月19日～10月2日		
97-②区	1次面	平成9年11月25日～12月22日		
97-②区	2次面	平成10年1月8日～2月2日		
97-②区	3次面	平成10年3月2日～3月16日		
99-①区	1次面	平成11年7月14日～8月2日	平成11年7月12日 ～ 平成11年9月4日	33日 (670m <sup>2</sup> )
99-①区	2次面	平成11年8月4日～8月11日		
99-②区	1次面	平成11年7月22日～8月5日		
99-②区	2次面	平成11年8月6日～8月23日		
99-③区	1次面	平成11年8月18日		
99-③区	2次面	平成11年8月18日～9月3日		

表1 調査実施状況一覧表

存状況は良くなく、合わせて検出された溝・土坑の調査を行い、26日に作業を完了した。1次面調査中の22日には調査完了地点にて試掘坑を設定し、2次面の包蔵状況の確認作業を行った。完了後、2次面調査を実施し、土器・礫等の集中遺構の調査を実施し、10月28日に全ての作業を完了した。

なお、平成5年度は当初、南半部の調査を予定したが、未買収が存在するうえ、取得済地についても作付け許可による調査実施時期の問題が存在し、さらには県道バイパスが本格化する以前で緊急性がそれほど高くないことなどから発掘調査は実施せず、平成4年度調査に関する整理作業を実施している。

## 2 平成9年度の発掘調査

平成4年度の発掘調査以後、県道バイパス地点の事業進捗の推移により発掘調査の実施は見合わせていたが、平成7年度に着手した県道バイパス地点の発掘調査が隣接区域まで達したため、平成9年度に未調査の南半部の発掘調査を実施した。

平成9年度は10月1日に開業を控える北陸新幹線建設工事が最終段階を迎え、また、県道バイパス建設についても新幹線ならびに並行する信越本線のアンダーパス工事が本格的に着工しており、事業予定地は工事用仮設道路として、頻繁な工事車両の出入りが認められた。このため、北陸新幹線建設に伴う大型車両の通行や資材等の搬出完了後の6月26日に長野建設事務所・長野県企業局・JR東日本・株式会社竹中土木・川中島建設株式会社・長野市篠ノ井支所土木課との協議を実施し、未調査の南半部について東側用地際部に工事用仮設道路を設置して発掘調査を実施し、仮設道路下は切り替え工事を行ったうえであらためて発掘調査を実施することとなった。7月9日に株式会社竹中土木・東洋配管株式会社・株式会社長野パイプ工業との最終協議を行い、本事業地と県道バイパス事業地の直交接続部を大型車両が進入する際の安全確保から、仮設道路の西側設置への変更を確認した。地元説明会を経て、仮設道路が設置された7月30日に南半部東側約2/3の発掘調査に着手した。

調査区は対象地のほぼ中央に隣接畑地への出入口がみられたことから2分割し、北側を①区、南側を②区とした。発掘調査は北側の①区より着手している。遺構確認面は隣接する92-①区の状況ならびに近在地で調査を実施していた県道バイパス地点を参考に決定している。遺構検出作業は8月4日に着手し、平安時代を主体とした竪穴住居等を確認し、92-①区から連続していることが把握された。1週間の盆休みを挟み、8月29日に遺構実測を行い、1次面の調査を完了した。

隣接する92-①区では2次面が設定されたことから、本区でも遺構断割トレンチの精査により、検出遺構直下に別遺構が存在していることを確認した。これらの遺構調査を目的に2次面を設定している。9月1日より重機を援用して2次面掘削を実施し、9月10日に遺構検出作

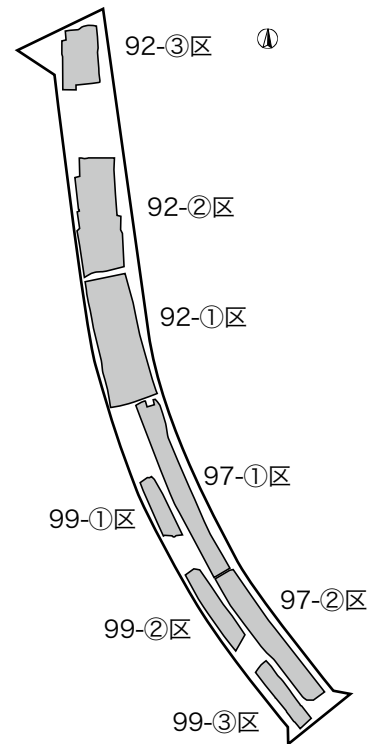


図2 調査区名 (S=1:1,000)



平成9年度調査実施状況

業に着手した。1次面検出遺構直下より溝・土坑・ピットが散発的に検出されている。また、遺構分布がほとんどみられない地点にA～Dトレンチを設定し、さらに下層の状況把握に努めた。9月18日に遺構実測を実施し、2次面の調査を終了した。2次面調査時に設定したA～Dトレンチでは微量ながらも遺物の出土がみられたため、3次面調査を行っている。9月19日に重機援用による掘削作業を行い、24日に遺構検出に着手した。溝・土坑・ピットが検出され、10月2日に遺構実測を行い、①区の調査を完了した。

①区埋め戻し後、隣接畑地への出入口を新たに設置して調査区を確保した。この結果、①区と②区は未調査部分を持たずに連続する。出入口部付け替え作業完了後直ぐに②区の調査に着手する予定であったが、県道バイパス建設工事に伴う大型重機類の搬入出が予定されていたため、これを避けて表土掘削を進め、11月25日に②区の調査に着手した。1次面では北側を中心に竪穴住居群が検出された。北側より順次西側へ調査を進め、12月22日

に最終の写真撮影ならびに遺構実測を実施し、1次面の調査を終了した。2次面は年が明けた平成10年1月8日より表土掘削に着手した。夜間の降雪に悩まされながら14日に遺構検出、20日に遺構調査に着手した。1次面同様に北側を中心に竪穴住居が検出されている。1次面でプランが不明瞭であった平安時代住居を含め、調査を実施している。2月2日に最終の遺構実測作業を行い、2次面の調査を終了した。この後、①区同様に3次面の調査を予定したが、2月7日開幕の長野オリンピックを控え、オリンピック期間中は発掘調査を中断するという当初の協議事項に従い、オリンピック閉幕まで調査を中断した。3次面の表土掘削は3月2日に着手した。4日に遺構検出作業を行い、検出遺構の調査を実施した。溝・土坑・ピットが検出され、3月12・16日に遺構実測を行い、②区の調査を完了した。この後、埋め戻し作業に合わせて器材等の撤収を行い、予定された現地作業を完了した。



平成9年度調査実施状況

### 3 平成11年度の調査

当初計画では平成10年度に未調査の南半部西側の調査を実施する予定であったが、県道バイパス地点における発掘調査が密集した竪穴住居群の検出により予定を大幅に超過し、一連の工事中仮設道路の切り替え工事が平成11年度へと延期された。このため、未調査部分の発掘調査は平成11年度に実施している。

発掘調査は平成9年度調査同様に全面を対象としたが、工事中仮設道路が隣接畑地への農道としても利用され、それぞれの畑地への取付道も実質的なものとなっていた。このため、切り回しによる取付道の確保は難しく、すべての畑地へ出入り可能なように仮設道からの取付道を2カ所へ集約し、基本的に調査対象から外すこととした。これにより調査区は3分割され、北から99-①・②・③区と呼称した。

発掘調査は7月12日に99-①区に着手したが、連日の降雨により、実質的な作業は21日からとなった。1次面では県道バイパス地点でも検出されていた方形ピットが検出された。この方形ピット群の掘り下げならびに実測

を22日に実施し、方形ピット群下で検出された竪穴住居の調査へと移行した。住居群は8月2日に遺構実測を完了し、1次面の調査を終了した。

2次面は1次面調査終了後直ぐに重機援用による掘削作業に着手し、4日より検出作業に着手した。9日に全景写真、11日に遺構実測作業を完了し、12日の埋め戻しをもって①区の調査を終了した。

99-②区は①区の表土掘削が完了した7月21日に着手した。7月26日より検出作業を実施し、①区と併行して調査を実施している。1次面では①区同様に方形ピット群が検出された。7月28日に写真撮影を行い、8月5日に実測を完了している。①区では方形ピット群下に平安時代を主体とした遺構プランが検出されたが、本区では存在は確認できるもののプラン把握が不明瞭であったことから、2次面として掘削作業を実施することとした。重機援用による調査面確定作業を実施し、8月9日に検出作業に着手した。12日より一週間の盆休みを挟んで、19日に写真撮影、23日に遺構実測を完了し、②地点の調査を終了した。

99-③区は8月18日に表土掘削作業に着手した。①・②区同様に方形ピット群の検出を想定し、19日に検出作業を行ったが、本区では検出されなかった。このため、1次確認面はなしとして翌20日より2次面掘削作業を開始した。8月24日に遺構調査を開始し、9月2日に写真撮影、9月3日に遺構実測を完了した。翌4日に埋め戻しを終了し、③区の調査を完了した。

なお、97-①・②区では3次面を設定しているが、不整形の溝・土坑・ピットが検出されるに止まり、ほとんど遺物を含んでいないことや本地点での井戸壁面観察ならびに竪穴住居床面断割トレンチによる下層状況の確認により下層遺構の包蔵が認められないことから3次面は設定しなかった。

### 3 整理作業の経過

整理作業は発掘調査を実施した翌年度（平成5・10・12年度）にそれぞれ前年度に実施した発掘調査に関わる基本的な整理作業を実施した。調査区別の整理内容を総合した整理作業は平成13年度より着手している。ただし、平成13～14年度は篠ノ井遺跡群県道バイパス地点の発掘調査を継続させる一方で、同地点の平成7～11年度調査分（Ⅰ区～Ⅸ区）についての調査報告書刊行が予定されていたため、これに関わる整理作業によって担当者が本地点の整理作業に主体的に関わる状況になかった。また、平成15年度以降も発掘調査継続中の篠ノ井遺跡群県道バイパス地点Ⅹ区～ⅩⅢ区・A区～D区の調査報告書が控えていたため、本地点に関わる集中的な整理作業の実施は県道バイパス地点の作業完了後まで難しいと予測された。このため、担当者専従でなくとも進められる作業について各年度に振り分け、徐々にではあるが着実に作業を進めておく方法をとることとした。

平成13年度は出土遺物の洗浄作業に着手するとともに各調査区を統合した全体図の作成を実施した。平成15年度は埋蔵文化財センター内での出土遺物洗浄作業が難しい状況であったため、県道バイパス地点にて洗浄作業を実施し、これを完了した。また、接合作業準備のための分類作業も実施している。図面類に関しては個別遺構図の作成に着手した。平成16～17年度は出土遺物の注記作業ならびに接合作業を実施した。接合は16年度に各調査区内での接合を行い、17年度は異なる調査区間での接合作業を実施している。出土遺物の実測は平成18～19年度に実施した。また、19年度は出土遺物ならびに遺構図の浄書に併行して、報告書の執筆・編集作業を行った。そして、平成23年度に入札・契約事務を経て、平成24年3月30日付で刊行の運びとなっている。

### 3 調査体制

本調査は、篠ノ井支所土木課長より依頼を受けて、長野市教育委員会の直轄事業として埋蔵文化財センターが担当した。組織・体制は以下のとおりである。

【平成4・5年度】 調査主体者 長野市教育委員会 教育長 奥村秀雄

調査機関	埋蔵文化財センター	所長	小山正
庶務担当	所長補佐 山中武徳	事務職員	青木厚子
調査担当	調査係長 矢口忠良		
	主査 青木和明 (調査担当)	専門員	中殿章子
	主事 千野浩	専門員	横山かよ子
	主事 飯島哲也	専門員	寺島孝典 (調査担当)
	専門主事 小林安和	専門員	笠井敦子
	専門主事 羽場卓雄 (調査担当)	専門員	山崎佐織
	専門主事 太田重成	専門員	山田美弥子
発掘参加者	内山直子 岸田武子 北沢やすい 北村利雄 駒村より子 清水節子 高橋清子 田中きよ江 西沢乾 西沢正子 祢津千恵子 深沢優子 南沢近登 三宅計佐美 三宅利正 宮崎和子 矢島喜和子 山田令子		
整理調査員	青木善子 矢口栄子		
整理参加者	池田見紀 岡沢治子 小泉ひろ美 千葉博俊 徳成奈於子 西尾千枝 向山純子 武藤信子		

【平成9～15年度】調査主体者 長野市教育委員会 教育長 滝澤忠男 (～10年度)

久保健 (11～13年度)

立岩睦秀 (14年度～)

調査機関	埋蔵文化財センター	所長	丸田修三 (9年度) 小林重夫 (10年度) 中島昌之 (11年度) 磯野久夫 (12年度～)
庶務担当	所長補佐 小林重夫 (9年度)	宮沢秀幸 (10年度)	
	係長 北村実寛 (11～13年度)	山岸恒雄 (14年度～)	
	事務職員 青木厚子	事務員 塚田容子	
調査担当	所長補佐 矢口忠良	専門員 山田美弥子	
	係長 青木和明 (～9年度・15年度)	専門員 西沢真弓	
	係長 千野浩	専門員 小野由美子	
	主査 飯島哲也	専門員 堀内健次 (H9調査・整理担当)	
	主事 風間栄一 (H11調査担当)	専門員 藤田隆之	
	主事 小林和子 (H9調査担当)	専門員 小林まゆ佳 (～11年度)	
	専門主事 清水武 (9年度)	専門員 宮川明美 (8年度～)	
	専門主事 荒木宏 (10～12年度)	専門員 清水竜太 (10年度～)	
	専門員 中殿章子 (H11調査担当)	専門員 内山梢 (13年度～)	
調査員	青木善子 池田寛子 多羅沢美恵子 鳥羽徳子 武藤信子 矢口栄子		

発掘参加者 伊藤正美 今井高司 内山国子 小林義光 桜井志げ子 塩野入仁一郎 袖山 弘  
曾根川好武 田辺美江子 中沢ヒデ子 西村甲子朗 平林春男 福島幸子 藤井 恵  
町田貞義 町田登吾 山本芳子

整理参加者 小泉ひろ美 倉島敬子 清水さゆり 関崎文子 田中はま江 富田景子 西尾千枝 三好明子  
松澤ナオエ 向山純子 村松正子 石坂好子 大矢ひろ子 岸田武子 北沢やすい 清水節子  
倉石みつ江 曾根川好武 塩原恵美子 島田茂子 鈴木竹子 中沢ヒデ子 藤本百合  
福島幸子 松崎とみ子 丸山美知子 宮崎和子 矢島秀子 山田令子 山本芳子 若林ひろ子

遺構測量委託 株式会社写真測図研究所 代表取締役 杉本幸治

重機掘削業務 川中島建設株式会社 取締役社長 加藤正男

【平成16～19年度・23年度】

調査主体者 長野市教育委員会 教 育 長 立岩陸秀（～19年度）  
堀内征司（23年度）

調査機関 埋蔵文化財センター 所 長 矢口忠良（～18年度） 青木和明（19年度～）

庶務担当 係 長 山岸恒雄（～16年度） 事務職員 吉村久江（16～19年度）  
宮沢和雄（17年度～） 事務職員 大竹千春（23年度）  
北村嘉孝（23年度） 事務員 塚田容子（～18年度）

調査担当 係 長 青木和明（～18年度） 専門員 森田利枝（～18年度）  
主査・係長 飯島哲也（16・23年度） 専門員 宮沢浩司（～17年度）  
主 査 風間栄一（整理担当） 専門員 山岸千晃（～19年度）  
主 査 小林和子 専門員 加藤卓也（17年度）  
主 事 宿野隆史（17年度～） 専門員 小池勝典（18～19年度）  
主 事 塚原秀之（23年度） 専門員 柴田洋孝（18～19年度）  
専門員 堀内健次（整理担当～17年度） 専門員 向山純子（19年度）  
専門員 清水竜太（～17年度） 専門員 佐々木麻由子（19年度）  
専門員 遠藤恵実子（整理担当） 専門員 山本賢治（23年度）  
専門員 長瀬 出（～19年度） 専門員 柳生俊樹（23年度）  
専門員 山野井智子 専門員 高田亜紀子（23年度）  
専門員 石丸敦史（～18年度） 専門員 平林大樹（23年度）  
専門員 小出泰弘（～18年度）

整理調査員 青木善子 池田寛子 多羅沢美恵子 鳥羽徳子 中殿章子 武藤信子 矢口栄子

整理参加者 小泉ひろ美 倉島敬子 清水さゆり 関崎文子 富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子

発掘調査の実施においては、工事担当である篠ノ井支所土木課に各種調整等でご配慮をいただいた。また、工事請負業者である川中島建設株式会社、隣接区域工事請負業者である株式会社竹中土木には発掘調査の円滑な実施について多大なご協力をいただいた。周辺住民ならびに畑地耕作者の皆さんにはご不便をおかけしたが、区長をはじめ地元皆様のご理解・ご協力により円滑に調査を実施することができた。

また、調査実施経過の中で多くの方々・諸機関よりご協力を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表します。

青木一男 伊丹 徹 白居直之 太田博之 加部二生 桐原 健 小林秀夫 百瀬長秀

長野県教育委員会 長野県立歴史館 長野県埋蔵文化財センター（敬称略）

## Ⅱ 篠ノ井遺跡群の位置と調査地点

### 1 篠ノ井遺跡群の位置

篠ノ井遺跡群が所在する長野県長野市は、日本列島中央部、日本の屋根とも称される2～3000m級の山々に囲まれた中部高地北部の長野盆地に位置する。

長野盆地では南北に盆地を縦断して北流する千曲川を基幹として、東西の山地より流れ出る大小様々の河川によって形成される扇状地が発達する。特に千曲川左岸の犀川・裾花川・浅川によって形成される扇状地は裾部を接して巨大な複合扇状地を形成する。

これらの扇状地末端部に接する盆地底の千曲川流域では自然堤防の発達が見られる。長野盆地へ流入した千曲川は、犀川扇状地の押し出しによって盆地東側に流路をとるが、篠ノ井遺跡群はこの千曲川が流路を東に変じた左岸自然堤防上に位置する。

篠ノ井遺跡群を含む長野盆地南部域の自然堤防上には、左岸に横田・篠ノ井・塩崎（以上長野市）・八幡（千曲市）の各遺跡群、右岸に土口・屋代・粟佐の各遺跡群（以上千曲市）が連続して展開し、長野盆地有数の遺跡密集地となっている。間断のない遺構分布のため自然堤防を貫く河川によって遺跡が区分され、岡田川と聖川によってそれぞれ横田遺跡群や塩崎遺跡群と地形上分断される範囲を篠ノ井遺跡群として把握している。この間2kmに及び、地籍名は実に25を数える。

自然堤防背後には後背湿地が発達し、左岸域で石川条里遺跡、右岸域で更埴条里遺跡として弥生時代以来の水田域であることが確認されている。特に条里景観を現在まで残し、集落域と生産域が一体となった歴史的景観をみることが出来る希有な地域となっている。

また、古墳時代前中期には地域を代表する前方後円墳群がこの地域を取り囲むよりも築造され、屋代遺跡群出土木簡より古代においても政治・物流の中心地であったことが知られる。いずれの時代においても長野盆地の歴史を語る上で欠かせない、重要な歴史的空間であることが特筆される。

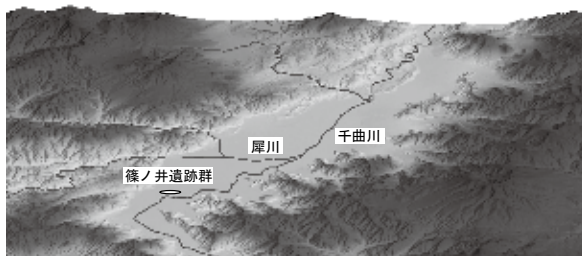
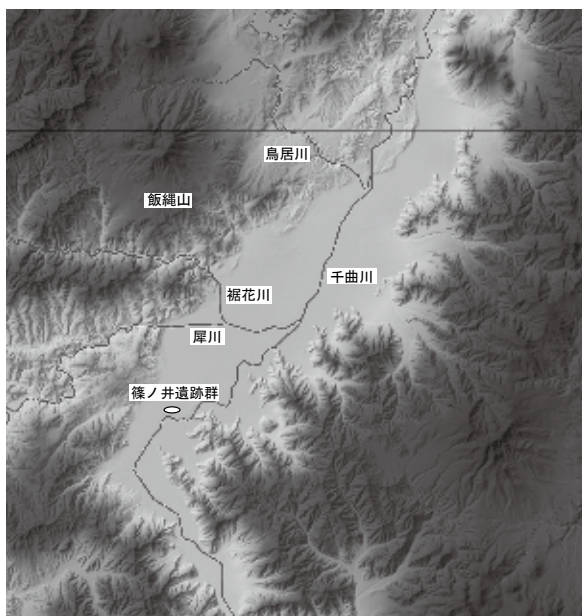
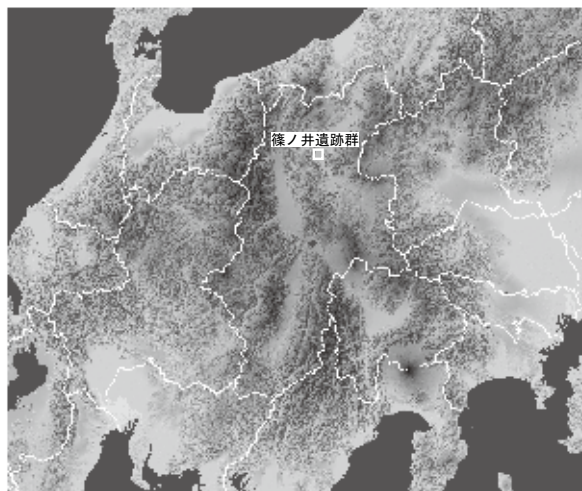


図3 篠ノ井遺跡群の位置図





調査地周辺空撮写真

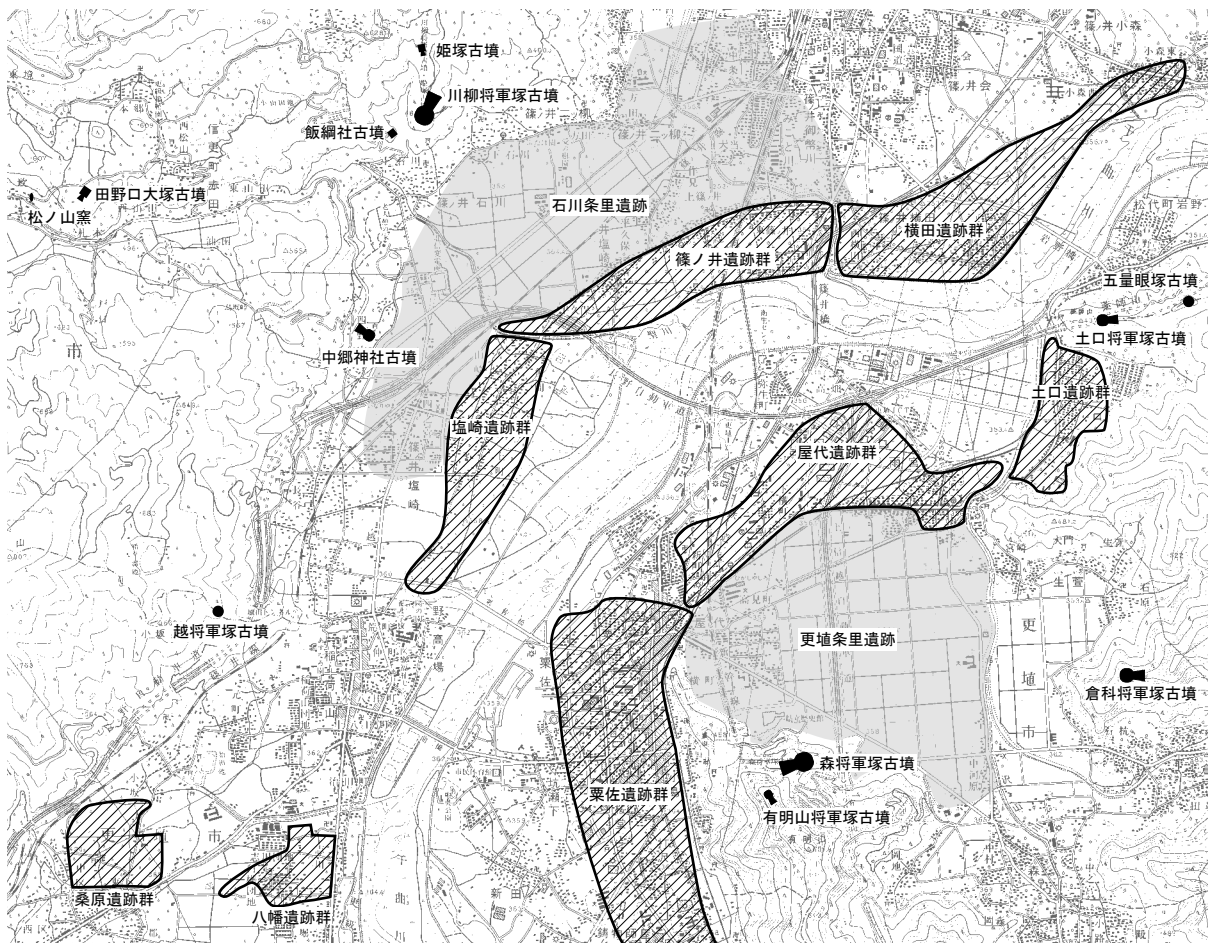


図4 篠ノ井遺跡群と周辺遺跡分布図 (S=1:50,000)

## 2 篠ノ井遺跡群と調査地点

篠ノ井遺跡群の範囲内では、これまでに長野市教育委員会ならびに長野県埋蔵文化財センターによって複数地点の発掘調査が実施されている。東西2kmに及ぶ遺跡範囲内では、道路・鉄道・河川堤防等の建設に先立つ発掘調査によって、ほぼ全域に発掘調査区が設けられた状況となっている。これらの調査成果を総合すると、各時代の集落域・墓域の変遷が大雑把であるが把握することができる段階に至ったと考えられる。

本書にて報告する市道塩崎中央線地点は、遺跡中央部を横断する主要地方道長野上田線塩崎バイパス地点より北に延びる調査区で、遺跡北半部の状況を示す事例となる。現在の県道77号線は幹線として古く遡るとする見解もあり、篠ノ井遺跡群の構造把握上、北側の状況は遺構の多寡以上に大きな意味を持つ。多くの調査区が南側に位置し、明瞭でない北側の状況を補う調査成果として、本地点は少なからぬ意味を持っていると評価される。

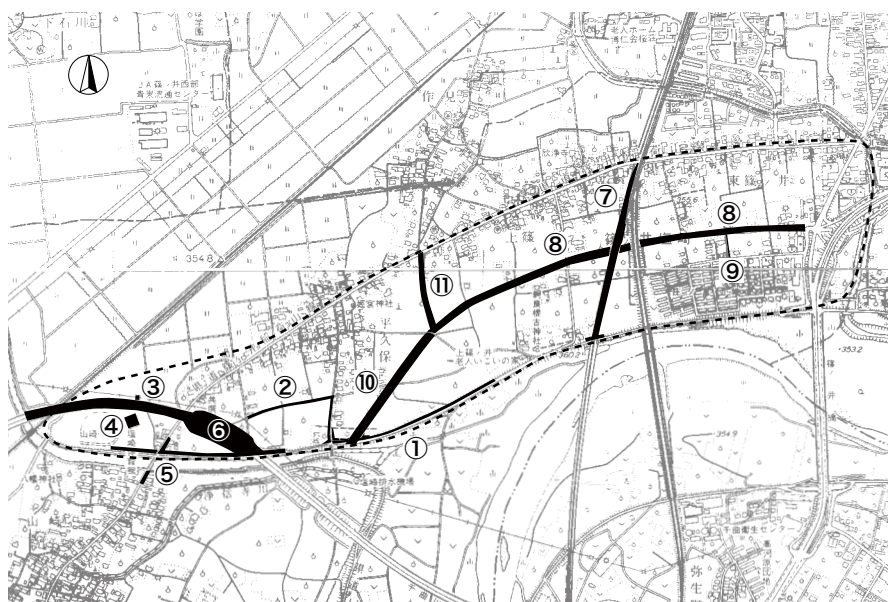


図5 篠ノ井遺跡群発掘調査実施位置図 (S=1:20,000)

番号	地点名	調査年度	弥生	古墳	奈良	平安	特徴	報告書名
①	大規模自転車道地点	昭和54年度	○	○		○	各時代の集落	『篠ノ井遺跡群』長野市教育委員会
②	市道山崎唐猫線地点	昭和63年度	○	○		○	弥生環壕 平安集落	『篠ノ井遺跡群Ⅱ』長野市教育委員会
③	中部電力鉄塔地点	平成元年度	○	○			自然堤防北端	『篠ノ井遺跡群Ⅲ』長野市教育委員会
④	市営塩崎体育館地点	平成元年度	○	○				『篠ノ井遺跡群Ⅲ』長野市教育委員会
⑤	聖川堤防地点	昭和55年度～平成3年度	○	○	○	○	古墳前期墓域	『篠ノ井遺跡群(4)』長野市教育委員会
⑥	高速道地点	昭和63年度～平成3年度	○	○	○	○	弥生環壕集落	『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16』
⑦	新幹線地点	平成5年度～平成7年度	○	○	○	○	弥生時代墓域 古代集落	『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4』 (財)長野県埋蔵文化財センターほか
⑧	(主)長野上田線 塩崎バイパス地点 (長野県単独事業地点)	平成7～平成13年度	○	○	○	○	各時代の集落	『篠ノ井遺跡群(5)』長野市教育委員会
⑨	市道篠ノ井大当線地点	平成7・9年度			○	○	集落の南域	『篠ノ井遺跡群(5)』長野市教育委員会
⑩	(主)長野上田線 塩崎バイパス地点 (国庫補助事業地点)	平成11年度～平成18年度	○	○	○	○	各時代の集落 古墳群	『篠ノ井遺跡群(6)』長野市教育委員会
⑪	市道塩崎中央線地点	平成4年度～平成11年度	○	○	○	○	集落の北域	本書

表2 篠ノ井遺跡群発掘調査地点一覧表

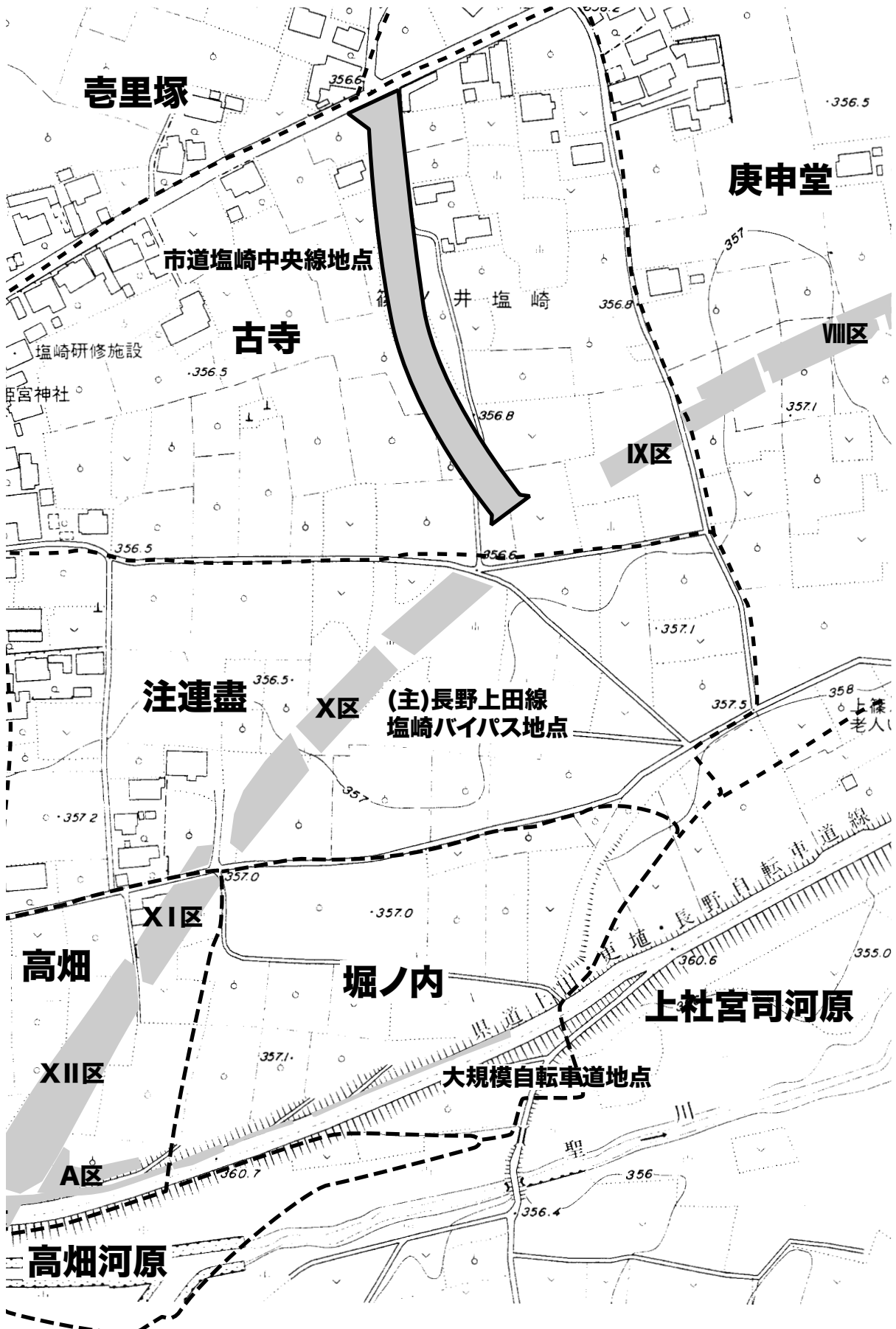


図6 調査地点と字名 (S=1:2,500)

### Ⅲ 発掘調査の概要

#### 1 調査区の概要

調査では、92調査区では2次面を、97・99調査区では3面次までを確認した。92調査区では明確な遺構の検出がみられたのは②・③区であり、上面は土坑のみが、下面において各時代の住居などの遺構を確認した。尚、③区は北端に離れた位置にあり、東区で土器や石が集中している場所(SX1)がみられたが、調査区壁面観察から東西方向の自然の落ち込みと判断されるもので、同じく西区にみられるSX2も一連のものと考えられる。97調査区では第3次面まで遺構が確認された。ここでは、1次面は調査区全体に遺構が展開し、2次面では時期は1次面と大差ないものの遺構は南側にのみ展開する。3次面では、本調査では唯一となる弥生時代後

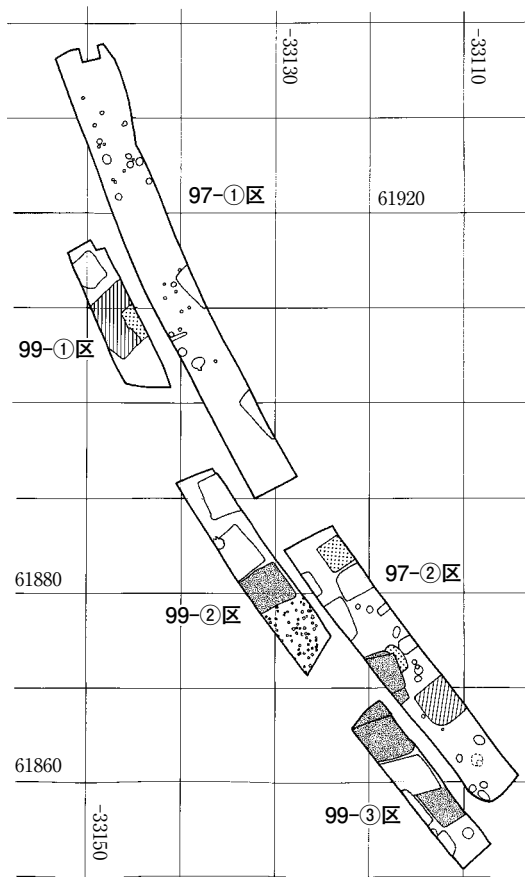


図8 2次面(97・99年度)全体図(S=1:800)

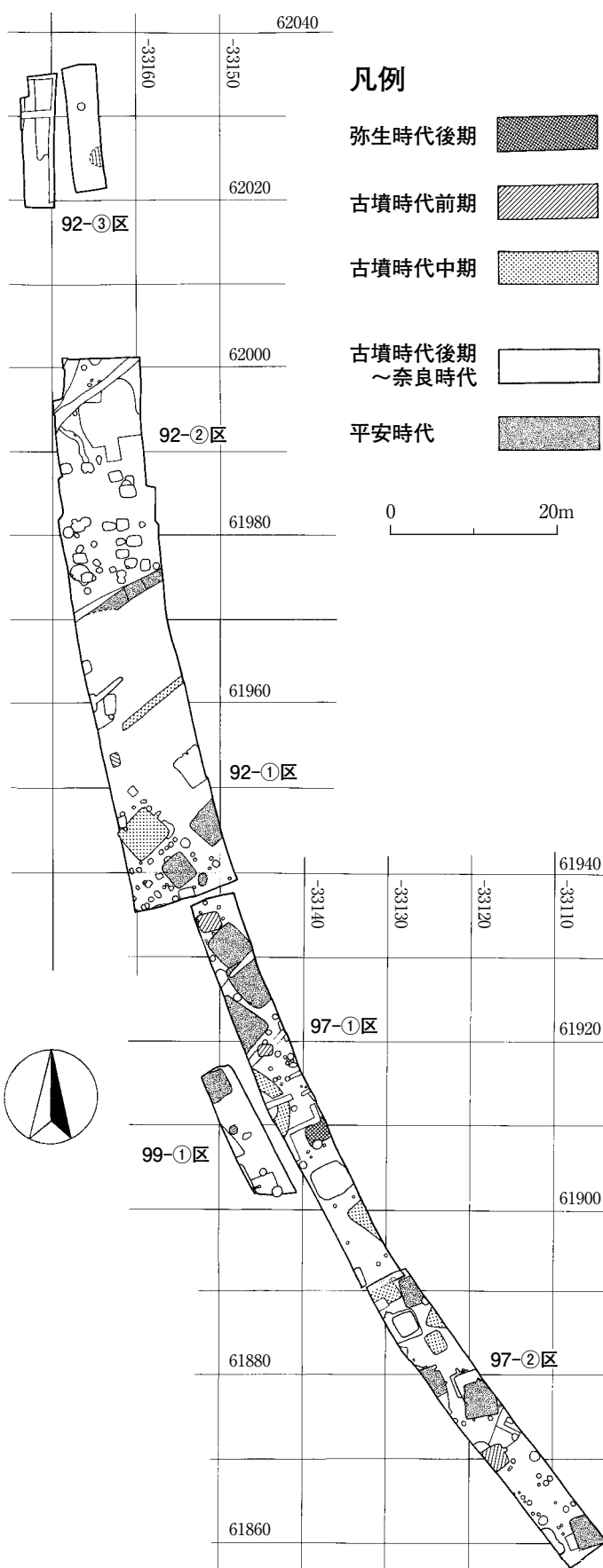


図7 1次面全体図(S=1:800)

#### 凡例

- 弥生時代後期
- 古墳時代前期
- 古墳時代中期
- 古墳時代後期  
～奈良時代
- 平安時代

0 20m

期の住居が南端にみられるのみとなる。99調査区は、住居等遺構が展開する1・2次面と、0次面として、25～40cm大の方形のピットが全体に掘り込まれた「方形ピット群」が展開する。このピット群は、99調査区の北側から4/3程度と、②区2次面の南半の範囲でみられ、本調査全体からみると南半分までの範囲となる。なお、これと同様の掘り込みは本調査区と直行する長野上田線塩崎バイパス地点などにおいても広い範囲で確認されている。本調査区ではピットの並びに規則性はみられなかったが、一連の遺構の北端を確認したものである。

調査区全体で、遺構がみられるのは92調査区-②区までとなり、中でも遺構の主な展開は①区の南までとなる。これより南側は遺構の重複なども多く、比較的密に存在している。遺構は住居跡が中心でこの他には溝や土坑・井戸を検出している。2次面では、1次面と同じく住居跡が重複しながら密に存在しているが、範囲は97調査区-②区、99調査区-②・③区までとより南側で終息している。3面は97調査区のみであるが、住居跡は南端に一軒のみとなる。また、各面の高さが大きく違わず、異なった時期の遺構が重複しているため、1遺構内で時期の異なる土器が混在する例が多くみられた。

本調査区と直行する既存の遺跡の様子と合わせると、弥生時代後期までの遺構はこの範囲より南ではほぼ収束しているものとみられる。他の調査地点に比べ、遺構の検出自体は疎らであるが、弥生時代後期から平安時代にかけて連続して存在している。時期では遺構が多く遺跡の中心となる調査地点と同じ様相であり、弥生時代後期では調査区よりも南側で終息し、古墳時代前期・中期では南半まで疎らに遺構がみられ、後期以降平安時代までは特に住居跡が密に存在しながら北寄りの位置で終息している様子が確認できる。住居跡の他は土坑や溝跡などで、弥生時代～古墳時代にかけてこの他の遺跡内においてみられる周溝墓や居住以外の性格がうかがわれる遺構はみられず、本調査区では居住域の確認のみがされたものである。

## 2 時期別遺構の概要

調査では、遺構の検出に対して土器の出土が少ない傾向にあった。特に土坑や溝では遺物から時期を判断するに至らなかったものが多くみられた。この中で時期の判断ができたものについての検出数を「表3 遺構時期数」にまとめた。また「表4 遺構表」では、住居跡は全部を、この他の遺構では土器は実測図の掲載があるもの、または石器・その他の遺物は実測の有無に関わらず出土があった遺構を表記している。

### 弥生時代後期

この時期の遺構は、97-②区-3面に住居跡1軒(SB1)と97-①区-1面で不確かではあるが、当期の土器片が主に出土した不明遺構(SX1)1基である。本調査区は当時期のほぼ遺構範囲外にあたるものと考えられる。土器は遺構からの出土量は多くないが、検出面や他の掘り込みからの土器片の出土がみられる。

### 古墳時代前期

遺構の数は少なく、疎らに調査区全体の南半内で検出された。97調査区の範囲まで遺構はみられるが住居域としてはさらに南側で終息している。92調査区-③区の東において、土器と石が一ヶ所に集中してみられる場所(SX2)があるが、自然の落ち込みに土器や石を入れたものと判断される。住居跡は3軒が1次面から2次面にかけてそれぞれ離れて位置している。遺構からの土器の出土は少なく、これに比べて検出面などからの出土がみられる。また、特筆される遺物として琴柱形石製品がある。遺構に伴った出土ではないが、遺跡群の中でも類例のない遺物である。

### 古墳時代中期

遺構は前の時期よりも多く、92調査区の南半までみられる。住居は8軒、疎らではあるものの97・99調査区では

全体に広がっている。検出が一部のものが多く遺物の出土も少ないが、唯一全体を検出できた92-SB4では遺物が良好に出土している。97-①区-1では円形に曲がる溝が検出されたが、続く99調査区では確認できず性格は不明である。また97調査区3面では弥生時代住居の他で時期が確認できた遺構（SD1・SX1）はこの時期のものである。

#### 古墳時代後期～奈良時代

平安時代に次いで遺構が多い。1次面から2次面にかけてみられ、住居跡14軒、時期が確認できた土坑30基、ほか溝や井戸を検出した。92調査区南側まで点在し、重複や接している例がみられる。92調査区北端に溝が2条あり、この内SD3では完形など残りの良い土器の出土が多い。92-③区で自然地形となることを踏まえ、この溝の区画をもってほぼ遺構の北端となるものと考えられる。

住居で検出状況が良好なのは92-SB5で、土器の出土量も多いが、完形やそれに近い平安時代土器を含んでいる。遺物の出土位置から、古墳後期の住居に、平安時代の別の遺構が重複していたものと判断した。また、99-③区-2SB13では、覆土中から石製模造品有孔円板9点と剣形1点が、99-①区-1SE1からは琴柱形石製品が出土している。有孔円板は全部で10点出土しており、残りの1点も周辺の検出面であることから、住居1軒のみに集中させている様子がみられる。

#### 平安時代

本調査区の中で最も遺構の多い時期である。住居19軒、時期の確認ができた土坑22基、性格不明遺構など。遺跡内での遺構の広がり方はほぼ同じであるが、やや北側に集中している様子がみられる。特に住居跡からの土器の出土量は多く、他の時期の遺構への混入を含め遺物量が最も多い。

同じ次面で複数の時期の住居域として展開した中の最後の時期であり、住居の検出も、調査区外にかかる点を除けば重複などによる攪乱はなく、カマドなどの検出状況も遺構廃棄時の様子を残す良好なものである。

#### 平安時代以降

平安時代以降は、方形ピット群と92調査区上面の土坑群がみられる。土坑群では方形のものが東西方向に並ぶが、遺物の出土はみられない。方形ピットでは土器片が出土しているが、99調査区2面で遺構にも影響していることから、遺構に伴うものではないと判断される。いずれも居住域が終わった後に、別の土地利用が行われたものと考えられる。

表3 時期別検出遺構数

時 期			弥生後期			古墳前期			古墳中期			古墳後期～奈良				平 安				不明
遺 構			SB	SK	SX他	SB	SK	SX他	SB	SK	SD	SB	SK	SD	SX他	SB	SK	SD	SX他	SB
年	区	面	住居	土坑	他遺構	住居	土坑	他遺構	住居	土坑	溝	住居	土坑	溝	他遺構	住居	土坑	溝	他遺構	住居
92							1	1	1	1	1	9	3		3	9	1			
97	1	1			1		2	1	1		1	8		1	3	6				1
	1	2																		2
	1	3											2							
	2	1		2		1	2	1	3			4	5		6	5				
	2	2				1			2			4			2	2	1			3
99	2	3	1		1	1	1			1	1		1							
	1	1										2			2	1				2
	1	2				1														1
	2	1																		2
	2	2										2			1					1
	3	2									4	3		1	3					1
計			1	2	2	4	6	3	7	2	3	14	30	5	4	19	22	2	6	9

表4 遺構表

遺 構							遺 物				
調査区			遺構 (略記号)	時期	検出形態		重 複 他	個別 図版	土 器	他 遺 物	
年	区	面			(規模：m)	率			実測数/図版	実測種・数	実測なし
92		1	1号住居 (SB1)	平安	隅丸方形 3.6×3.0	全		図30	8 図61-132~139		鉄製品・軽石
92		1	2号住居 (SB2)	平安	隅丸方形 4.5×3.9	2/3		図30	5 図61-140~144	敲石1・軽石1	
92		1	3号住居 (SB3)	平安	方形？	一部			1 図61-145		
92		1	4号住居 (SB4)	古墳 中期	正方形 4.9×4.6	全		図30	10 図31-26~35	砥石1	軽石
92		1	5号住居 (SB5)	古墳後 ~奈良	正方形 3.9×3.6	2/3	平安時代遺構が 重複していたか (平安土器混)	図30	11 図45-74~84		鉄製品・軽石
92		1	1号溝 (SD1)		幅0.9	一部	東西方向				ミガキ石
92		1	2号溝 (SD2)		幅0.7	一部	東西方向				剥片
92		1	3号溝 (SD3)	古墳 中期	幅0.85~1.6	一部	東西方向		8 図44-53~60	磨き石1・管 玉1・白玉3	軽石
92		1	4号溝 (SD4)		幅1.5	一部	南北方向				台石？
92		1	5号溝 (SD5)		幅1.3~2.2	一部	東西方向			凹石1・磨石 1・土錘1	鉄製品・軽 石・凹石
92		1	1号土坑 (SK1)	古墳 後期	隅丸方形 1.8×	1/2					軽石
92		1	2号土坑 (SK2)	平安	楕円形 長径1.3	全	ウマ埋納 元は2段堀りの 井戸	図88			獣骨（ウマ）
92		1	SK3	古墳後	隅丸方形	全					軽石
92		1	6号土坑 (SK6)	古墳 前期	方形 1.4×1.0	全			1 図28-14		
92		1	SK9	平安	円形 1.0	全				磨石1	ミガキ石
92		1	SK10	古墳							鉄製品
92		1	SK13	平安	方形 1.7	全					軽石
92		1	SK14	奈・平	方形 1.7	全					
92		1	SK15		方形 0.9	全					銅銭・鉄製品
92		1	SK17	平安	円形 1.2	全					台石
92		1	SK19	平安	方形 0.8	全					銅銭
92		1	SK21	平安	不整形 1.5	全					銅銭
92		1	SK23		方形 1.2	全					鉄製品
92		1	SK28								鉄製品
92		1	SK31								軽石
92		1	SK32	平安							獣骨
92		1	SK35								獣骨
92		1	SK36								獣骨
92		1	SK37								獣骨
92		1	1号性格 不明遺構 (SX1)			1/2	範囲のみ				鉄製品・剥 片・カマド 材・軽石
92		1	2号性格 不明遺構 (SX2)	古墳 前期	不整形	一部			2 図28-17・18	軽石3	軽石・ミガキ 石・砥石

遺 構							遺 物				
調査区			遺構 (略記号)	時期	検出形態		重 複 他	個別 図版	土 器	他 遺物	
年	区	面			(規模：m)	率			実測数/図版	実測種・数	実測なし
92		1	P-8								鉄製品
92		1	P-8-15							砥石1	
92		1	検出面						17 図 28-20・21・ 23・24 図44-61 ～65・68 図60- 124～127・131 図87-270・274	砥石2・刃器1	銅銭・獣骨・ 炭・鉄製品・ 砥石・ミガキ 石・軽石
97	1	1		1号住居 (SB1)	平安	方形 6.3×	1/3		図62	12 図63-146～157	
97	1	1	2号住居 (SB2)	平安	長方形 5.9×4.3	1/2	SB3が重複	図64	13 図65-158～170	凹石1	鉄製品
97	1	1	3号住居 (SB3)	平安	長方形 ×4.0	3/4	SB2が重複	図66	16 図67-171～186	鉄製品2	剥片1
97	1	1	4号住居 (SB4)	古墳 中期	方形？	1/4		図32	3 図33-36～38		
97	1	1	5号住居 (SB5)		方形 2.4×	一部	2区-1SB12が重複				
97	1	1	6号住居 (SB6)		方形 2.5×	一部	SD3が重複				
97	1	1	(SB7)	住居で はない (溝？)			SB2に重複				鉄製品
97	1	1	2号溝 (SD2)	古墳 前期	幅1.3～1.9		円形に曲がる		1 図28-11		黒曜石剥片
97	1	1	1号土坑 (SK1)	古墳後 ～奈良	円形 径2.0						ミガキ石
97	1	1	2号土坑 (SK2)	平安	円形 径0.7				1 図87-267		
97	1	1	5号土坑 (SK5)	古墳 前期	方形 2.6×2.2	全			1 図28-13		
97	1	1	12号土坑 (SK12)	古墳 前期	円形 径0.7	全			1 図28-16		
97	1	1	1号性格 不明遺構 (SX1)	弥生 ～平安	不整形 2.8×2.5	全			2 図28-19 図87-268		
97	1	1	2号性格 不明遺構 (SX2)		不整形 3.9×3.6	4/5				砥石1	カマド部材・ 軽石
97	1	1	P-17								台石・ミガキ石
97	1	1	P-41	古墳 前期					1 図28-12		
97	1	1	検出面								鉄製品・剥片・ カマド部材？
97	1	2	1号住居 (SB1)		方形 3.4×	1/3					
97	1	2	(SB2)	欠番							
97	1	2	(SB3)	欠番							
97	1	2	4号住居 (SB4)		方形 ×2.1	1/4					
97	2	1	1号住居 (SB1)	平安	方形 3.4×	1/2		図68	8 図69-187～194		鉄製品
97	2	1	2号住居 (SB2)	平安	方形 3.8×	1/2	古墳前期土器が 混入	図70	8 図71-195～202		鉄製品



遺 構							遺 物				
調査区			遺構 (略記号)	時期	検出形態		重 複 他	個別 図版	土 器		
年	区	面			(規模：m)	率			実測数/図版	他 遺物	
								実測種・数	実測なし		
97	2	1	3号住居 (SB3)	古墳 中期	隅丸長方形 2.5×1.9	全		図36	1 図37-40		鉄製品
97	2	1	4号住居 (SB4)	古墳 中期	方形	1/4		図35	1 図34-39		
97	2	1	5号住居 (SB5)	古墳 中期		一部		図39	2 図38-41・42		
97	2	1	6号住居 (SB6)	平安	正方形 2.6×2.5	全	SB11に重複				
97	2	1	7号住居 (SB7)	平安		一部	SB8に重複される	図72	1 図73-203		鉄製品
97	2	1	8号住居 (SB8)	平安	方形 3.8×3.2	3/4	SB7を重複する	図72	11 図73-204~214		鉄製品
97	2	1	(SB7・8)	平安			覆土遺物が混じる		6 図73-215~220		
97	2	1	9号住居 (SB9)	古墳 前期	方形	1/2		図26	2 図27-9・10		
97	2	1	10号住居 (SB10)	古墳後 ~奈良	方形	1/2	SB7・8に重複される	図47	1 図46-85		
97	2	1	11号住居 (SB11)	古墳後 ~奈良	方形 4.1×	2/3	SB6が重複	図48	5 図49-87~91		
97	2	1	12号住居 (SB12)	平安	方形 3.8×	2/3	古墳前期土器が混入	図74	5 図75-221~225		ミガキ石
97	2	1	13号住居 (SB13)	古墳後 ~奈良	方形 2.7×	一部	SB10に重複される	図47	1 図46-86		
97	2	1	14号住居 (SB14)	古墳後 ~奈良	方形 ×3.6	一部	検出時はSK16・ 17・18	図50	8 図51-92~99		
97	2	1	1号土坑 (SK1)	平安	円形 径0.8				6 図87-261~266		
97	2	1	11号土坑 (SK11)	古墳 前期	楕円形 径1.3	全			1 図28-15		
97	2	1	(SK16)				97-2区-1 SB14				
97	2	1	(SK17)								
97	2	1	(SK18)								
97	2	1	P-3								鉄製品
97	2	1	検出面						10 図28-22・25 図44-66・67・69 ~73 図87-271	砥石2・軽石1	剥片・軽石
97	2	2	1号住居 (SB1)	平安	方形 4.0×	1/2	SB5に重複	図76	1 図77-226		鉄製品
97	2	2	2号住居 (SB2)	古墳 前期	方形? 4.4×	2/3		図22	3 図23-3~5		
97	2	2	3号住居 (SB3)		方形 4.5×	1/3					
97	2	2	4号住居 (SB4)		方形 ×3.0	一部					
97	2	2	5号住居 (SB5)	平安	方形 5.8×	1/3	SB1が重複 99-3区-2SB15 と同一	図76	2 図77-227・228	管玉1	
97	2	2	6号住居 (SB6)		方形 ×3.1	2/3					
97	2	2	7号住居 (SB7)	古墳 中期	方形 3.2×	2/3		図41	3 図40-43~45	管玉1	黒曜石剥片

遺 構							遺 物				
調査区			遺構 (略記号)	時期	検出形態		重 複 他	個別 図版	土 器		
年	区	面			(規模：m)	率			実測数/図版	実測種・数	実測なし
97	2	2	8号住居 (SB8)	古墳 中期	楕円形? 3.0×	1/2	SB1・5に重複さ れる	図43	1 図42-46		
97	2	2	検出面						1 図87-272	敲石1	砥石・軽石・ ミガキ石・鉄 製品
97	2	3	1号住居 (SB1)	弥生 後期	隅丸方形	1/5		図20	2 図21-1・2		
99	1	1	1号住居 (SB1)	平安	方形 3.2×	2/3		図78	18 図79-229~241 図80-242~246		
99	1	1	2号住居 (SB2)		方形	一部					
99	1	1	3号住居 (SB3)		方形?	一部	SB4に重複			鉄製品2	
99	1	1	4号住居 (SB4)	古墳後 ~奈良	方形	2/3	SB3・SE3が重複	図52	8 図53-100~107		
99	1	1	SE3		径1.3	全				琴柱形石製品1	鉄製品
99	1	1	検出面						1 図60-128		
99	1	2	6号住居 (SB6)		方形? 3.7×	1/3	SB7に重複				
99	1	2	7号住居 (SB7)	古墳 前期	方形 6.3×	2/3	SB6が重複	図24	3 図25-6~8		
99	2	2	方形P-75	平安					1 図87-269	白玉1	
99	2	2	8号住居 (SB8)	古墳後 ~奈良	方形 4.9×	1/2		図54	3 図55-108~110		
99	2	2	9号住居 (SB9)	平安	方形 4.3×	2/3		図81	9 図82-247~255		鉄製品
99	2	2	10号住居 (SB10)	古墳後 ~奈良	方形 4.5×	1/2		図57	3 図56-111~113		
99	2	2	検出面						2 図60-130 図87-273		
99	3	2	11号住居 (SB11)	平安	長方形 4.8×	2/3		図83	1 図84-256	土錘5	
99	3	2	12号住居 (SB12)	古墳後 ~奈良	方形 4.5×		SB13に重複	図58	2 図59-114・115		
99	3	2	13号住居 (SB13)	古墳後 ~奈良	長方形 4.2×	2/3	SB12が重複	図58	5 図59-116~120	石製模造品有 孔円板9・剣 形1	鉄製品
99	3	2	14号住居 (SB14)	平安	方形 4.4×	1/2	SB13・16と重複	図85	3 図86-258~260		
99	3	2	15号住居 (SB15)	平安	方形	一部	97-2区-2SB5と 同一	図83	1 図84-257		鉄製品
99	3	2	16号住居 (SB16)	古墳後 ~奈良	方形	一部	SB13床面上での 平面の確認のみ	図58	1 図59-121		
99	3	2	17号住居 (SB17)	古墳後 ~奈良	方形 2.4×	一部	検出面での平面 の確認のみ	図58	2 図59-122・123		
99	3	2	3号土坑 (SK3)	古墳 中期	径1.3				6 図44-47~52		
99	3	2	検出面				土器		1 図60-129	有孔円板石製 模造品1	軽石・鉄製品

実測数：274



92-②区 (西) 2次面全景 (北から)



92-③区 (東) 2次面全景 (北から)



92-②区全景 (南から)



92-①区全景 (南から)



97-①区 1次面全景 (北から)



97-①区 2次面全景 (南から)



97-②区 1次面全景（北西から）



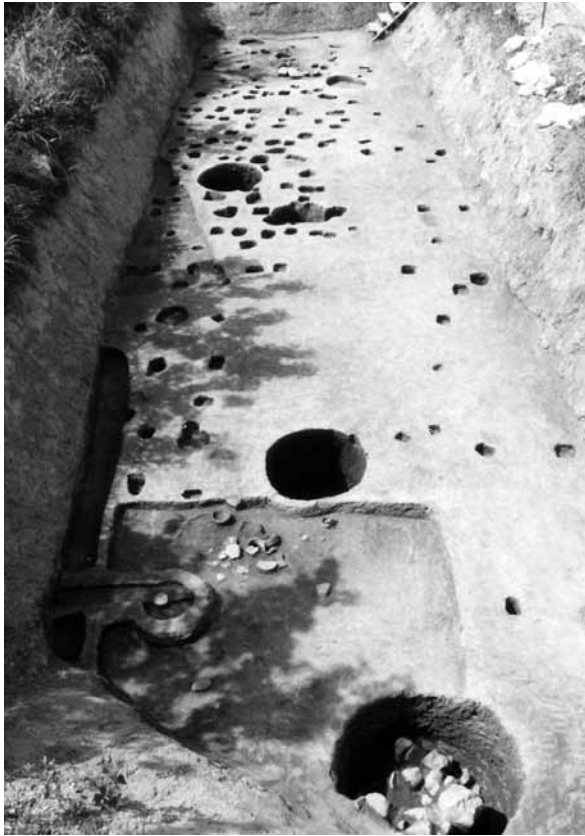
97-②区 1次面全景（南東から）



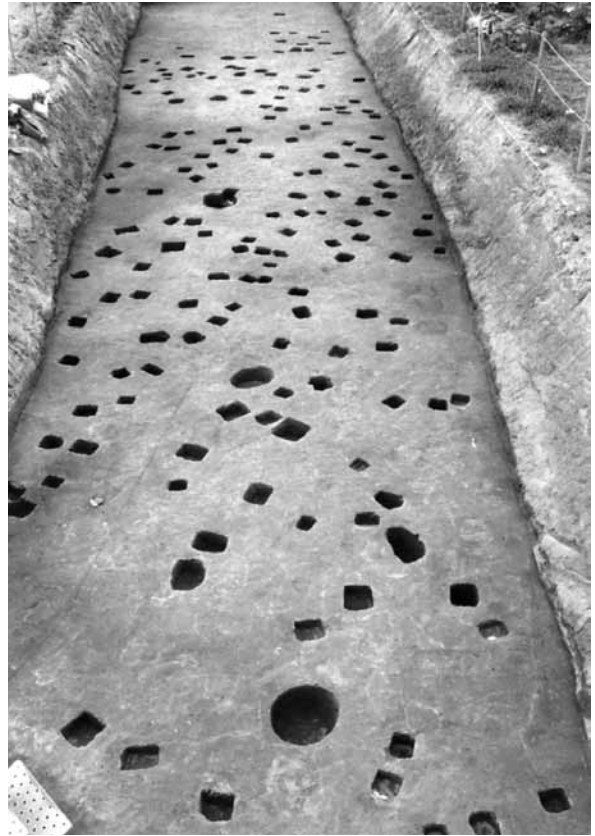
97-②区 2次面全景（北西から）



97-②区 3次面全景（南東から）



99-①区 1次面全景 (北西から)



99-②区 0次面全景 (北西から)



99-②区 2次面全景 (北西から)



99-③区 2次面全景 (北西から)

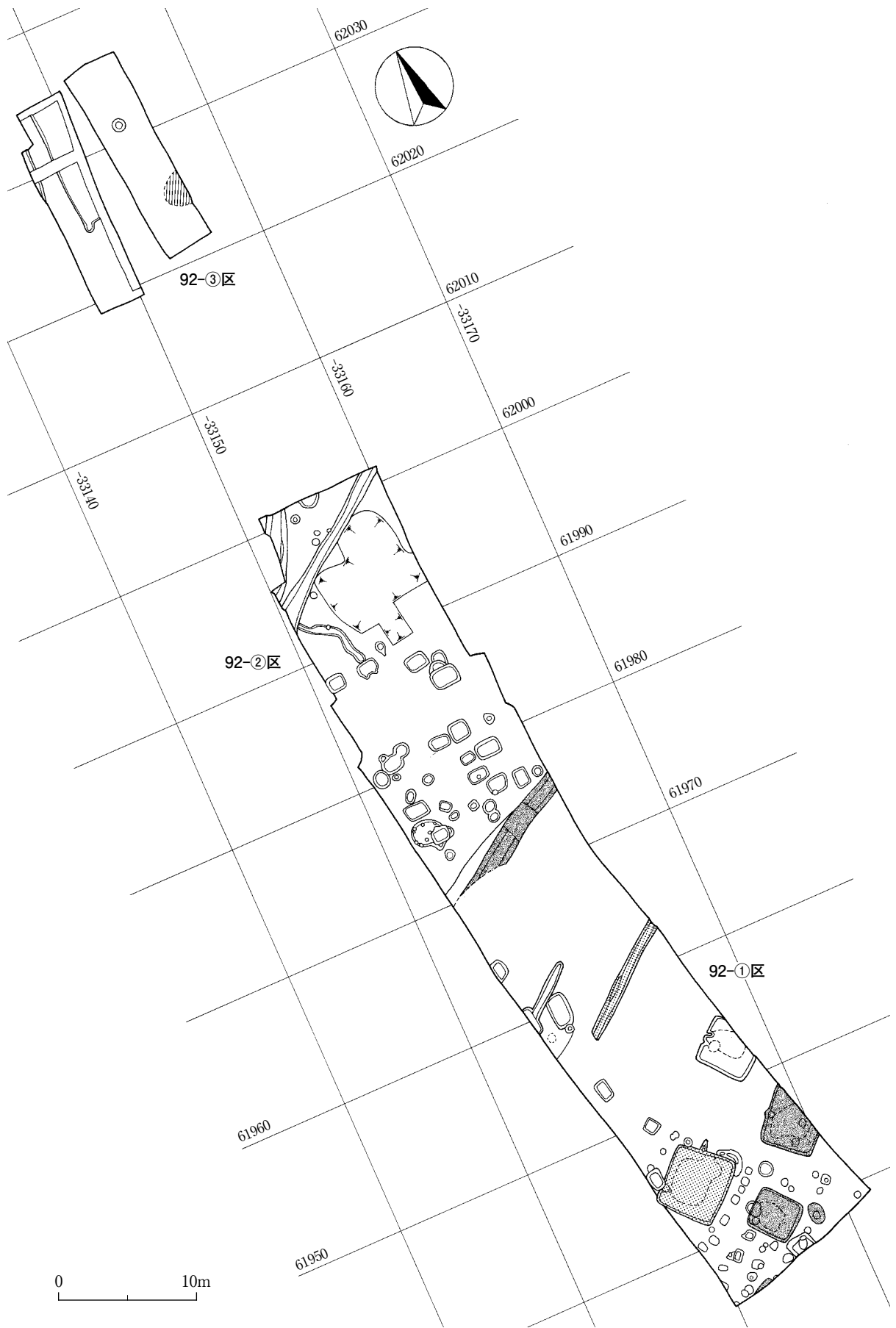


图9 平成4年度調査区全体图 (S=1:400)

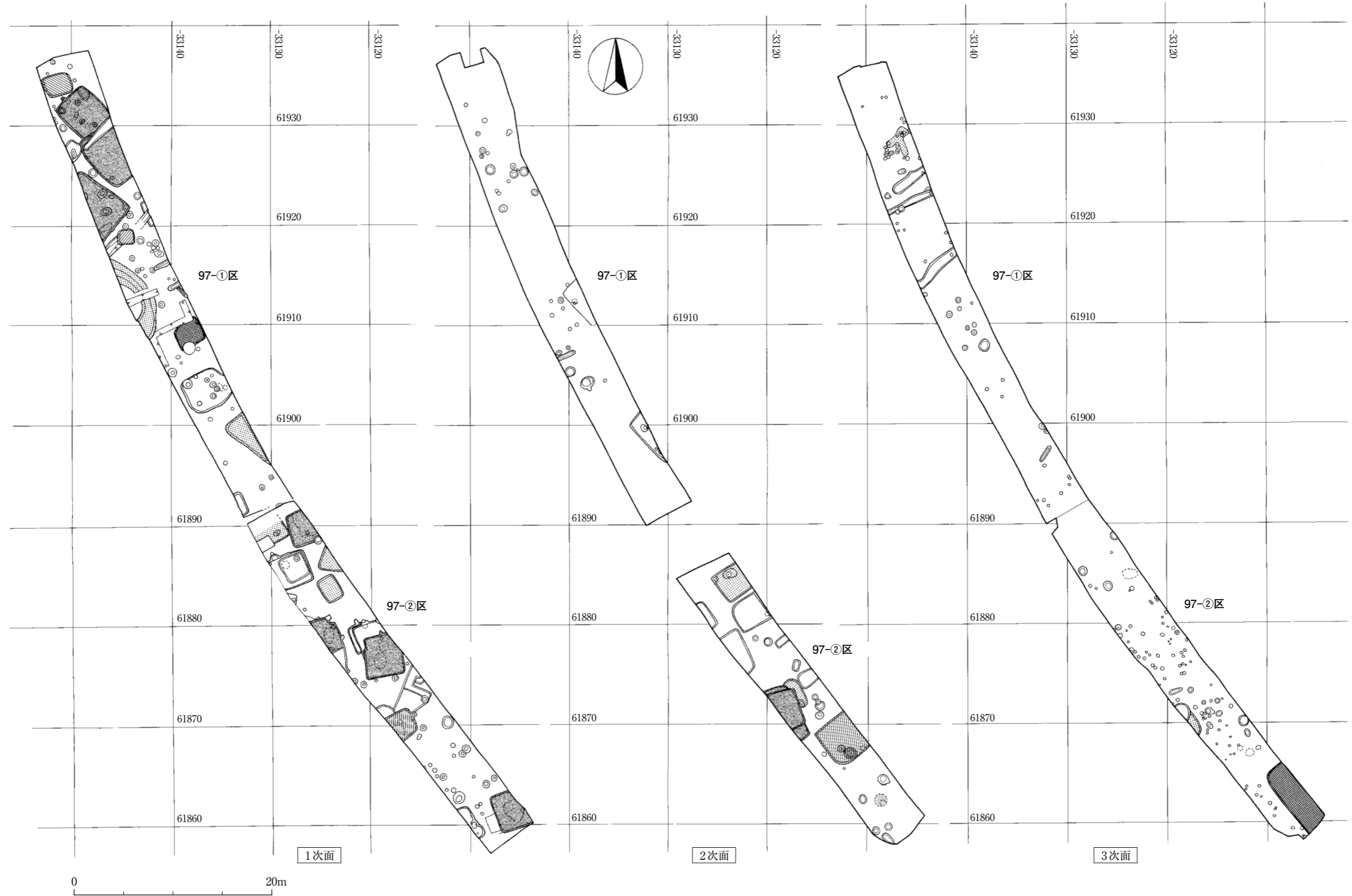


图10 平成9年度調査区全体図 (S=1:400)

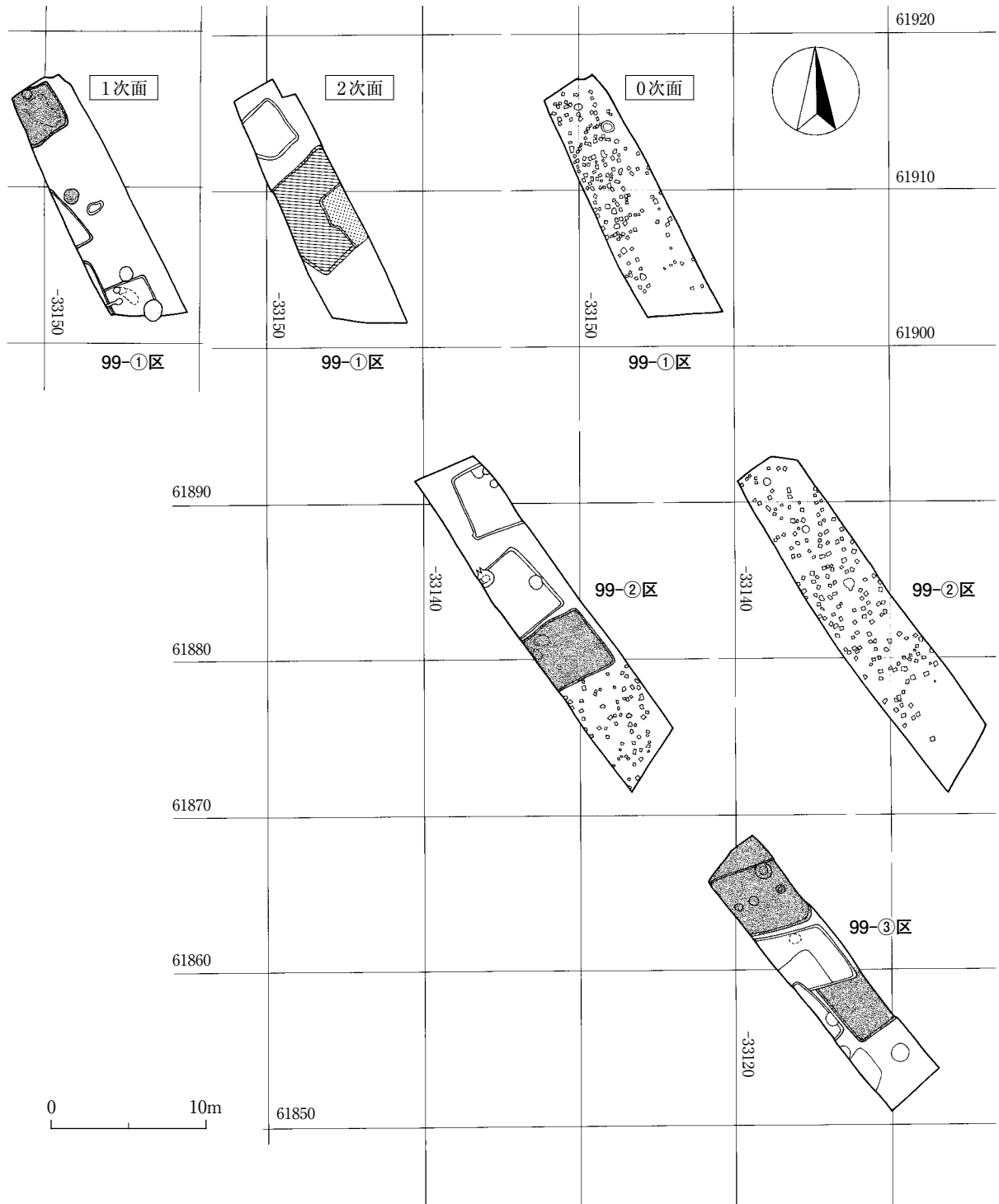


図11 平成11年度調査区全体図 (S=1:400)



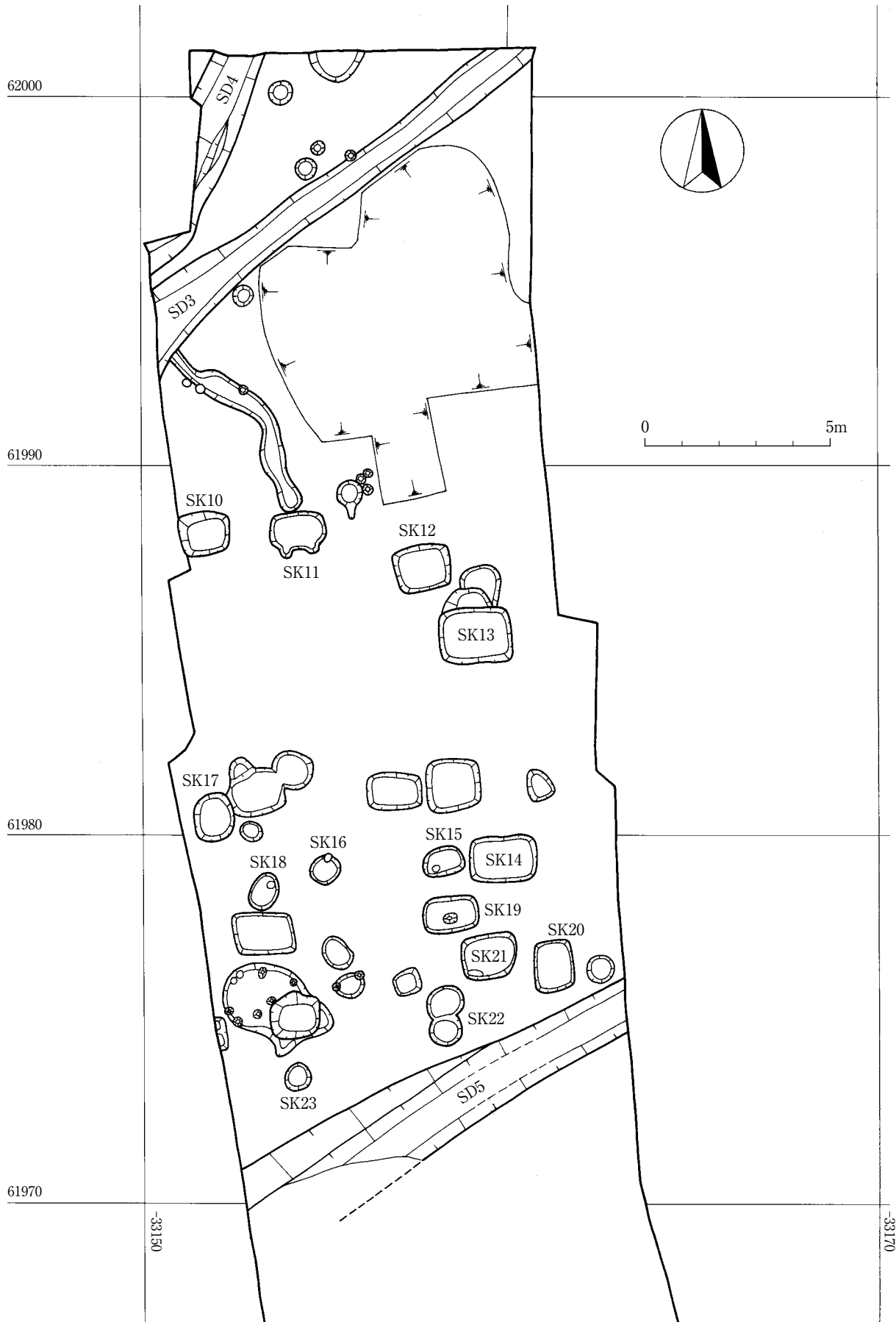


图12 平成4年度調査区 ②区全体図 (S=1:150)

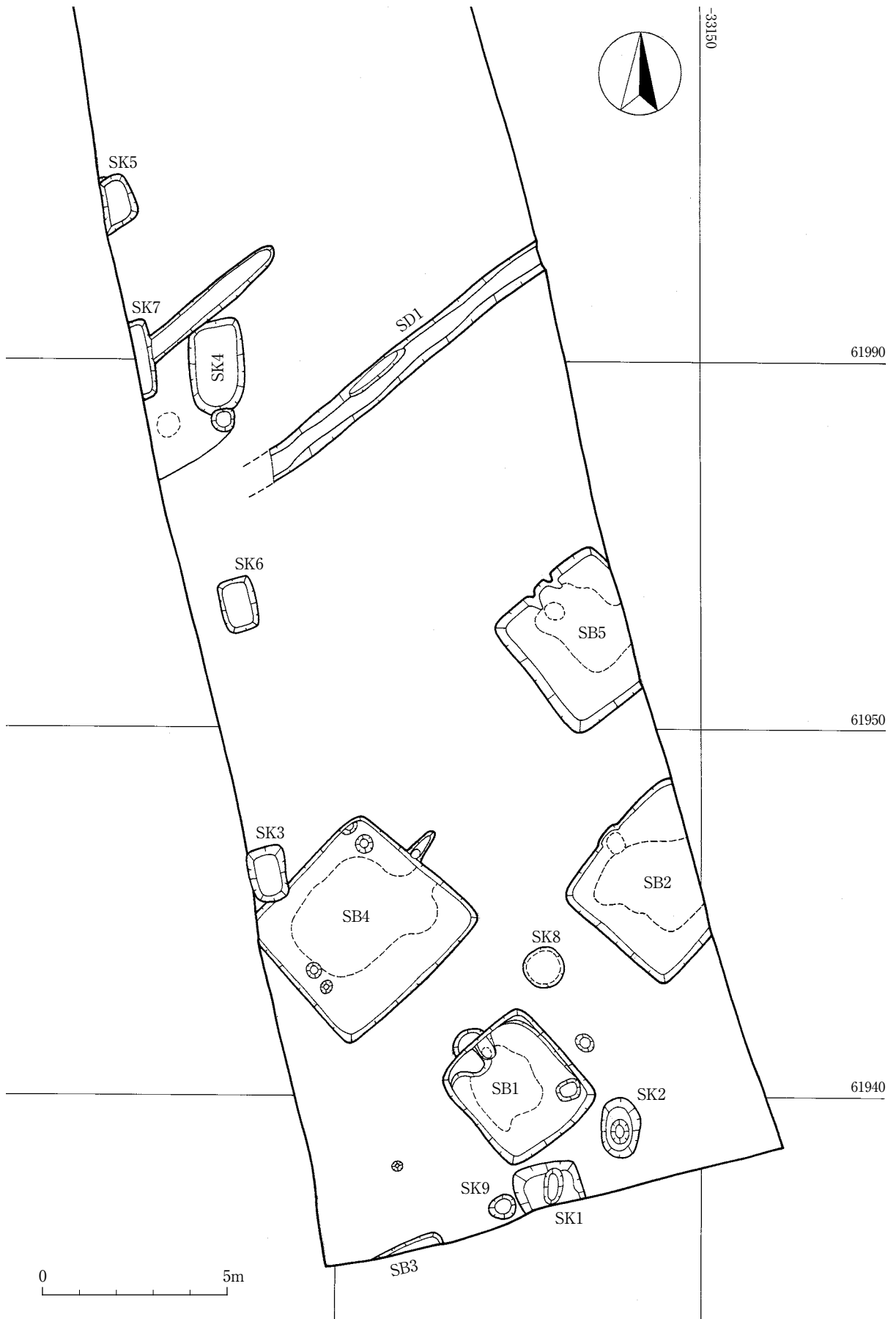


图13 平成4年度調査区 ③区全体図 (S=1:150)



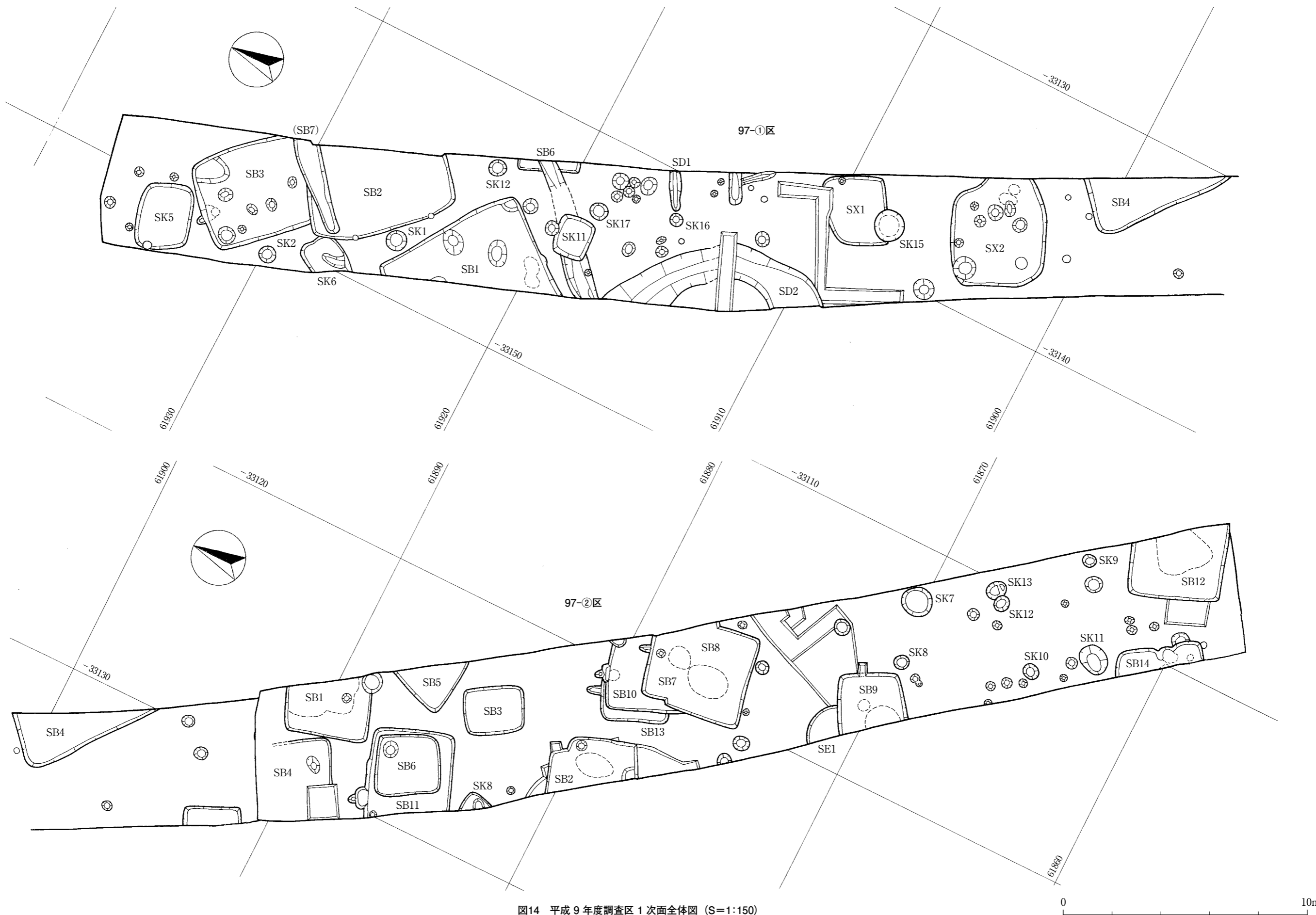


图14 平成9年度調査区1次面全体図 (S=1:150)

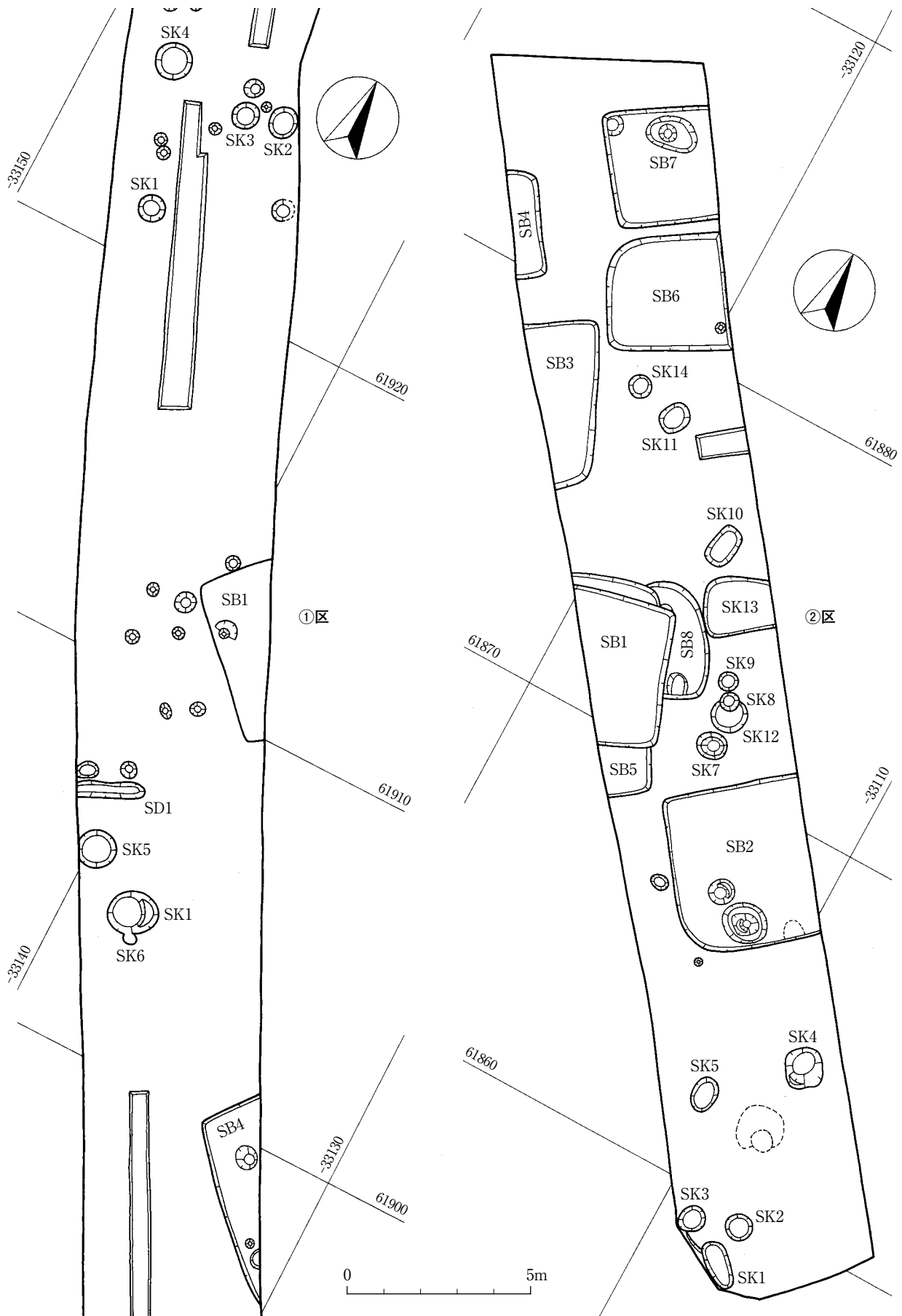


図15 平成9年度調査区2次面全体図 (S=1:150)



図16 平成9年度調査区3次面全体図 (S=1:150)



图17 平成11年度調査区 (①・②区) 0次面全体図 (S=1:150)

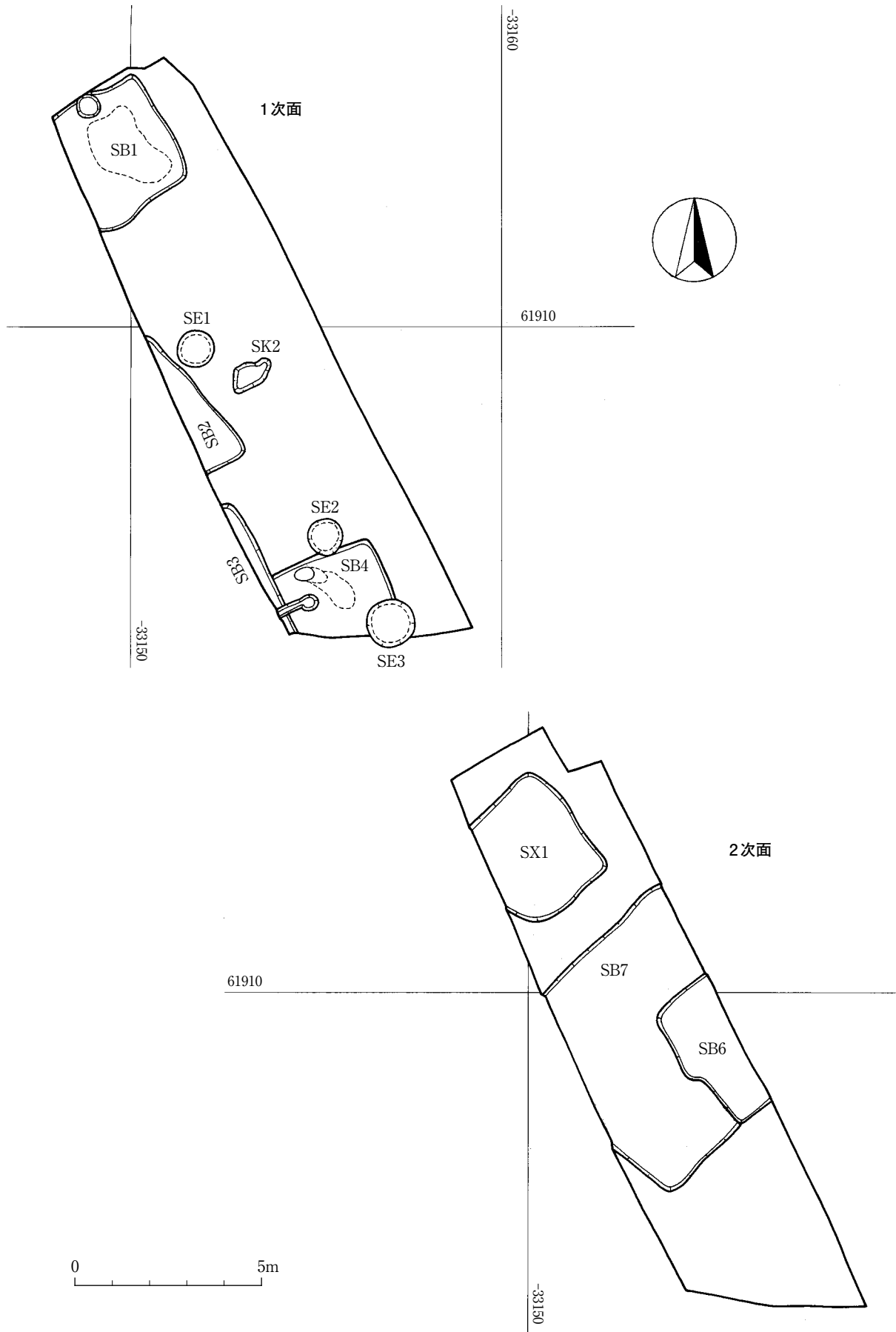


図18 平成11年度調査区①区 1・2次面全体図 (S=1:150)



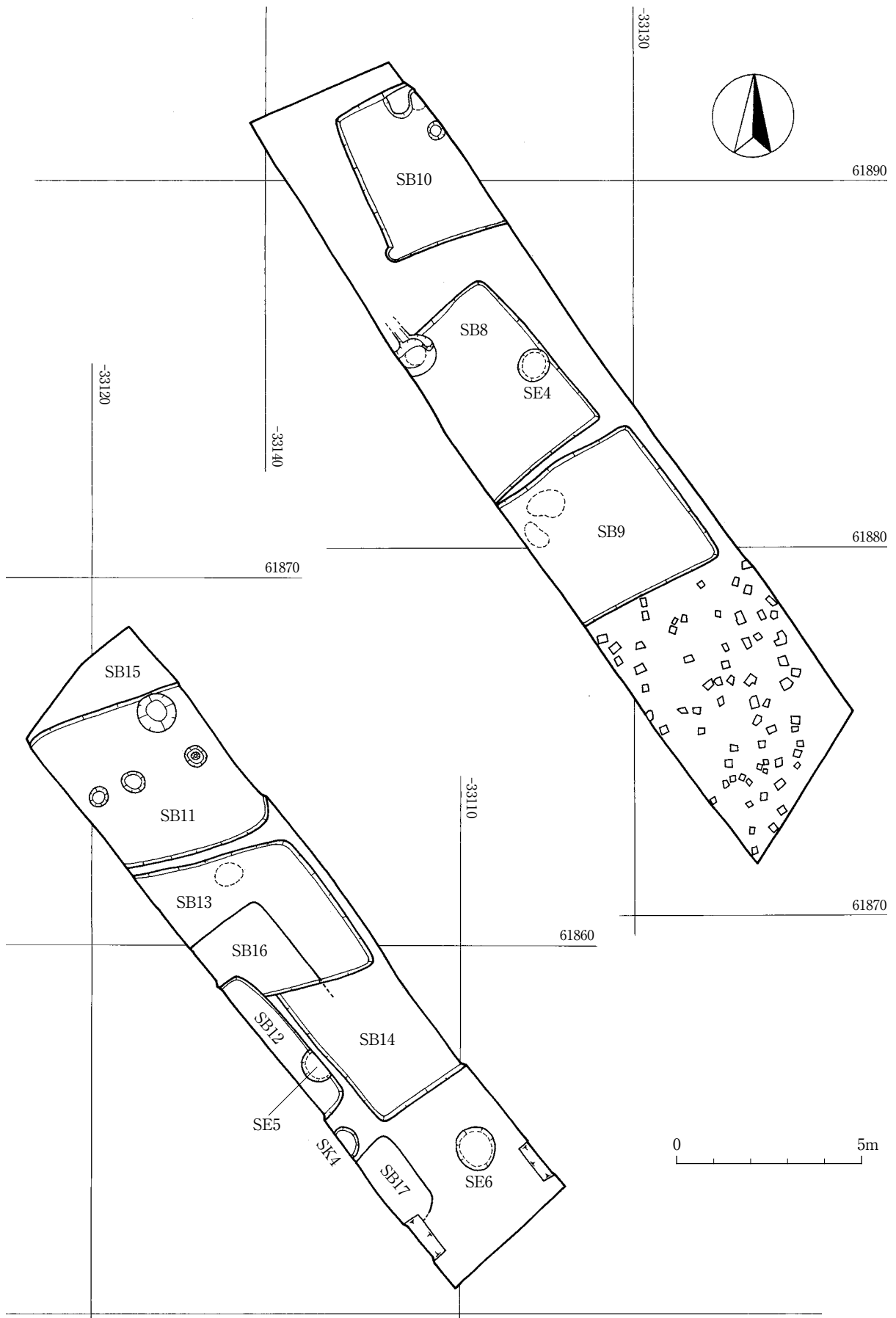


図19 平成11年度調査区②・③区 2次面全体図 (S=1:150)

# IV 遺構と出土土器

## 1 弥生時代後期

### 97-②区-3 SB1

南および東側は調査区外となっており、検出は一部であるが、大形の住居跡である。

床面は中央が硬く、明瞭な検出状態である。

遺構に伴う掘り込みは、南際に一ヶ所と、この他にも小型のピットがいくつかみられるものの、住居に伴う施設の検出はない。

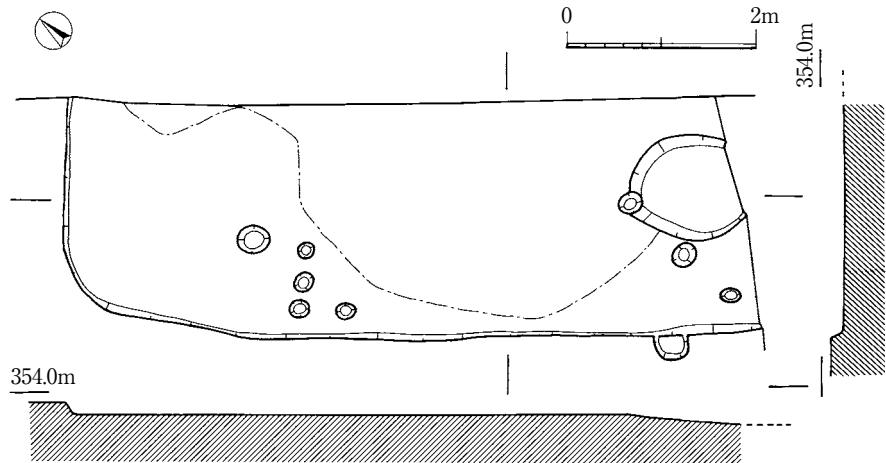


図20 97-②区-3SB1実測図 (1:80)

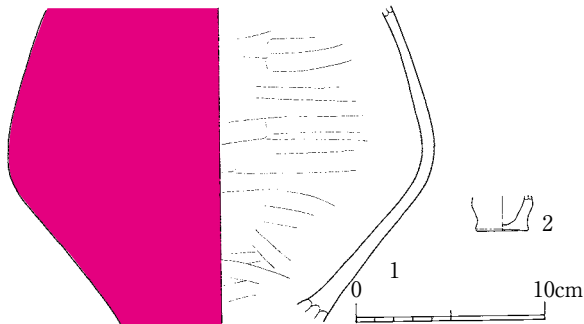


図21 97-②区-3SB1出土土器実測図 (1:4)



97-②区-3 SB1

## 2 古墳時代前期

### 97-②区-2 SB2

東側は調査区外となり、西側半分の検出である。平面形は一辺が4mの正方形を呈する。北側隅が丸くなるが、検出状況からみて全体に隅丸のものと考えられる。

床面は検出面からの掘り込みが10cm弱と浅く、地山面のみで明瞭な状況である。住居内では土坑が2基検出された。この内1つは2段に深く掘り込まれたものである。遺構に伴うものではあるが、性格は不明である。

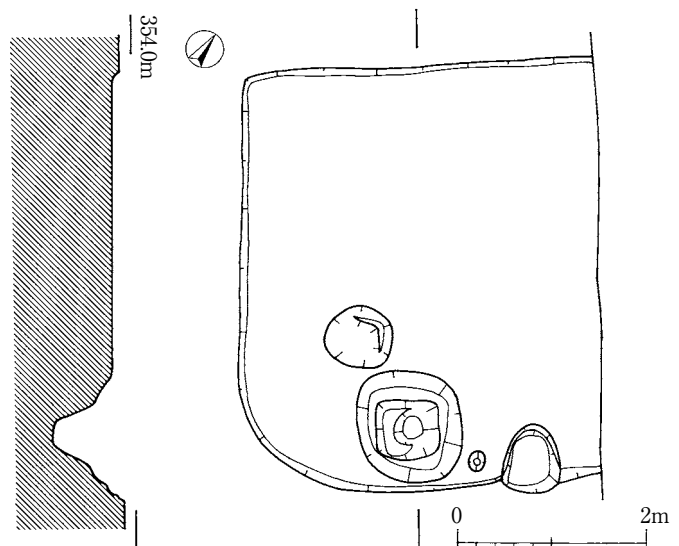


図22 97-②区-2SB2実測図 (1:80)

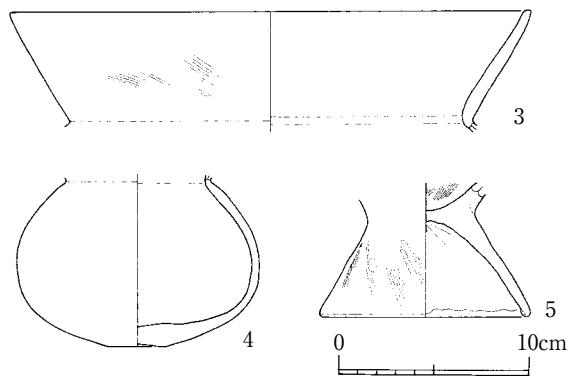


図23 97-②区-2SB2出土土器実測図 (1:4)



97-②区-2 SB2

99-①区-2 SB7

東側と西側の一部が調査区外にかかる。検出面から床面までの掘り込みは15cmで、床面は地山面のみである。遺構に伴う掘り込みの検出はみられない。

SB7に重複してSB6が検出されたが、床面はSB7よりもわずかに高い位置にある。

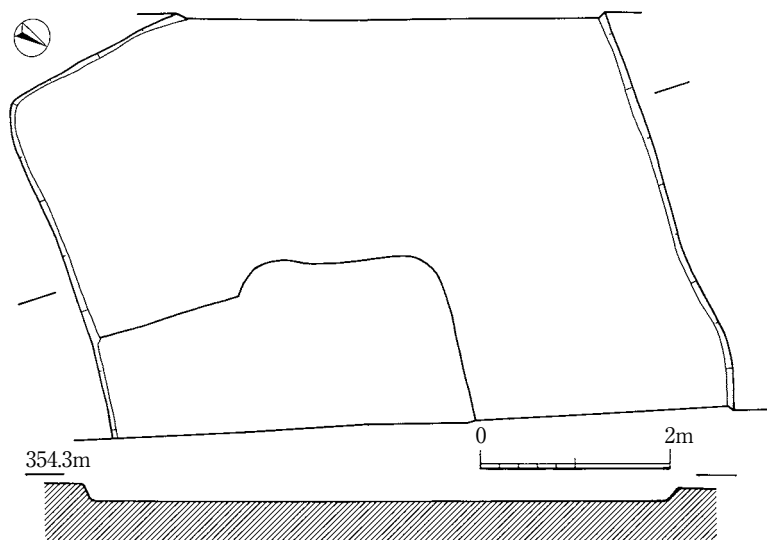


図24 99-①区-2SB6・7実測図 (1:80)

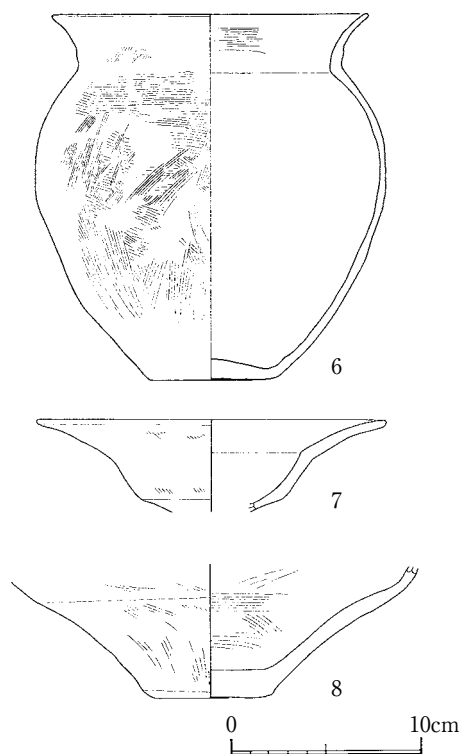


図25 99-①区-2SB7出土土器実測図 (1:4)



99-①区-2 SB6・7

97-②区-1 SB9

調査区外にかかり、東側半分の検出となる。一辺が約2.6mの方形を呈するものとみられる。

遺構中央の東寄りに炭化面が広がるが、上面のみで

ある。この住居の床面の検出は東側の一部のみとなっている。床面は地山面のみではあるが、明瞭ではなく、住居に伴う施設なども不明である。

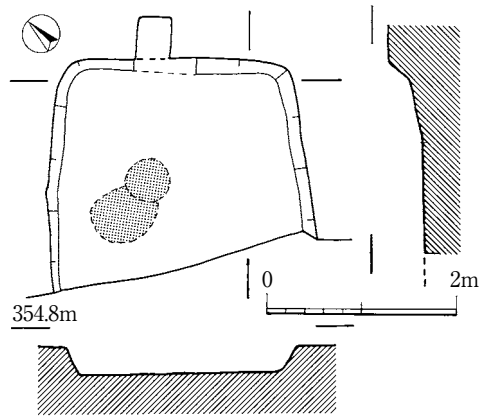


図26 97-②区-1SB9実測図 (1:80)



97-②区-1 SB9

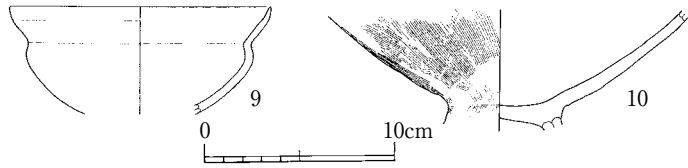
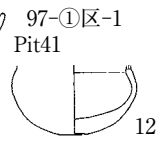
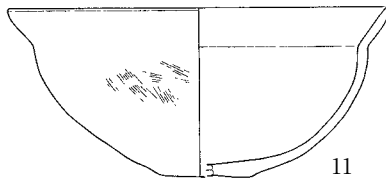
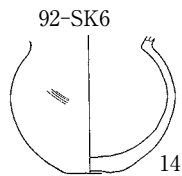


図27 97-②区-1SB9出土土器実測図 (1:4)

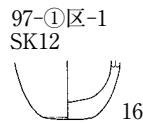
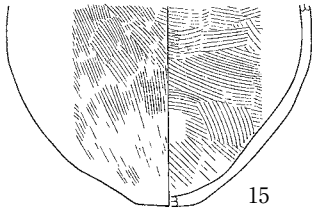
97-①区-1 SD2



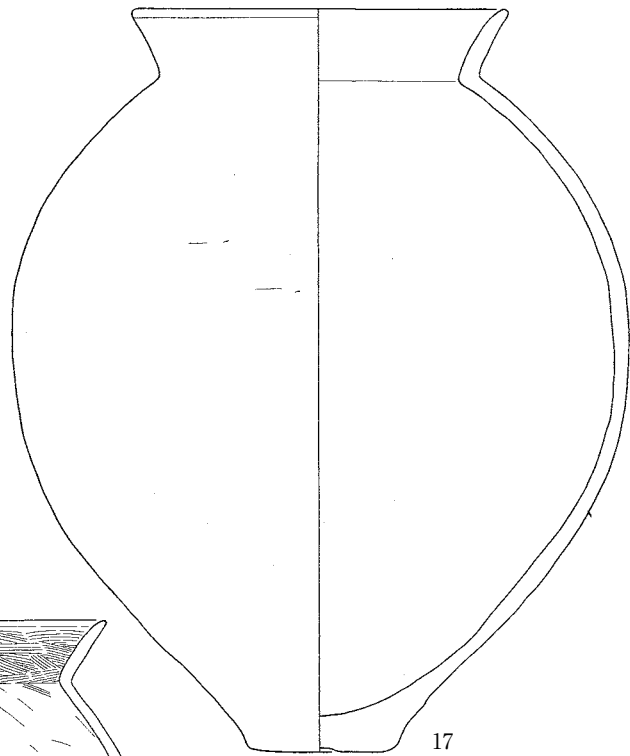
97-①区-1 SK5



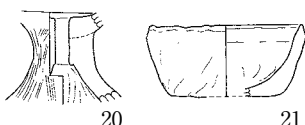
97-②区-1 SK11



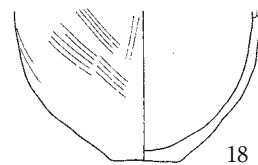
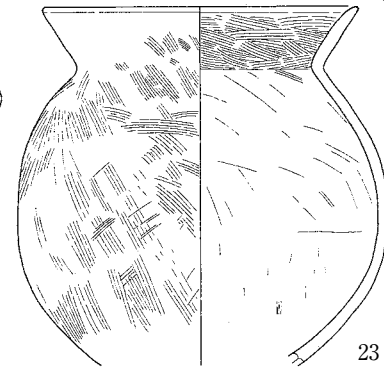
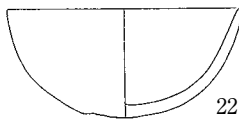
92-SK2 (17・18)



92検出面 (20・21・23)



97-②区-1 検出面



97-①区-1 SX1

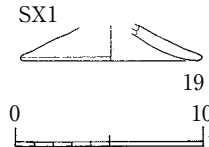


図28 他遺構・検出面出土土器実測図 (1:4)

弥生時代後期は2点(図21)。壺は赤彩で胴部最大径は上半にある。この他破片でも、赤彩や波状文のあるものが多数を占める。

古墳時代前期では、97-②区-2SB2(図23)、99-①区-2SB7(図25)は壺、高坏は赤彩がなく全体に磨きが施される。甕は頸部が立ち上がり口縁の開く形で、調整は丁寧なハケである。97-②区-2SB2(図23)では、ミガキ調整の壺と脚部のみであるが、台付甕は端部の折り返しがみられる。住居跡は検出、出土遺物数共に少ない状態であるが、この中で弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての様相がみられる。この他の遺構および検出面(図28・29)からは、小型土器はミガキとハケ調整のものが、壺は二重口縁壺・胴が張った大型のものもみられるが、ミガキ又は丁寧なハケ調整の胴部が丸く球体に近い形で口縁がくの字に外反したものが多くみられる。

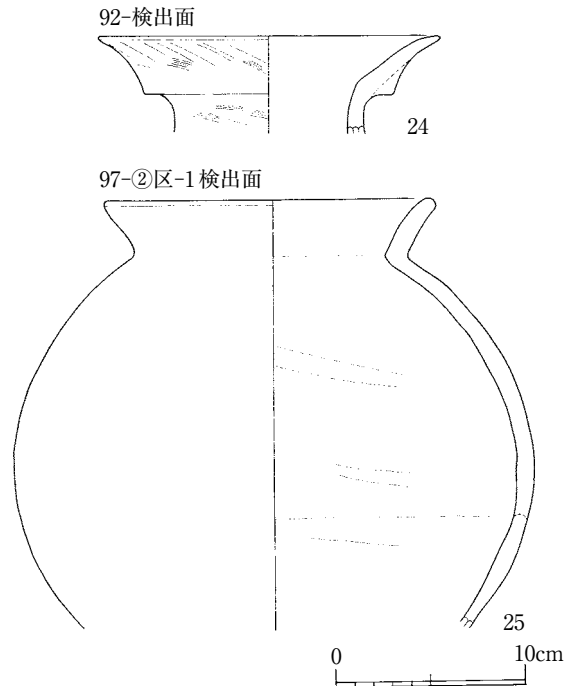


図29 検出面出土土器実測図(1:4)

## <平成4年度調査>

92調査区-①区では、測量時のデータの損失により遺構断面の数値が不明となり、平面図のみの提示となった。このため、住居実測図は全体図(S=1:80)を図30に示し、出土土器は各時代の項目にまとめた。

住居の検出は5軒。古墳時代中期から平安時代のものを確認した。

### 92-SB1(平安時代)

主軸方向が長辺となる長方形を呈する。長辺3.6mを測り、他の住居に比べ小型である。北壁から東壁の隅に沿って掘り込みがみられ、床面はカマド正面から中央に貼床がある。カマドは北壁中央に位置する。正面と西側に石がみられるが構築材として元位置を保っているのはみられない。煙道のない壁面に沿って立ち上がる形とみられる。

### 92-SB2(平安時代)

主軸方向(南北)が短い長方形を呈する。床面は中央に貼床がみられるが、柱穴などの検出はなかった。カマドは北壁中央に位置する。壁面をやや外側に掘り込んだ形で、カマド中央の覆土中からは土器の検出があったが、袖などの構築材は残っていなかった。

### 92-SB3(平安時代)

調査区南端で隅部のみを検出。

### 92-SB4(古墳時代中期)

ほぼ正方形を呈し、主軸は東西方向を取る。掘り下げ時には後世に掘り込まれた状態がみられたが、覆土中からの遺物は多い。東壁やや北寄りに煙道がみられるが、住居内でのカマド施設の検出はない。

### 92-SB5(古墳時代後期)

カマドは北壁に位置する。煙道はなく、中央や周辺には石がみられるが原位置を残すものはみられない。出土土器は古墳後期と平安が出土している。どちらも完形が多く、平安のものが古墳後期よりも覆土中の高い位置にあったことから、古墳後期の住居上に平安時代の遺構があった可能性が考えられる。

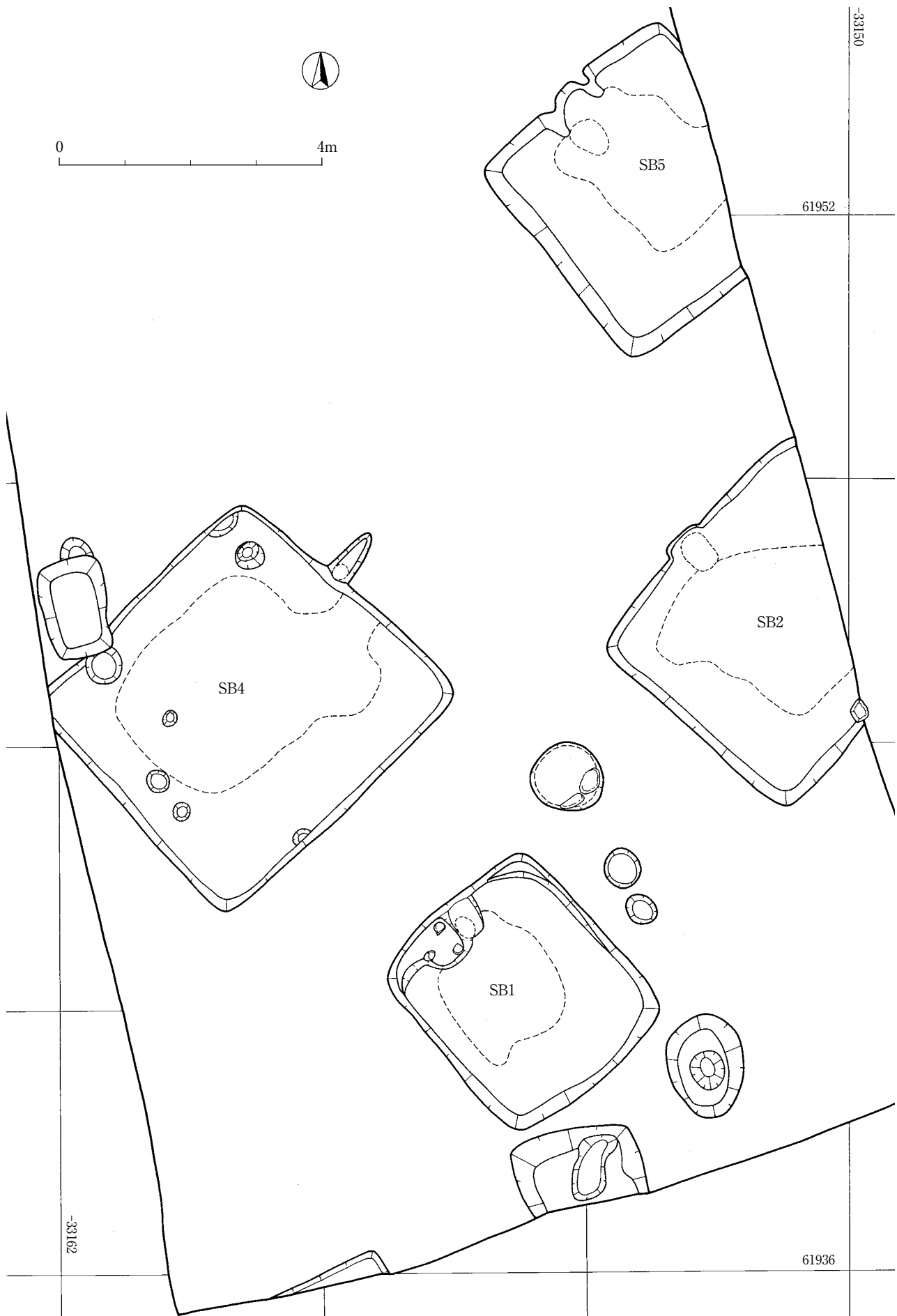


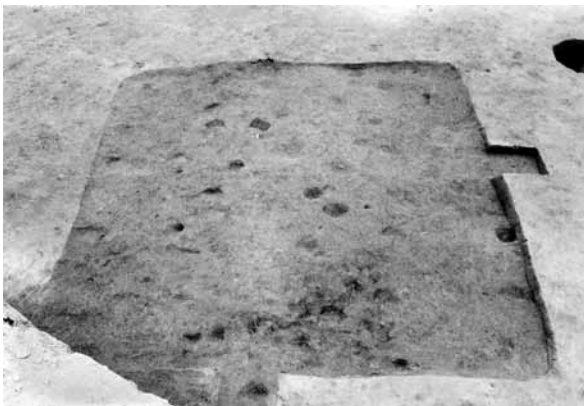
图30 平成4年度調査区①区住居 (SB1・2・4・5) 実測図 (1:80)



92-①区 SB1



92-①区 SB2



92-①区 SB4覆土上層



92-①区 SB4



92-①区 SB5



92-①区 SB5カマド



92-①区 住居

### 3 古墳時代中期

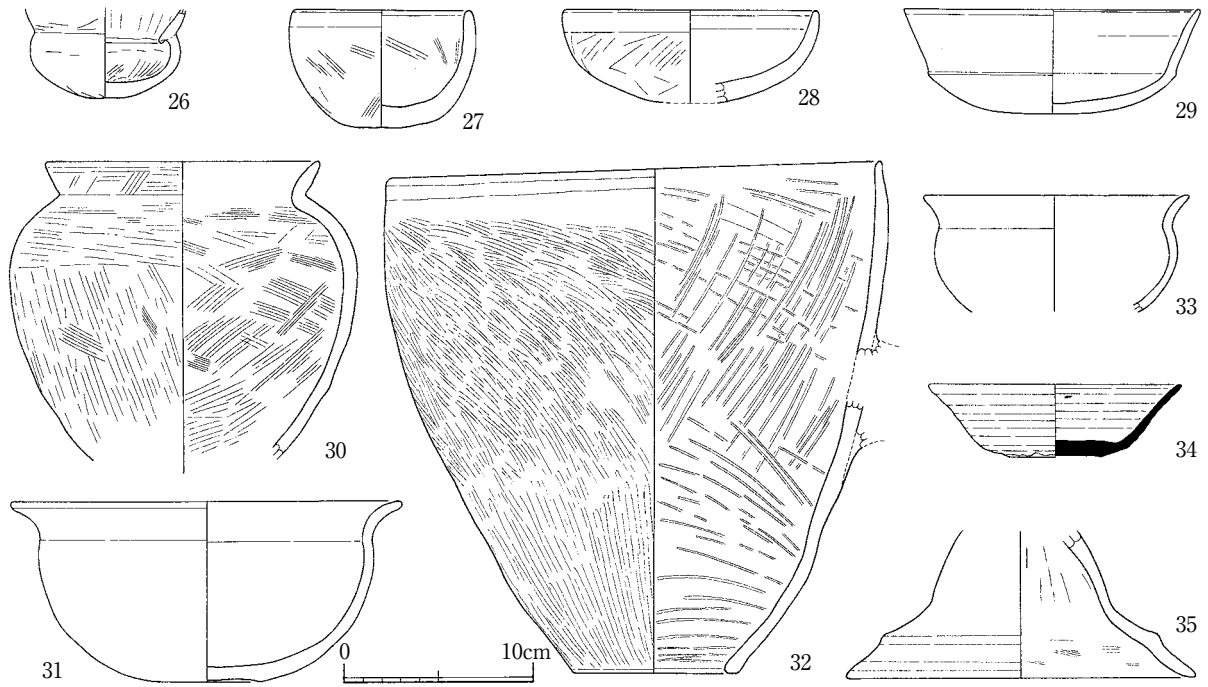


図31 92-①区SB4出土土器実測図 (1:4)

#### 97-①区- 1 SB4

西隅一カ所のみを検出であるが、平面隅丸方形の大型の住居跡とみられる。

床面は検出面からの掘り込みが28cmあり、一部のため住居に伴う掘り込み等の検出や、貼り床などの検出はないが、明瞭である。

なお、土器No.35は遺構外からの混入である。

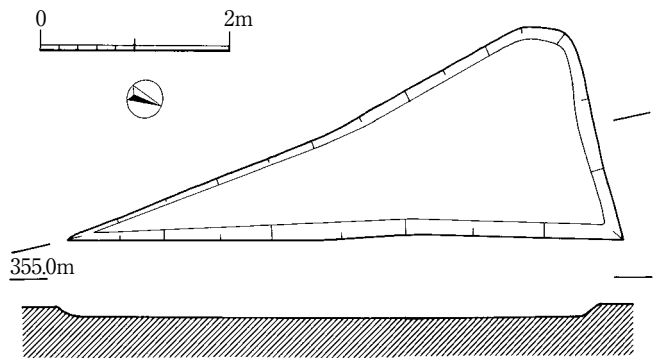


図32 97-①区-1SB4実測図 (1:80)



97-①区-1 SB4

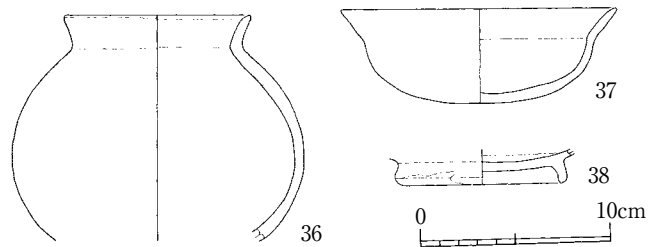


図33 97-①区-1SB4出土土器実測図 (1:4)

#### 97-②区- 1 SB4

北側一部のみを検出。特に調査区内であっても南側は検出が不明瞭であり、ごく一部となっている。検出面から床面までの掘り込みは18cmを測る。掘り込みは一カ所で、深さはないが、位置から柱穴が想定される。

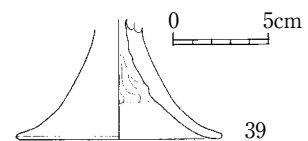


図34 97-②区-1SB4出土土器実測図 (1:4)



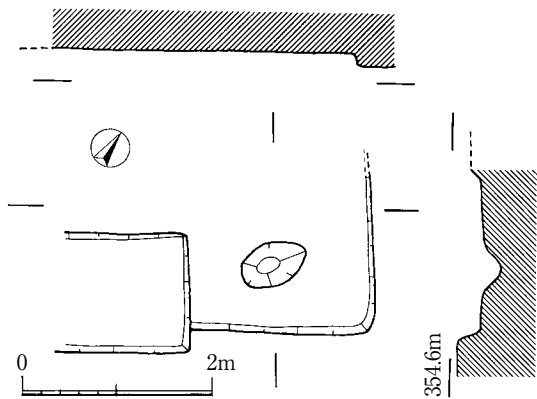
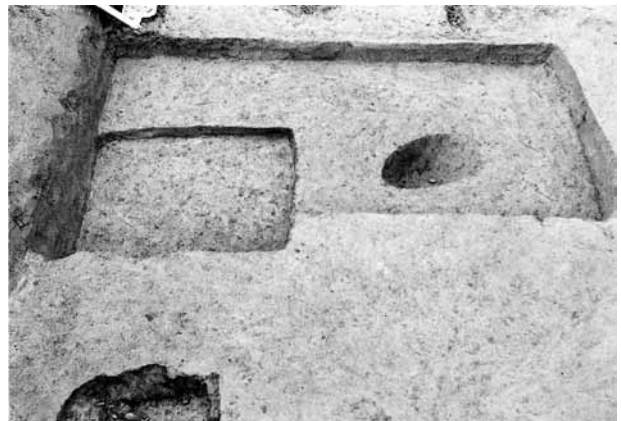


図35 97-②区-1SB4実測図 (1:80)



97-②区-1 SB4

### 97-②区-1 SB3

遺構の全体を検出した。平面は長辺2.5mの長方形を呈する。

検出面からの掘り込みは7cmと浅いが西隅に焼土面がみられる。床面は地山面のみであり、遺構に伴う掘り込み等、住居施設の検出は見られなかった。



97-②区-1 SB3

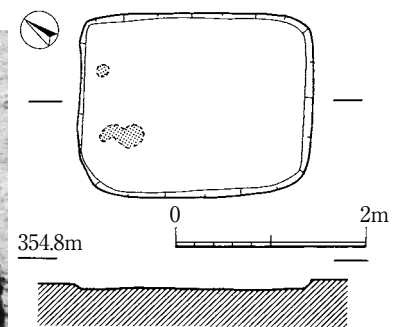


図36 97-②区-1SB3  
実測図 (1:80)

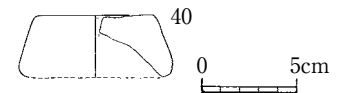


図37 97-②区-1SB3出土土器  
実測図 (1:4)

### 97-②区-1 SB5

調査区外に掛かるため、検出は東隅の一部のみである。

検出面からの深さは壁際で16cmを測り、中央に向かってやや高くなる。貼り床等は検出範囲では確認できなかったが、床面の検出は明瞭である。

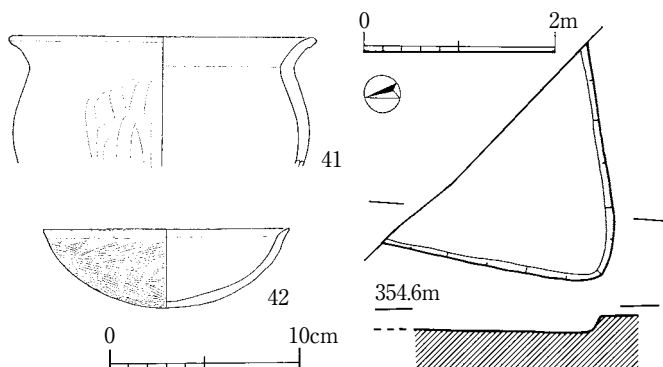


図38 97-②区-1SB5  
出土土器実測図 (1:4)

図39 97-②区-1SB5  
実測図 (1:80)



97-②区-1 SB5

97-②区-2 SB7

調査区外に掛かり、西半のみの検出。南北方向で3.2m、平面は方形を呈する。

床面は検出面から15cm程。住居北壁側に楕円形の土坑がある。深さは床面から約1mを測り、底部でさらに一段掘り込まれている。土器の出土も覆土中から僅かにみられるのみで、住居内のもとしては特異である。

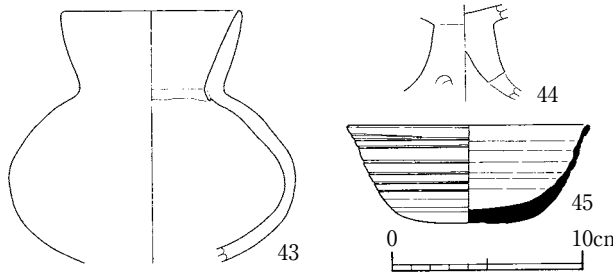


図40 97-②区-2SB7出土土器実測図 (1:4)

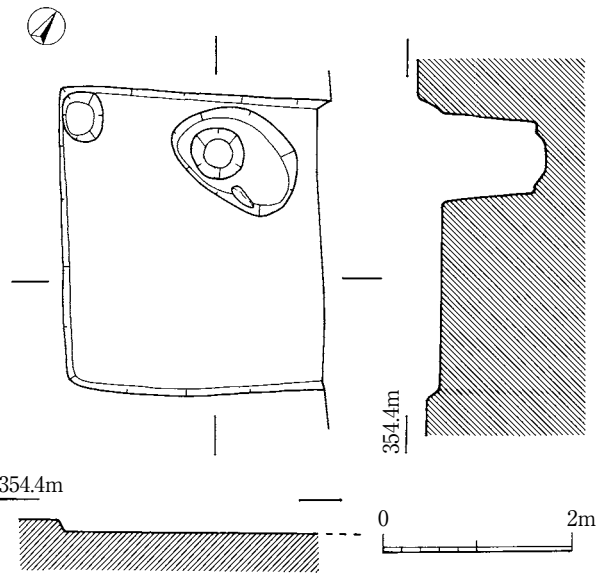


図41 97-②区-2SB7実測図 (1:80)



97-②区-2 SB7



97-②区-2 SB7内土坑

97-2区-2 SB8

SB1・5に重複されているため、東半のみの検出。北壁が円形に近い形となっているが、平面形態は検出状態の良い南側からみて南北方向で3.0mを測る隅丸の方形を呈するものとみられる。

床面は検出面から22cmの深さがある。床は地山面となり、また重複するSB5の床面とのレベル差もごく僅かとなっている。

遺構に伴うものでは、南壁際と中央北寄りの位置に大きさ・深さともほぼ同じの土坑がみられる。

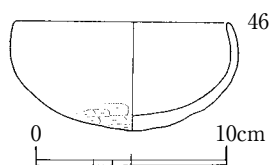


図42 97-②区-2SB8出土土器実測図 (1:4)

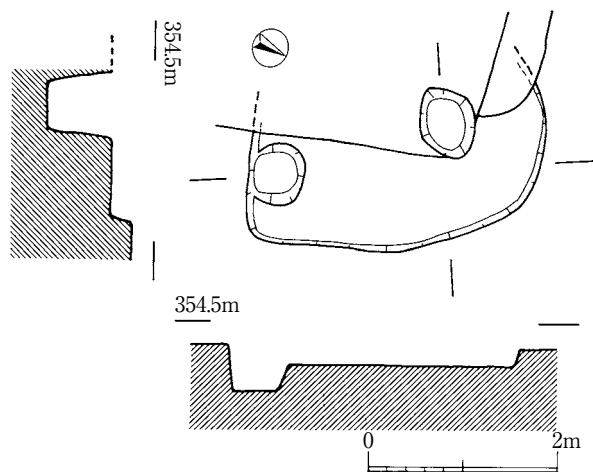


図43 97-②区-2SB8実測図 (1:80)



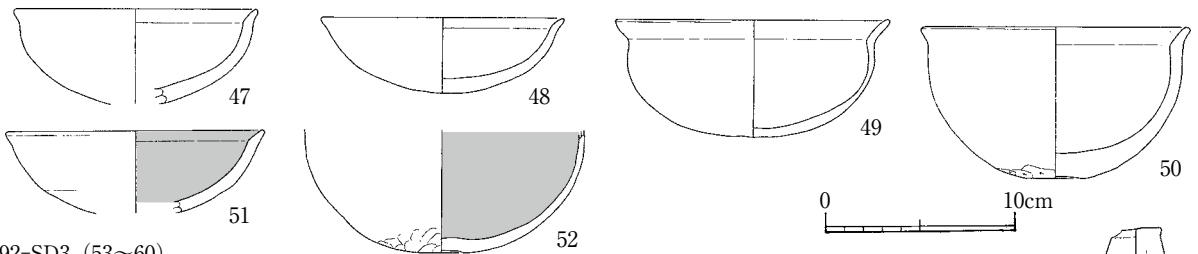
97-②区-2 SB8



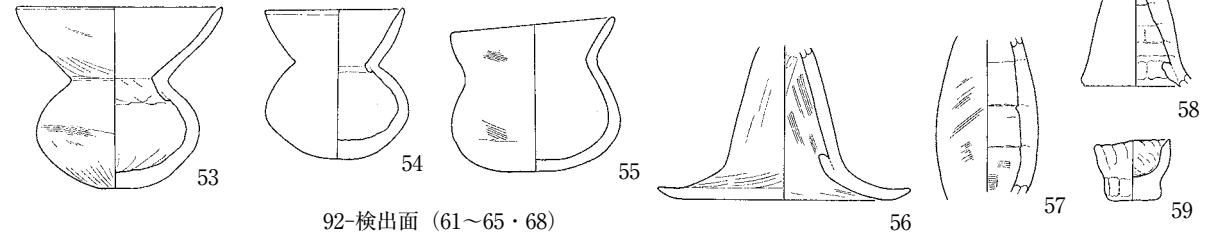
検出面土器出土状況 (図44-73)

検出面・他遺構

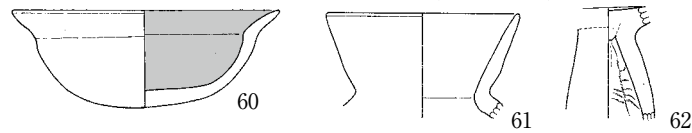
99-③区-2 SK3 (47~52)



92-SD3 (53~60)



92-検出面 (61~65・68)



97-②区-1 検出面 (66・67・69~73)

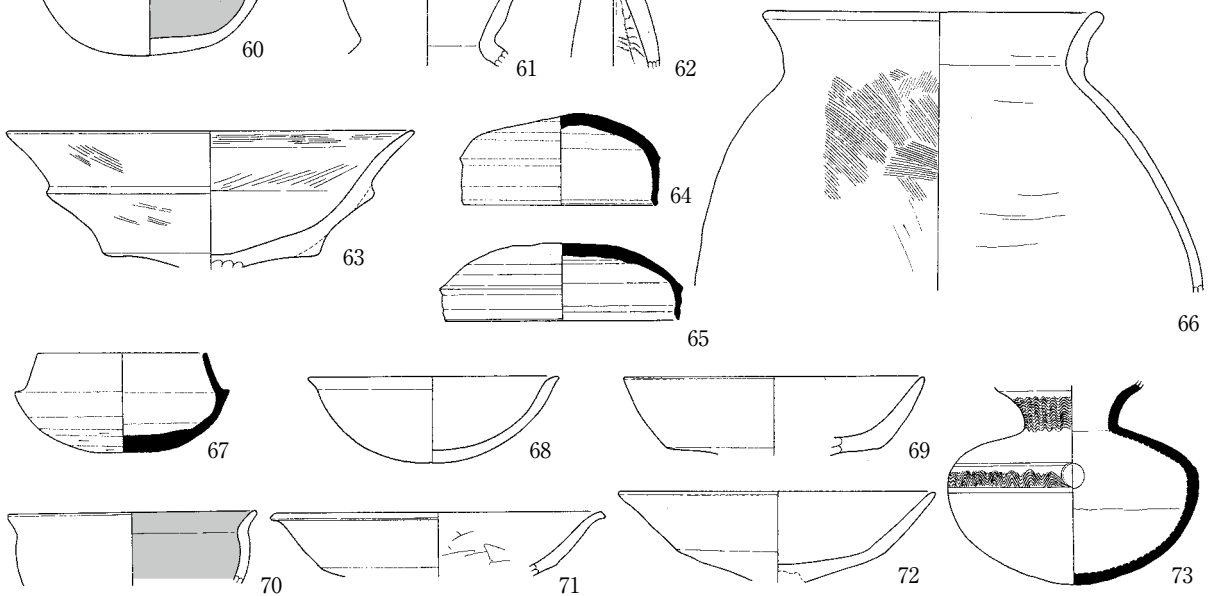


図44 他遺構・検出面出土土器実測図 (1:4)

住居跡からの出土は、遺構の検出状況もあり僅かである上、他時期のものを含む例が多い。この中で92-SB4(図31)は、住居では唯一土器が比較的まとまって出土しており、中期後葉(6世紀初頭)に比定される。この他、99-③区-2SK3では坏、92-SD3では小型壺や高坏・ミニチュアなど特定の器種が特に多く出土する例がみられる。

小型丸底埴は、胴部中央が張り口縁が大きく開くもの(図31-26、図44-53・54)、底部が平らで胴部と口縁部の差が明確でないもの(図44-55)とがある。調整はハケである。

坏は、SK3(図44-47~52)では器形は底部が丸く胴部から外側に開き、内面に稜のあるものと、胴部が丸く口縁が外反するものがあり、調整はいずれも内外面ともにミガキで、内黒処理されたものもみられる。92-SB4(図31-28・29・33)では底部が丸く半円形のものや底部が丸く胴部から内側に稜を持って外反するもの、胴部が丸く口縁が外反するものでいずれもハケ調整となっている。

高坏は、坏部または脚部のみでの出土である。脚部は脚部が丸く張るものから裾部が大きく広がるものと段高坏が、坏部は中央に稜を持ち口縁が開くものから稜が明瞭でなく下部にさがるものや浅い碗形がみられる。92-SD3(図44-56~58)出土のものはハケ調整であるが、それ以外ではミガキ調整のものが多くみられ、5世紀前半~中頃、中期中葉のものが中心となっている。

須恵器は4個体、いずれも検出面からの出土である。甕(図44-73)は口縁が欠損している。丸い胴部で肩が上部に位置し、頸部と胴部は穿孔の幅の沈線区画内に波状文が回る。5世紀後半TK208からTK23段階の古式のもので、蓋坏についても同じ時期に比定される。

#### 4 古墳時代後期~奈良時代

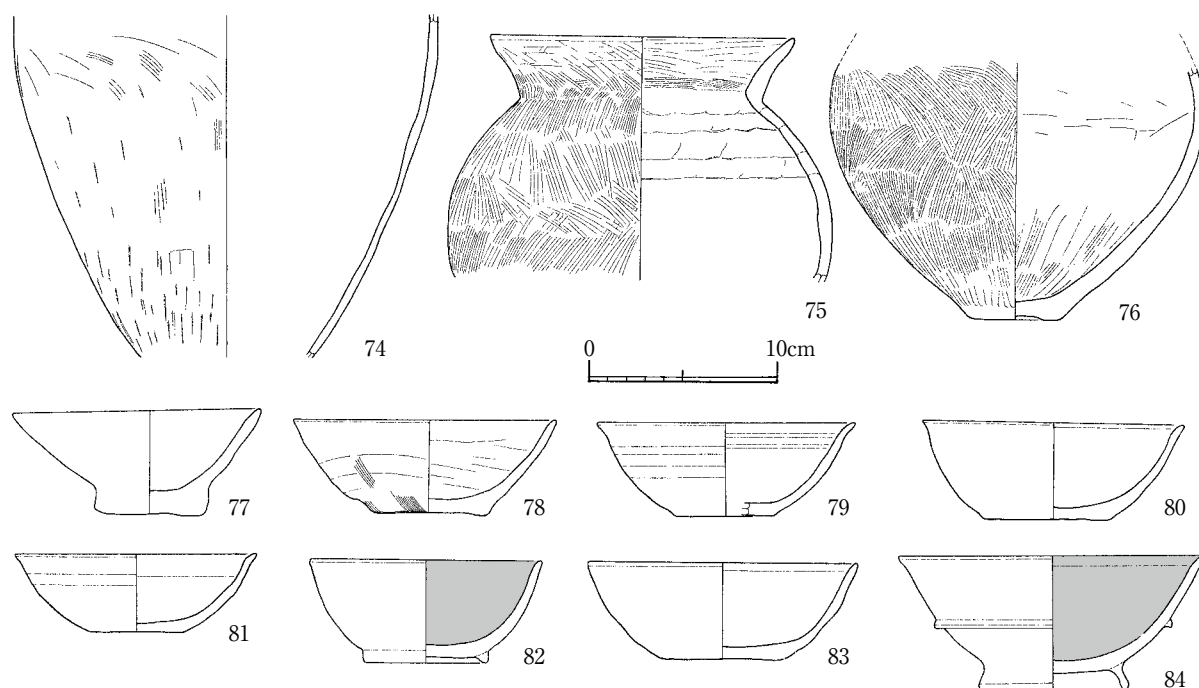


図45 92-SB5出土土器実測図(1:4)

97-②区-1 SB10・13

2軒の住居が重複している。南側をSB7・8に切られ、東側は調査区外となる。平面形は、SB13は正方形に近く、SB10は長方形を呈する。

2軒とも北壁中央にカマドがつくられている。SB10は壁を外側に方形に掘り出したもので、煙道と前面に焼土面を残す。SB13は煙道のみを検出で、煙道内部には甕の口縁を内側に向けて据え付けたものである。

床面はSB13の方が若干高い。床は地山面のみであるが明瞭である。

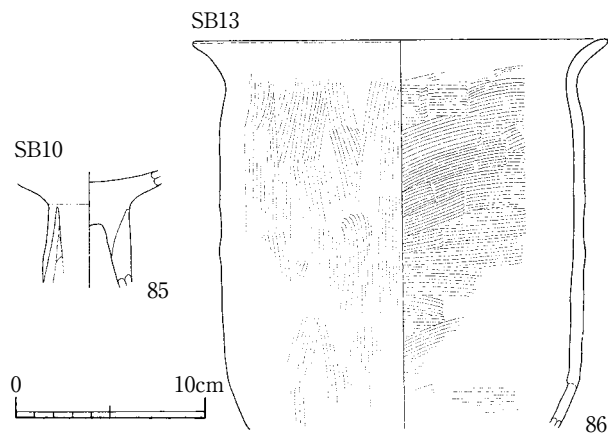


図46 97-②区-1SB10・13出土土器実測図 (1:4)

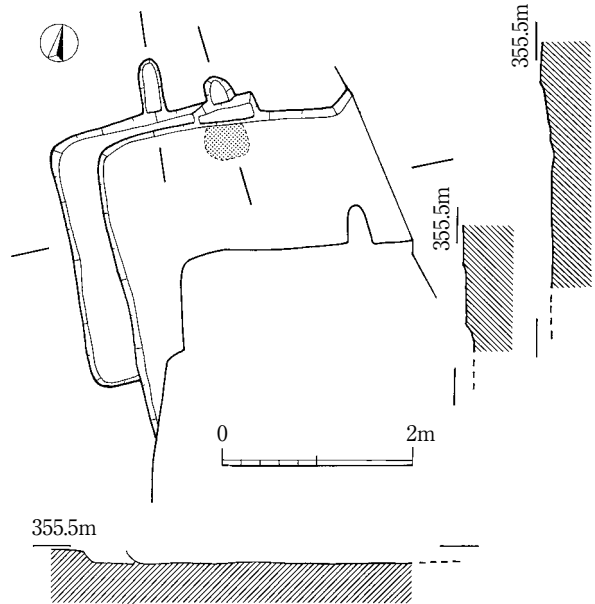
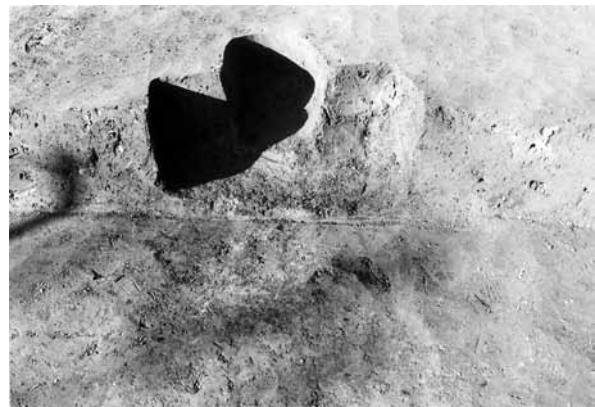


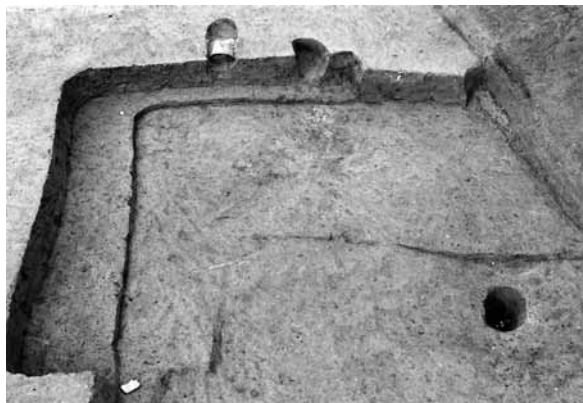
図47 97-②区-SB10・13実測図 (1:80)



97-②区-1 SB10



97-②区-1 SB10カマド



97-②区-1 SB10・13



97-②区-1 SB13煙道

97-②区-2 SB11

東側2/3を検出。床面は住居中央に貼り床がされている。

床面の東寄りには炭化面がみられ、周辺に石や土器片が比較的集中して出土している。

カマドは北壁のやや西寄りの位置に作られている。住居壁面から外側に掘り出したもので、壁面との境には袖石が残る。また、中央には支脚石があり、カマド内部には焼土が堆積している状態が確認できるものである。

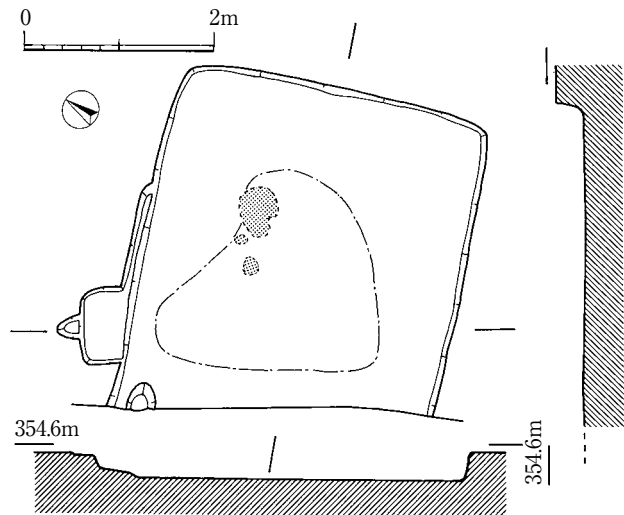


図48 97-②区-1SB11実測図 (1:80)

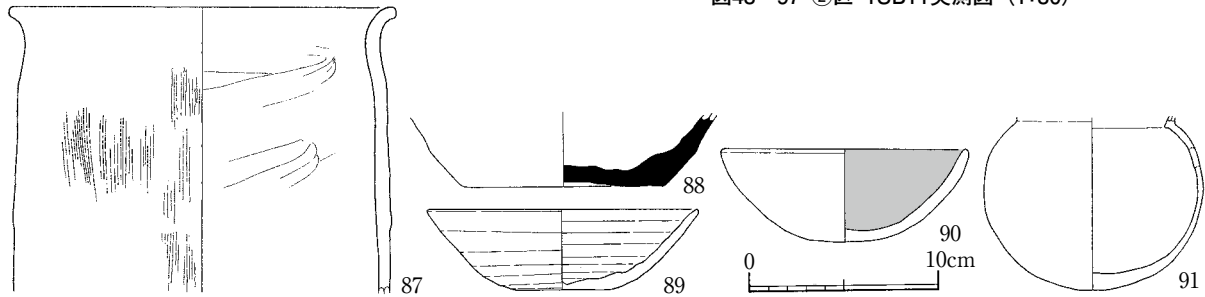
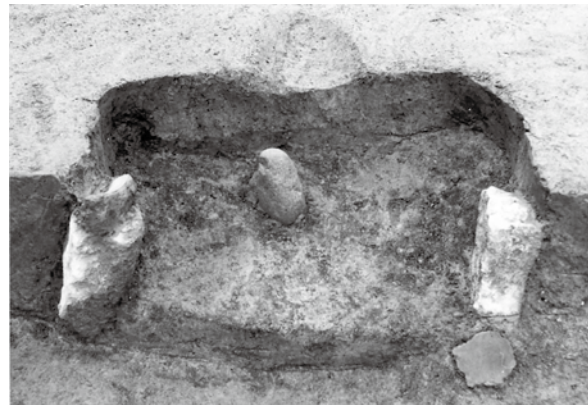


図49 97-②区-1SB11出土土器実測図 (1:4)



97-②区-1 SB11



97-②区-1 SB11カマド

97-②区-1 SB14

検出時には土坑群としたが、遺構の掘り下げにより住居跡と判断したものである。

西側のほとんどが調査区外となり、カマドを中心とした東側のみの検出となった。カマドは東壁のやや南寄りに作られている。袖部は北側でわずかに残る程度である。前面には炭化面が広がり、炭化面の上やカマドの南側に土器や石がまとまって出土している。床面は、カマドの前面から貼り床が認められる。

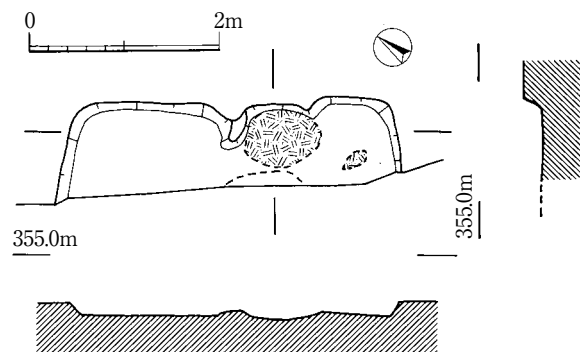


図50 97-②区-1SB14実測図 (1:80)



97-②区-1 SB14



97-②区-1 SB14カマド

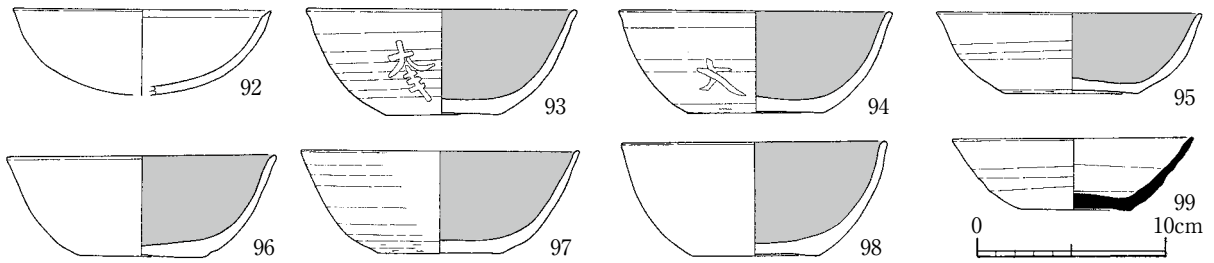
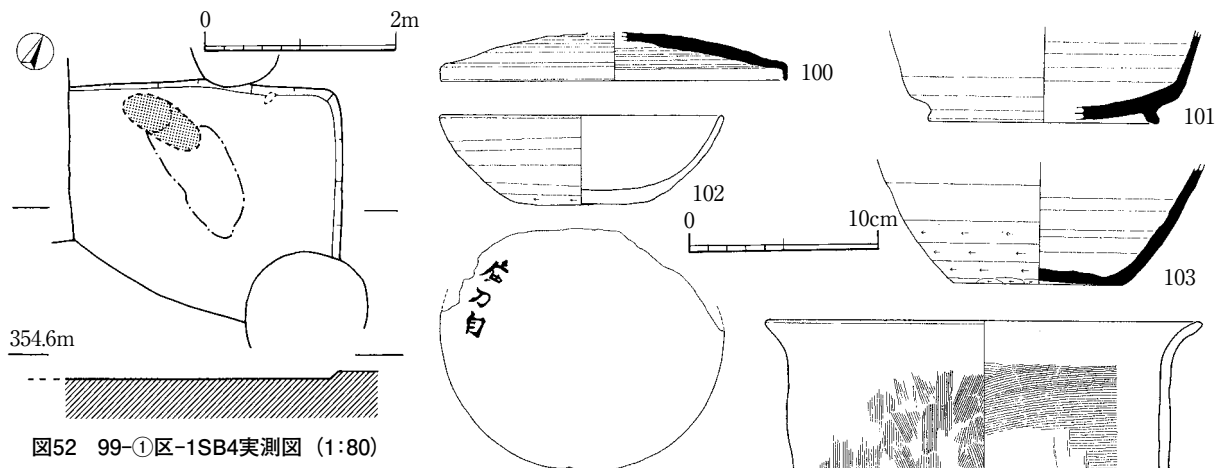


図51 97-②区-1SB14出土土器実測図 (1:4)

0 10cm



354.6m

図52 99-①区-1SB4実測図 (1:80)



99-①区-1 SB4

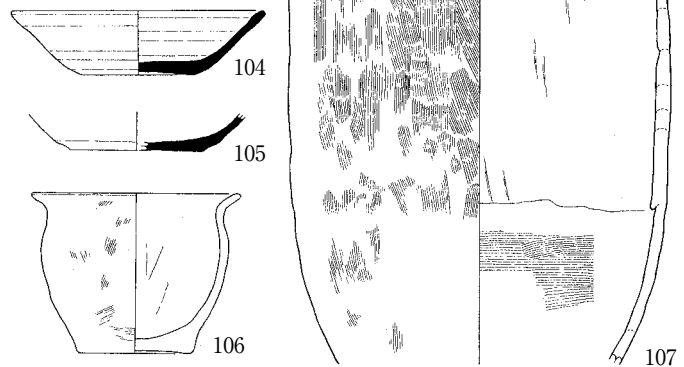


図53 99-①区-1SB4出土土器実測図 (1:4)

99-①区-1 SB4

調査区外にかかるため、北側のみの検出である。住居に伴う掘り込み等の検出はないが、北壁に被熱による堅化面と焼土面がみられることから、カマドの存在が窺われる。また、住居中央部には、一部ではあるが貼り床が認められる。

99-②区-2 SB8

調査区外にかかるため東半のみの検出。東壁際を井戸跡 (SE 4) が重複する。

検出面からの深さは22cmを測り、床面は明瞭な状態であるが、柱穴などの住居に伴う施設の検出はみられなかった。

カマドは北西壁に位置する。片方は調査区外に掛かるが、袖は粘土構築によるものである。内部には焼土が広がり、壁面に付く形で石や土器が出土している。



99-②区-2 SB8



99-②区-2 SB8カマド

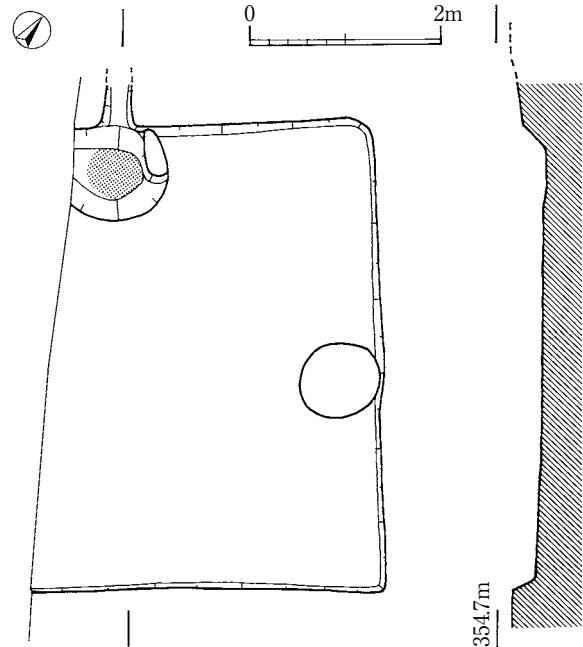


図54 99-②区-2SB8実測図 (1:80)

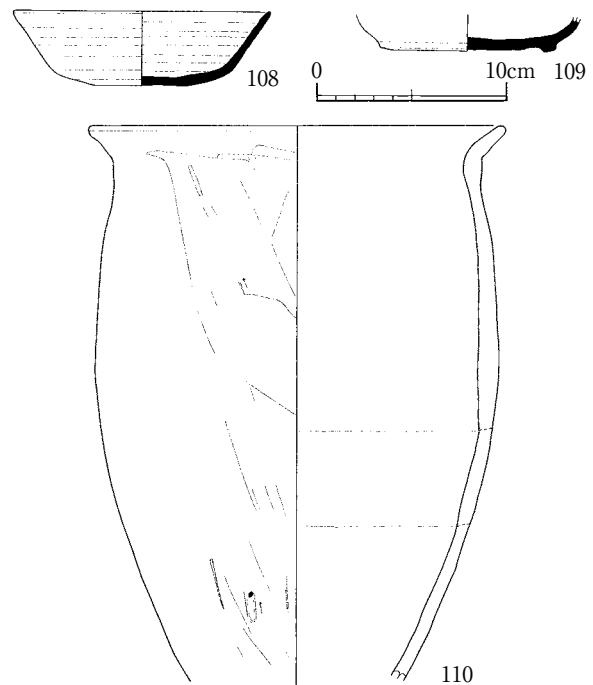


図55 99-②区-2SB8出土土器実測図 (1:80)

99-②区-2 SB10

調査区外にかかるため西半のみの検出。カマドは北壁中央に位置する。半分のみの検出で、焼土面の広がりが確認できるが、袖部については明確ではない。床面は検出面からの深さが最も深い北側で10cm程、南に行くにつれてさらに浅くなっていく。他の施設の検出はなく、カマド前に浅い掘り込みがみられるのみである。



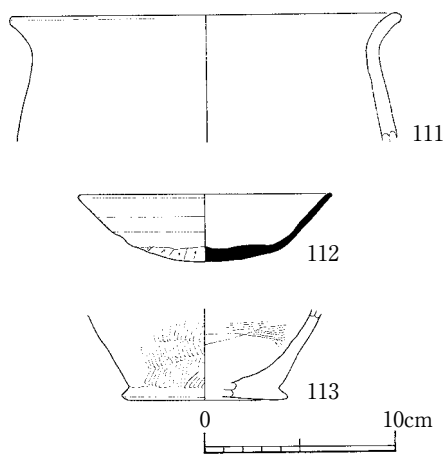


図56 99-②区-2SB10出土土器実測図 (1:4)

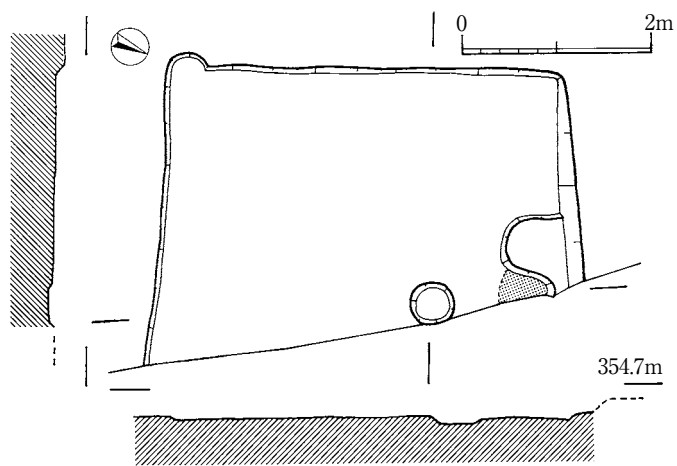


図57 99-②区-2SB10実測図 (1:80)



99-②区-2 SB10



99-②区-2 SB10カマド

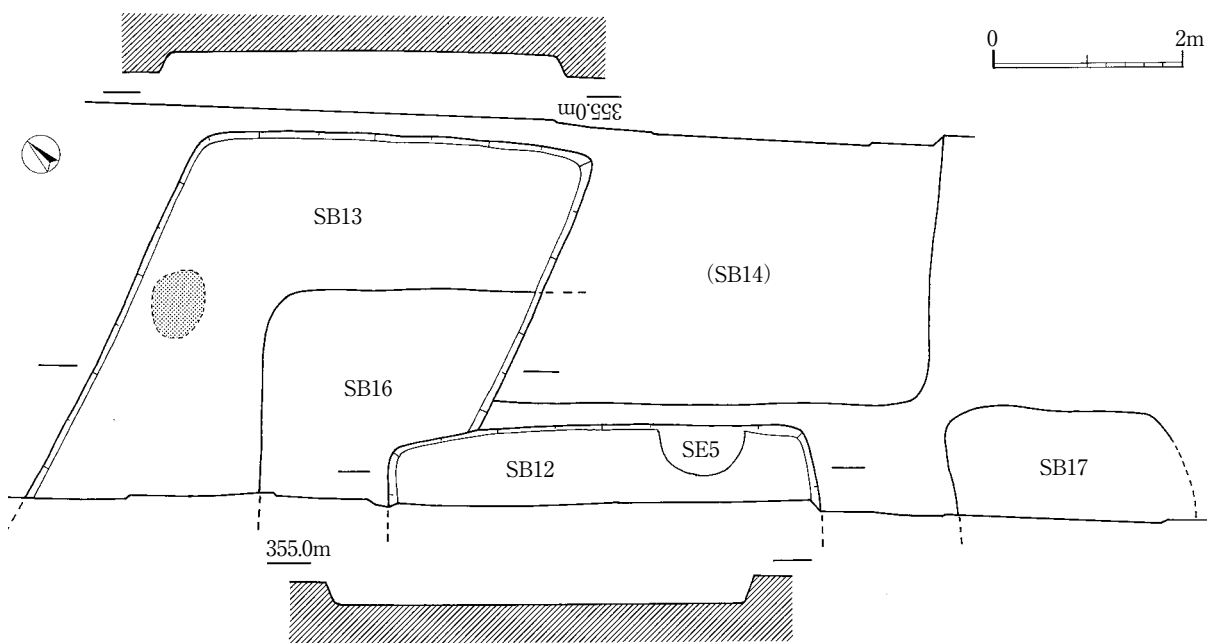


図58 99-③区-2SB12・13・16・17実測図 (1:80)

SB12・13・16・14（平安時代住居）とが重複する。この内、SB16はSB13の床面上で範囲のみを確認し、SB17も遺構の立ち上がりなどはなく範囲のみの確認である。

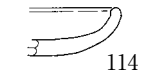
いずれの遺構でも、床面は地山面の検出である。調査区外となり検出は半分程であるため住居内施の検出はなく、SB13で北壁寄りに焼土面がみられるのみである。

SB13では、石製模造品（有孔円板9点・剣形1点）（図90-1～10）が出土していることが特記される。なお、これらは五世紀後半が主体となるものであり、本来は中期終末までの時期とするのが妥当となる。

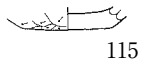


99-③区-2 SB12~17

SB12 (114・115)



114



115

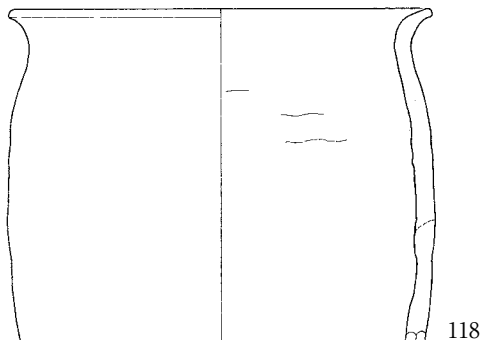
SB13 (116~120)



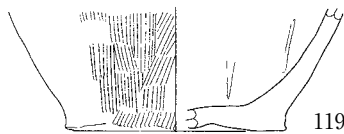
116



117

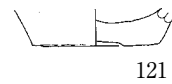


118

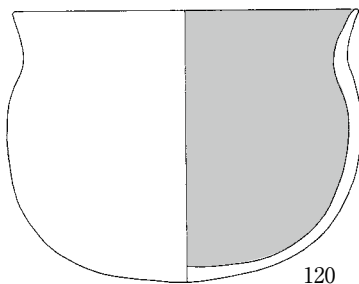


119

SB16 (121)



121

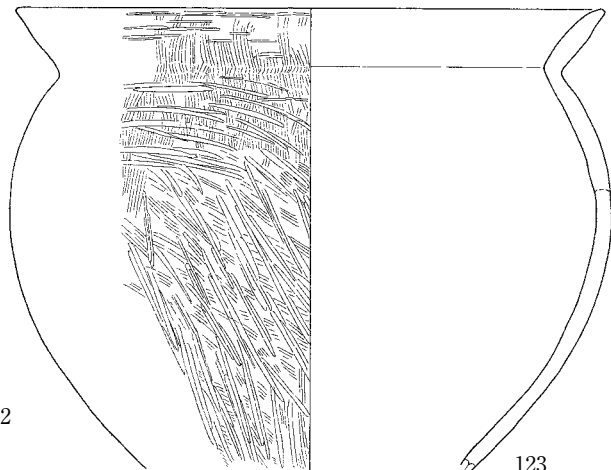


120

SB17 (122・123)



122



123



図59 99-③区-2SB12・13・16・17出土土器実測図 (1:4)

92検出面 (124~127・131)

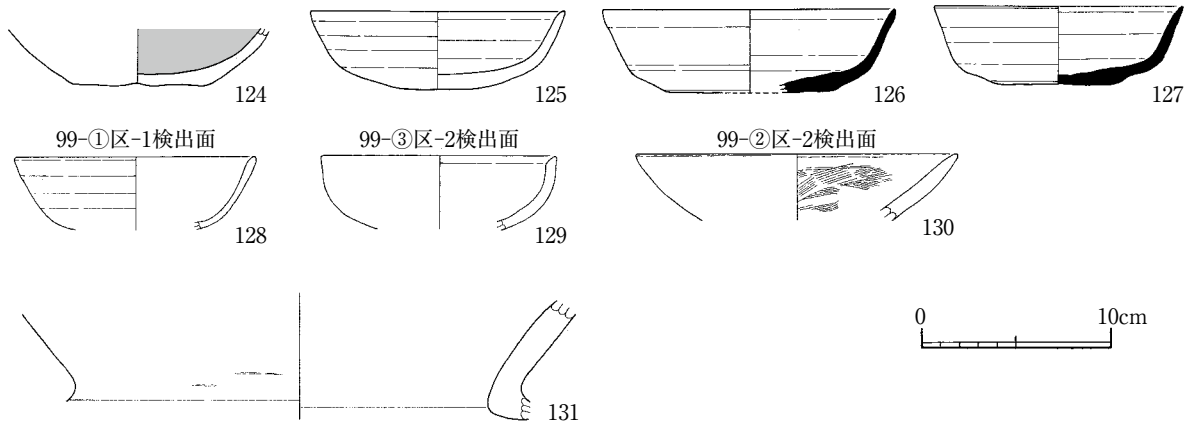


図60 検出面出土土器 (1:4)

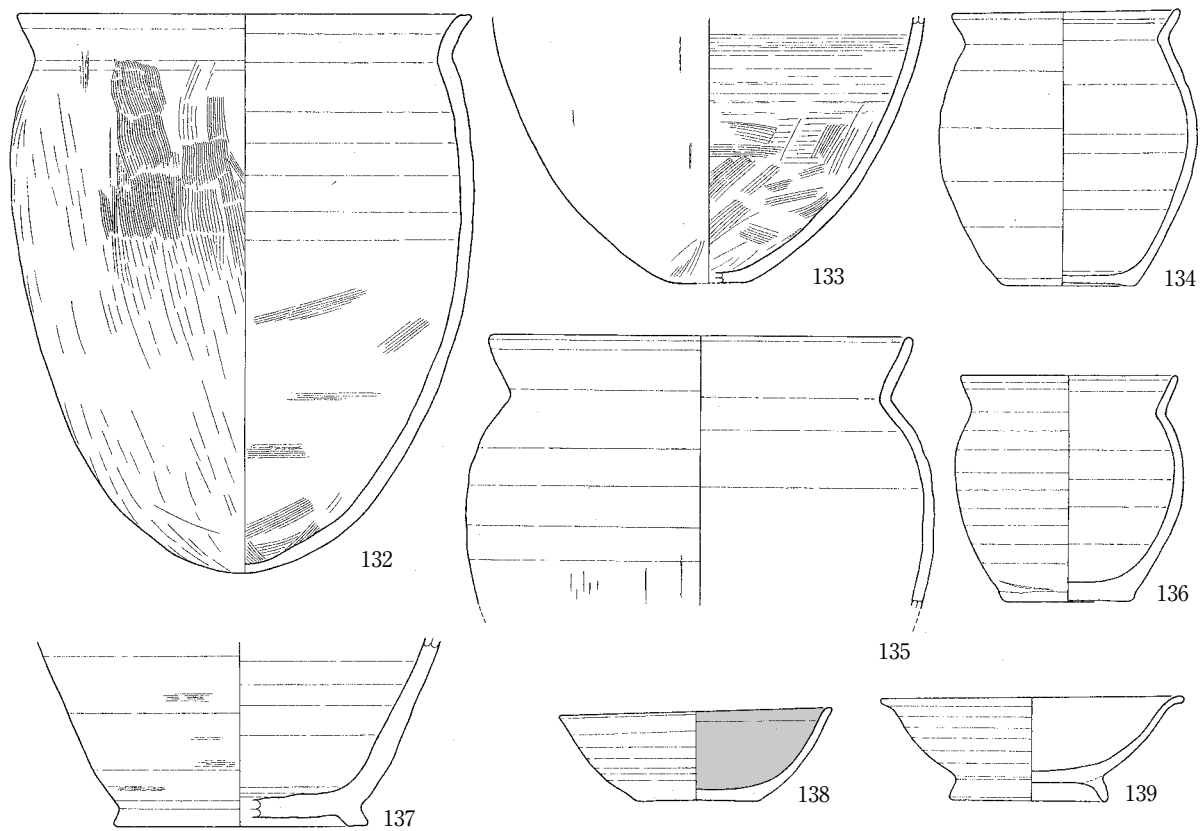
当時期では、住居跡からの出土が主である。ここでも他時期の混入とみられるものが多く、特に平安時代のものとの混在している状況であった。このため、出土位置より判断している。

一遺構からの遺物の出土は特に少ない状態であった。92-SB5 (図45-74~78) では、ハケ調整の甕と非ロクロ成形の坏がある。得にカマドや焼土付近での長胴甕の出土が多く、他の遺構でも同じ出土状況がみられる。また、小形の甕などでは木葉痕のあるものがみられる。

92-SB5、99-③-SB12・13・16・17 (図59) の様に古墳時代と判断されるものの他は、ハケ・ケズリ調整の長胴甕と、次に多い坏から土師器の非ロクロ調整からロクロ成形底面ヘラケズリのものへの変化で遺構の前後をみるにとどまっている。なお、97-②区-SB14例では、実測固体は坏のみで非ロクロ成形とロクロ成形の底面ヘラケズリと糸切りが混じる。内黒処理されたものが多いことから、奈良~平安時代にかけての時期とされるものである。

# 5 平安時代

92-SB1 (132~139)



92-SB2 (140~144)

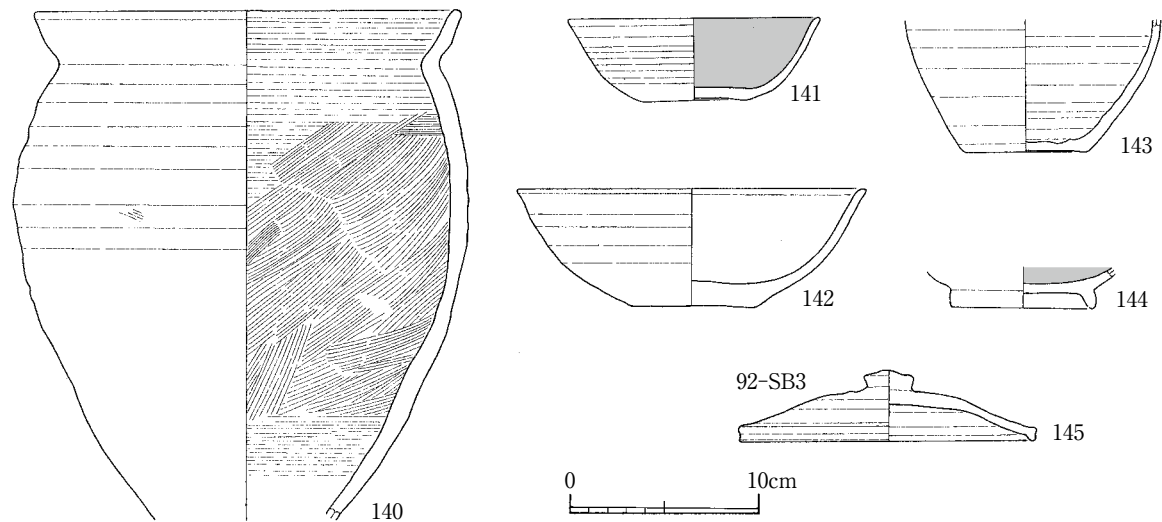


図61 92-SB1・2・3出土土器実測図 (1:4)

97-①区-1 SB1

西側は調査区外となり、検出は半分である。カマドは南壁中央に位置する。煙道と焼土および炭化面が広がる。周囲には土器と石材がみられるが、特に石はカマドの構築材としての位置を保っているものはみられない。

検出面から床面までの掘り込みは30cmを測る。貼り床はなく地山面を床面としたものであるが明瞭な状態である。

遺構に伴う掘り込みはピットが4ヶ所で検出されたが、いずれも掘り込みは浅く、土器の出土等も見られなかった。この他住居に伴う施設の検出はない。

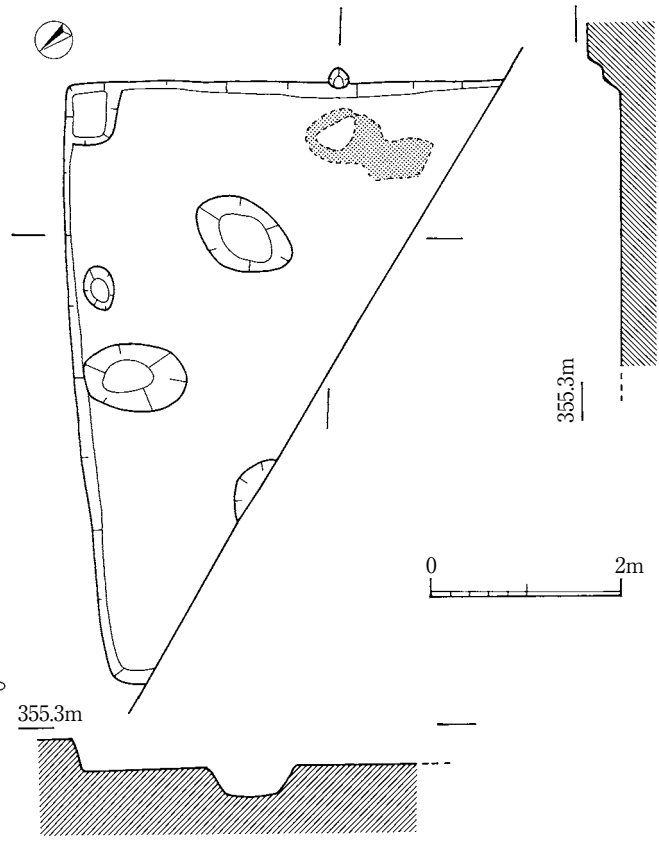


図62 97-①区-1SB1実測図 (1:80)

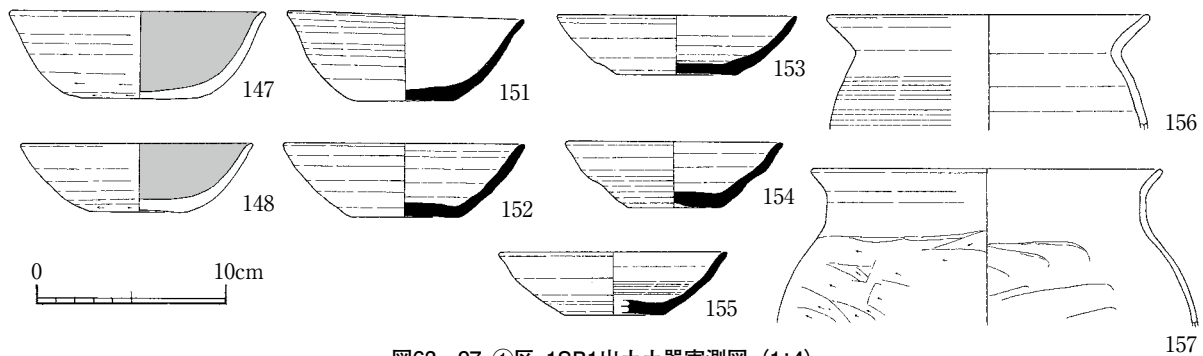
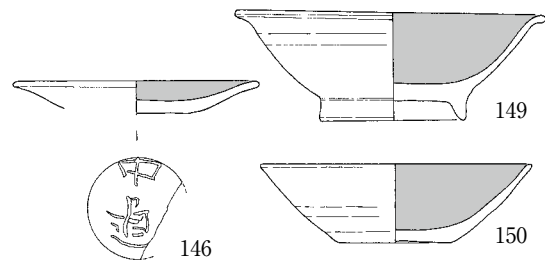


図63 97-①区-1SB1出土土器実測図 (1:4)



97-①区-1 SB1



97-①区-1 SB1カマド

97-①区-1 SB2

西側が調査区外となり、全体の2/3ほどの検出である。

平面形は長方形と考えられ、短辺（北側）のやや東寄りの位置にカマドが位置する。カマドの構築材等は見られず、煙道と前面に焼土面がみられるのみである。

検出面から床面までの深さは40cmと深く、覆土中からは石器などの出土がみられる。床面は貼り床などはみられないが検出は明瞭である。遺構に伴う掘り込みは1ヶ所のみで、住居内施設等の検出はなかった。

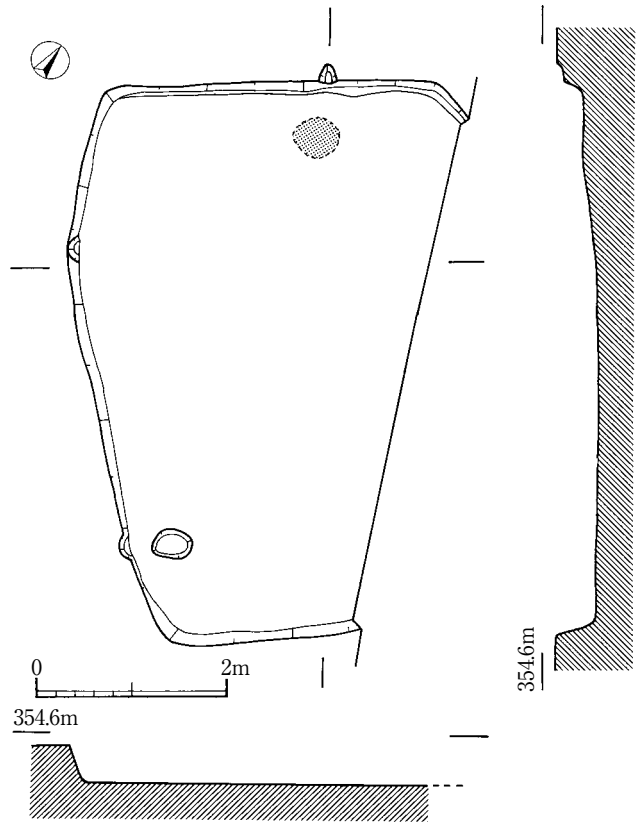
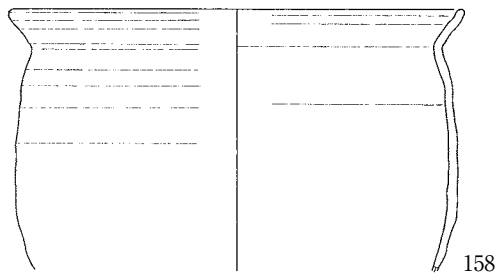


図64 97-①区-1SB2実測図 (1:80)



158

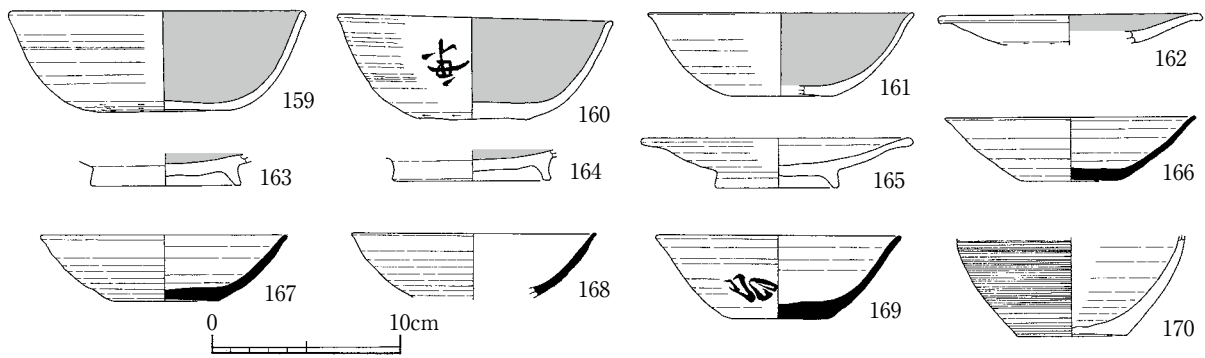


図65 97-①区-1SB2出土土器実測図 (1:4)



97-①区-1 SB2



97-①区-1 SB2カマド

97-①区-1 SB3

南東側をSB2が重複する。

平面形は長方形を呈し、北西側壁のやや西寄りにカマドが位置する。カマドの構築材等の検出はなく、前面に焼土面が残るのみである。

検出面から床面までの深さは約31cmあり、住居に伴う掘り込みはピットが数ヶ所と北隅に土坑が1基検出されている。土坑は壁面に沿って掘られた不整形のもので、周辺および覆土中から石や土器が出土している。

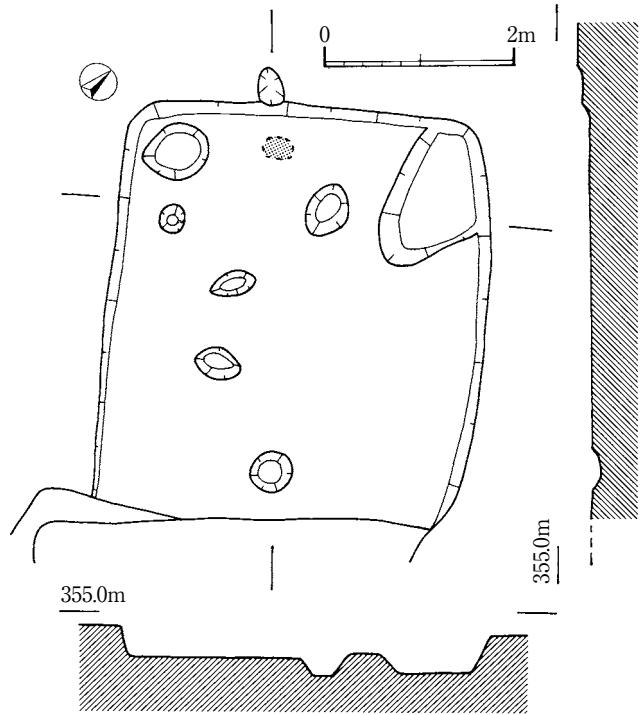


図66 97-①区-1SB3実測図 (1:80)

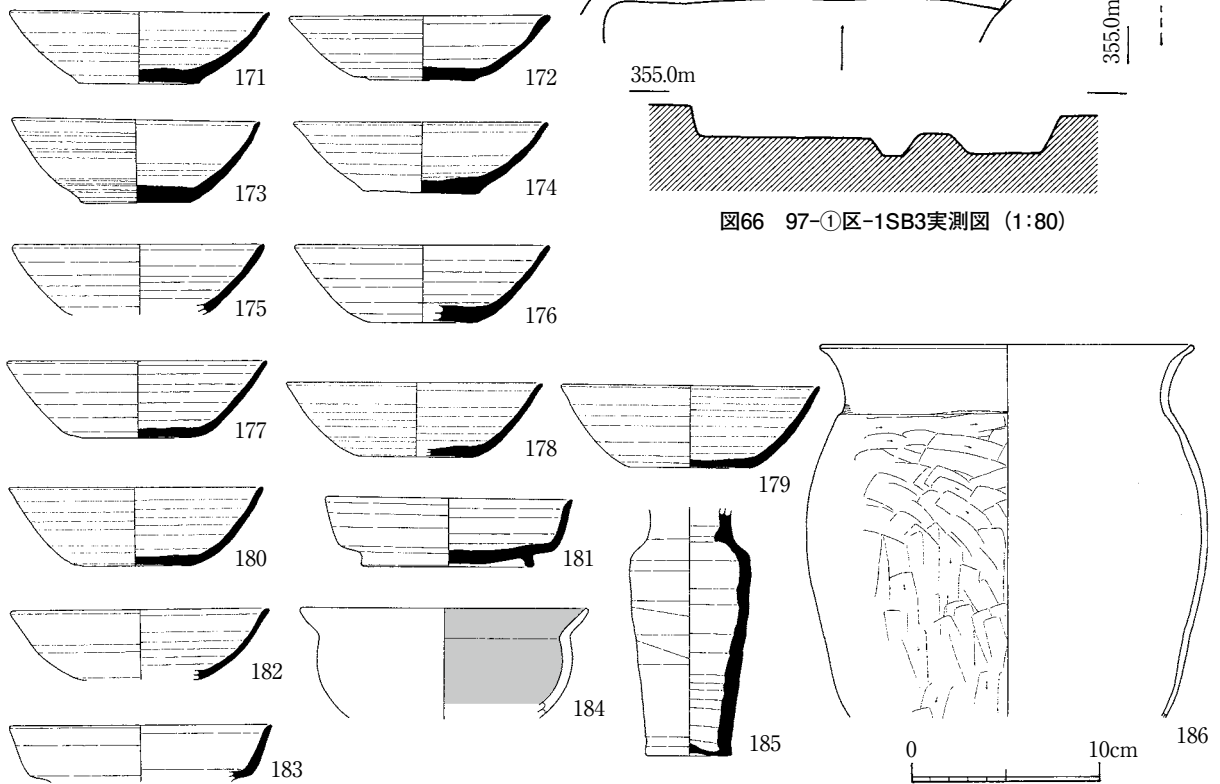
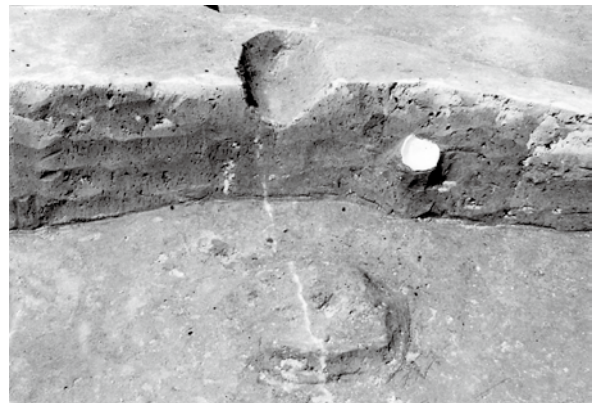


図67 97-①区-1SB3出土土器実測図 (1:4)



97-①区-1 SB3



97-①区-1 SB3カマド

97-②区-1 SB1

調査区外に掛かり、西半のみの検出。

カマドは北壁中央に位置する。煙道と炭および焼土面が残る。石などが周囲に集中してみられる状態であるが、構築材として原位置を留めているものはみられない。検出面から床面までの深さは25cm、中央には貼り床がみられる。



97-②区-1 SB1

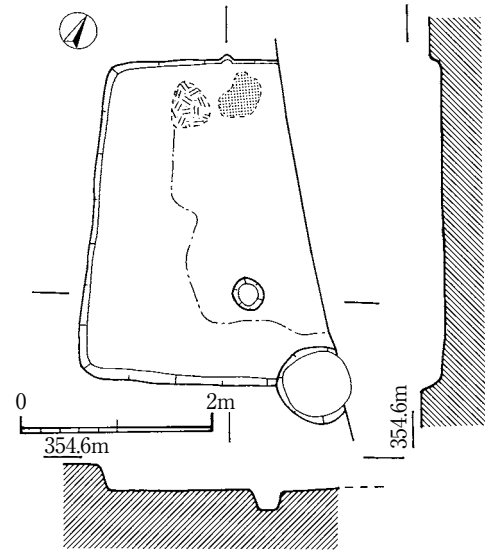


図68 97-②区-1SB1実測図 (1:80)

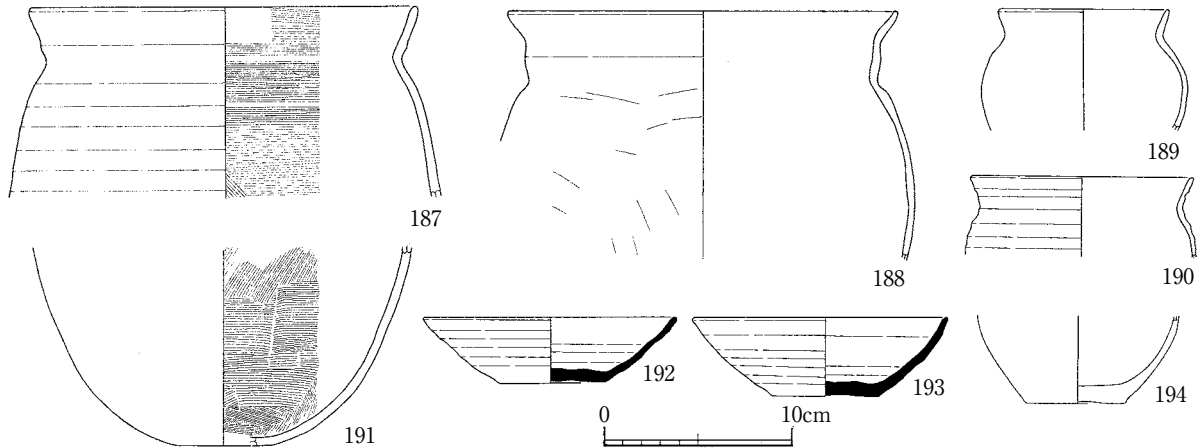


図69 97-②区-1SB1出土土器実測図 (1:4)

97-②区-1 SB2

調査区外にかかるため、東側のみの検出である。検出の状態では不整形な形となっているが、本来は方形を呈するものとみられる。

カマドは煙道の検出はなく、北壁寄りに炭化面と石および土器が集中してみられる。特に石は、構築材としての位置を留めているものはみられないが、この位置にカマドが作られていたことが推測される。

床面は検出面から最も深い所で45cmを測り、床中央のやや狭い範囲で貼り床がみられる。

なお、土器No204・205は他からの流れ込みのもの判断される。

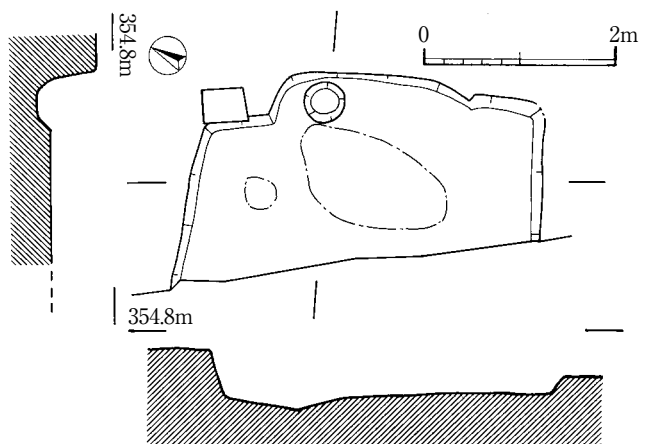
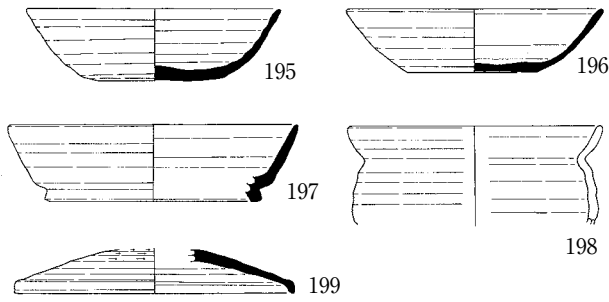


図70 97-②区-1SB2実測図 (1:80)





97-②区-1 SB2

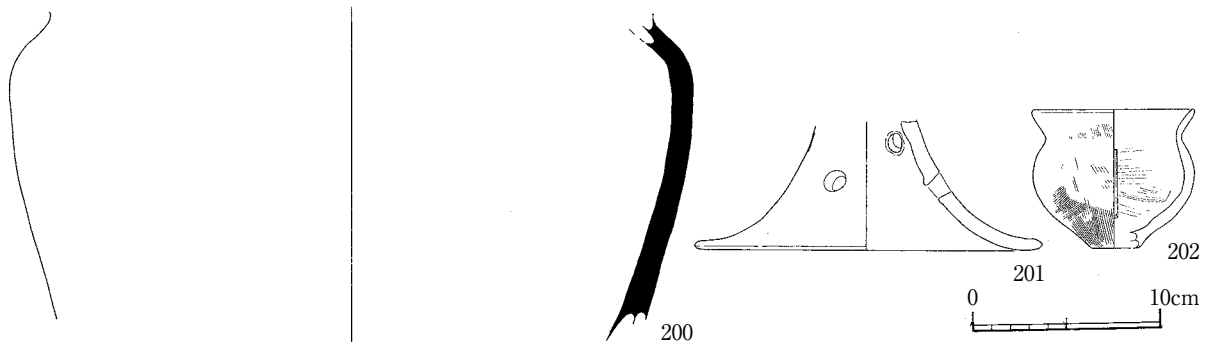


図71 97-②区-1SB2出土土器実測図 (1:4)

97-②区-1 SB7・8

SB10・13に重複する。東側は一部調査区外となる。SB8がSB7に完全に重複した状態であることから、SB7は北側の一部のみの検出となる。

カマドはSB7が北壁に煙道と前面に掘り込みおよび甕が出土している。SB8では、東壁に炭化面とその周辺に石と土器が集中してみられる。

なお、出土土器は各遺構のものとして検出したものもあるが、覆土中を中心に、SB7・8が混在(図73-215~220)した検出となっている。



97-②区-1 SB7・8

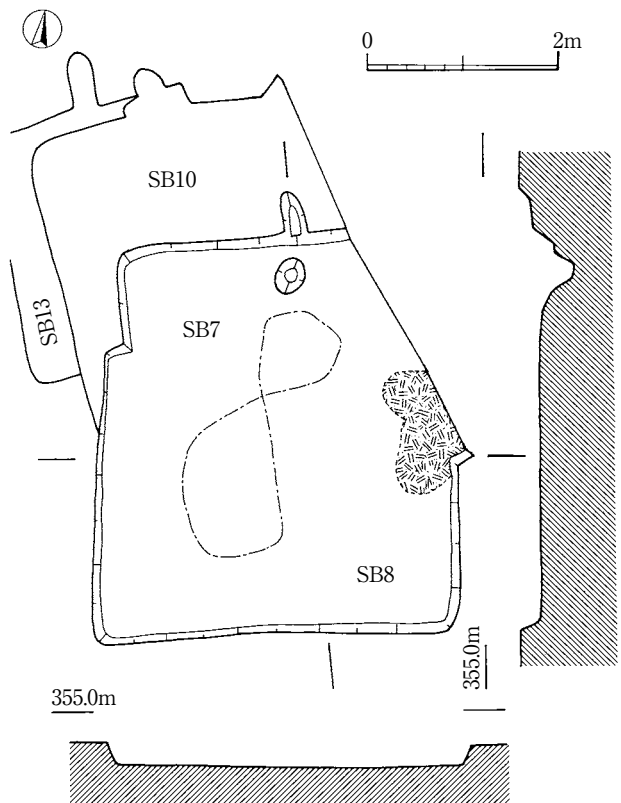
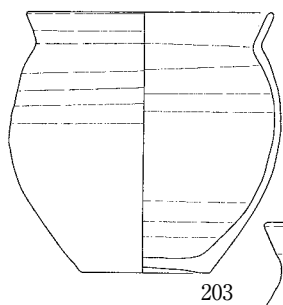


図72 97-②区-1SB7・8実測図 (1:80)

SB7 (203)

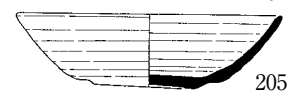


203

SB8 (204~214)



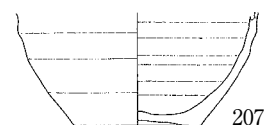
204



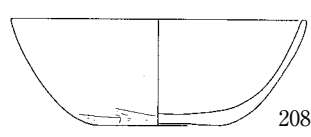
205



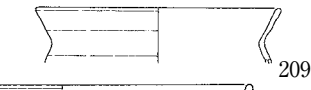
206



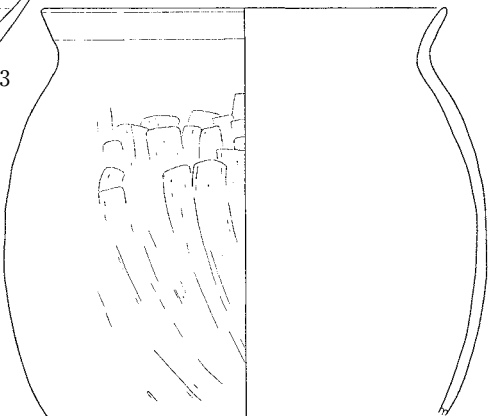
207



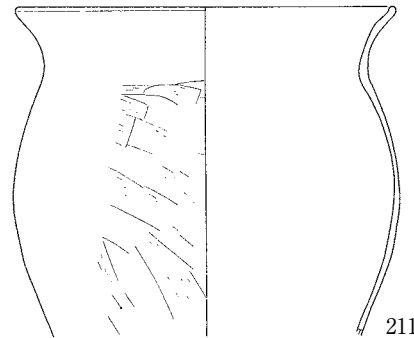
208



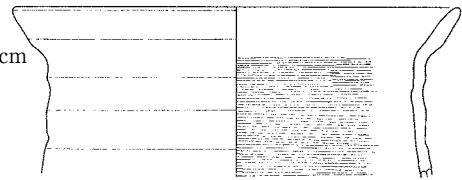
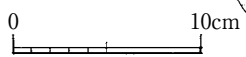
209



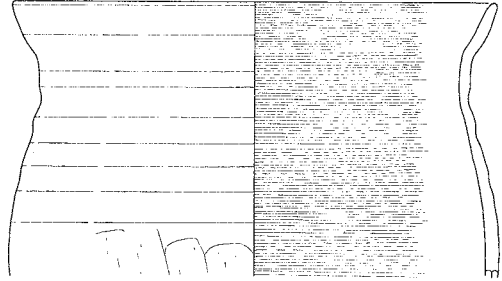
210



211



212



213

SB7・8 (215~220)



215



216



217



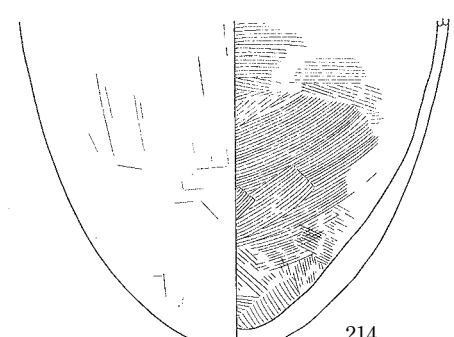
218



219

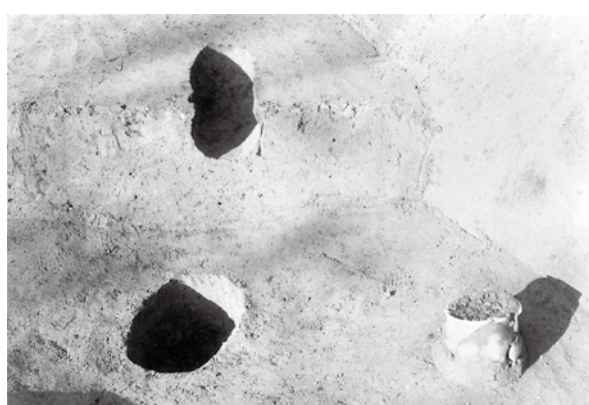


220



214

図73 97-②区-SB7・8出土土器実測図 (1:4)



97-②区-1 SB7カマド



97-②区-1 SB8カマド

97-②区-1 SB12

調査区外に掛かるため、西半分の検出である。平面形は正方に近い形を呈するとみられる。

検出面から床面までの深さは32cmを測る。検出された部分からは住居に伴う施設の検出はないが、貼り床部分の端に僅かに炭化物がみられる他に、東側の調査区壁際に石と土器がまとまってみられる。

なお、土器の出土位置から、図75-224・225は外から流入したものである。

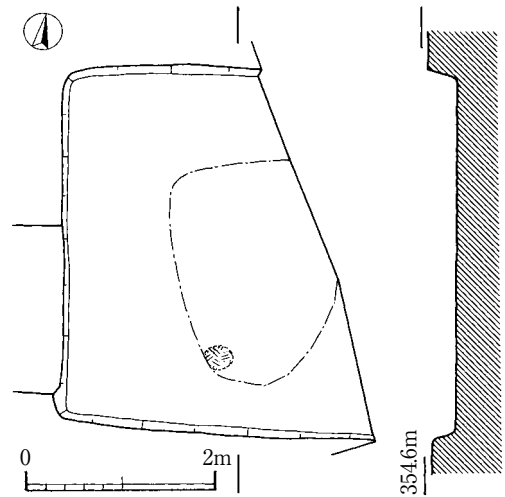


図74 97-②区-1SB12実測図 (1:80)

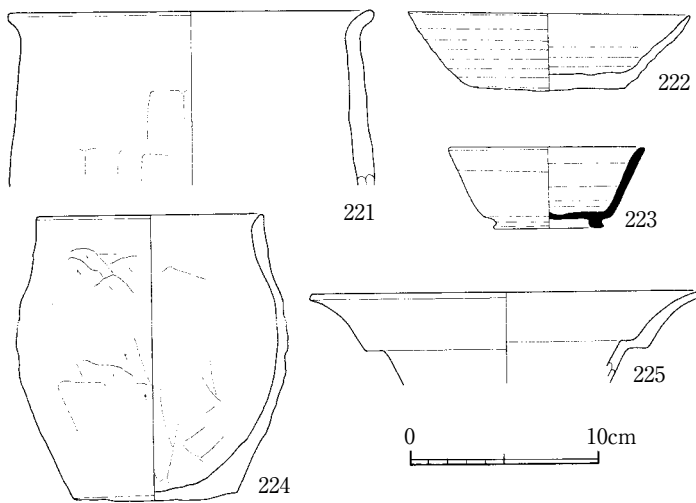


図75 97-②区-1SB12出土土器実測図 (1:4)



97-②区-1 SB12

97-2区-2 SB1・5

西側の半分以上が調査区外にかかり、SB1がSB5に重複している。

SB5は南北方向では5.8mを測る。さらに、99-3区-2SB15（図83）と同一の遺構となる可能性のある大型の住居跡とみられる。

検出面から床面までの深さはSB1で24cmとSB5よりも5cmほど深くなっている。床面は明瞭な状態での検出であるが、SB1の南壁付近とSB5との境に僅かに焼土がみられる他は住居に伴う施設等の検出はみられなかった。

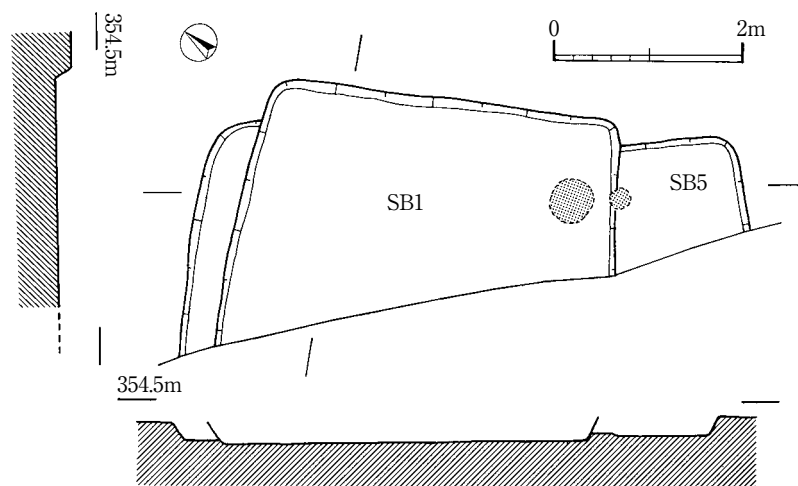


図76 97-②区-2SB1・5実測図 (1:80)

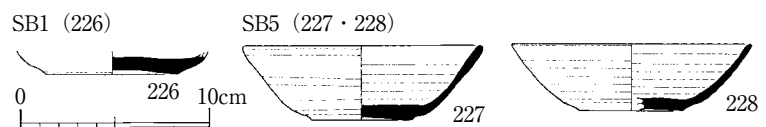
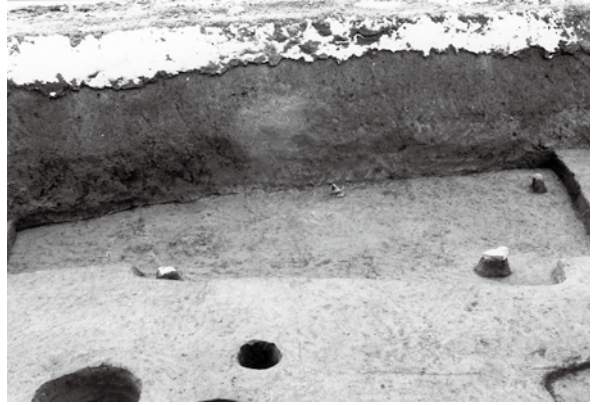


図77 97-②区-2SB1・5出土土器実測図 (1:4)



97-②区-2 SB5



97-②区-2 SB1・5

99-①区-1 SB1

西側の一部分が調査区外となる。検出面から床面までの深さは約5cmと浅いが、住居中央には貼り床と炭化物がみられる。

また、中央には石や土器が集中してみられ、25~40cm程の大きさの石も床面に接して検出されている。遺構自体の掘り込みの深さもなく、規模も一辺3.2m程の大きさであるが、土器の出土が多い。住居に伴う掘り込みは北壁に一ヶ所のみである。この他、遺構全体に、99-0面の方形ピットの影響を受けている。

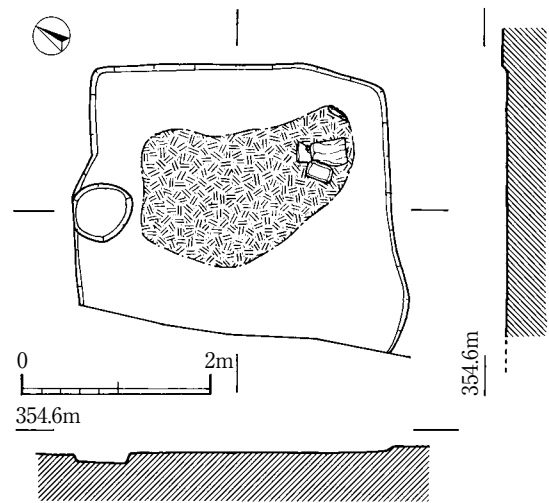


図78 99-①区-1SB1実測図 (1:80)

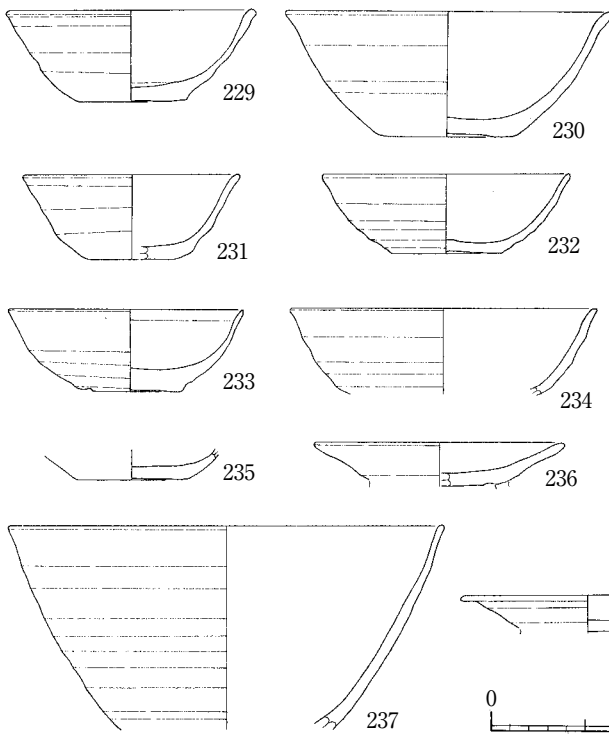


図79 99-①区-1SB1出土土器実測図 (1:4)



99-①区-1 SB1

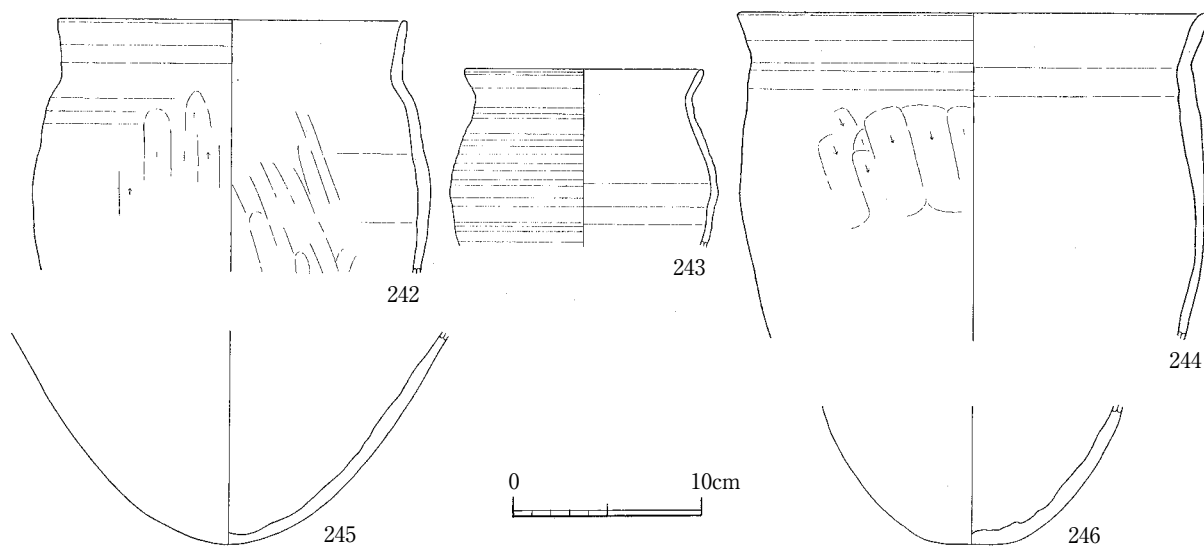


図80 99-①区-1SB1出土土器実測図 (1:4)

99-②区-2 SB9

西側の一部が調査区外となるが、ほぼ全体に近い検出となる。平面形はやや歪んだ正方形を呈する。

カマドは、煙道の明確な検出はないが、北西壁のやや西寄りの位置に焼土面、その西側に炭化面が広がっている。焼土面上には土器や石が集中してみられる。カマドの構築材としての位置を保っているものはみられないが、カマドが位置していたものである。

床面は検出面から約15cmを測る。貼り床はみられないが、良好な検出状態であり床面でのレキの出土がみられる。住居に伴う施設の検出はみられなかった。

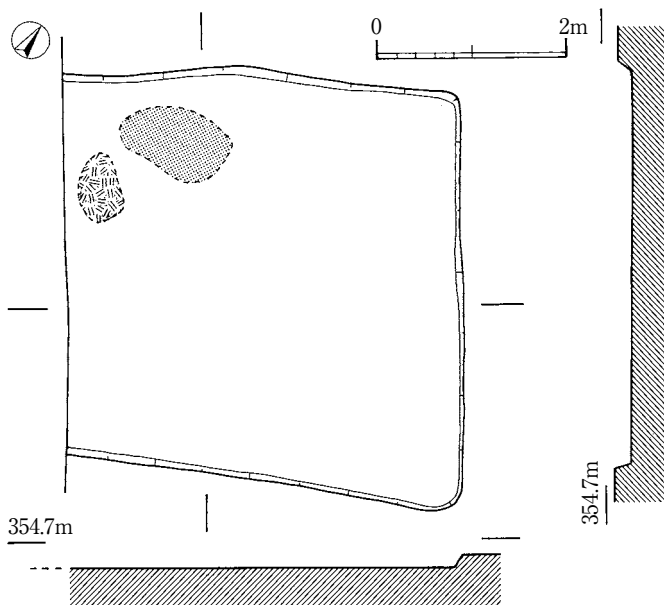


図81 99-②区-2SB9実測図 (1:80)



99-②区-2 SB9



99-②区-2 SB9カマド

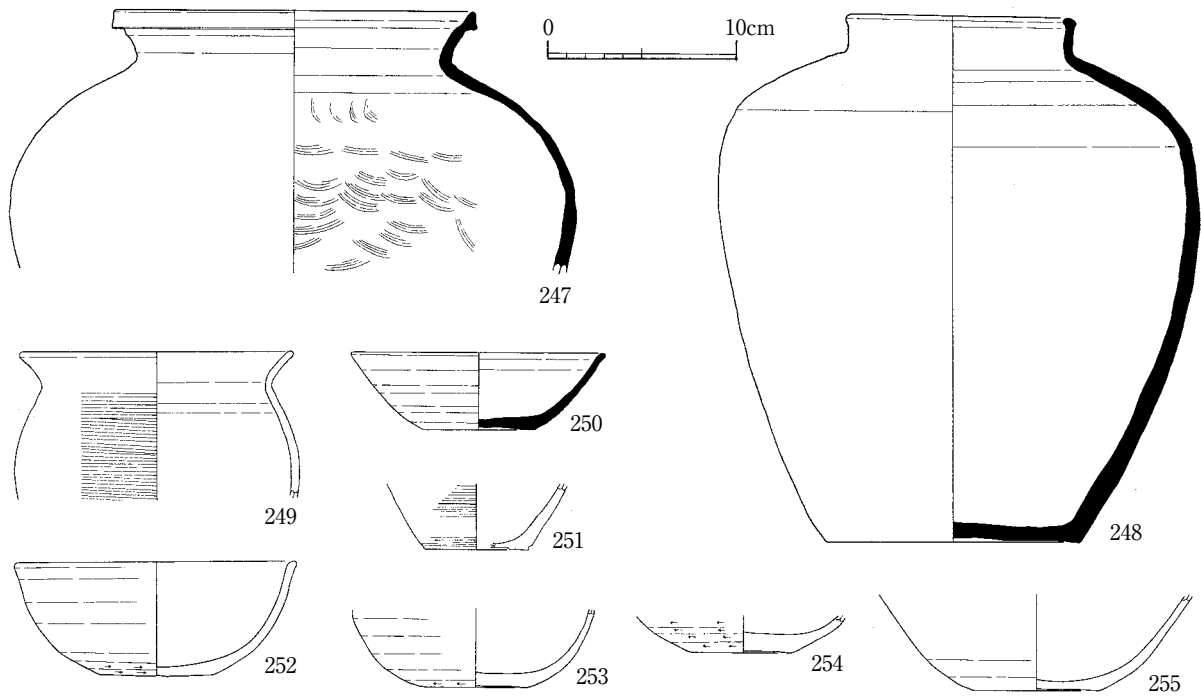


図82 99-②区-2SB9出土土器実測図 (1:4)

99-③区-2 SB11・15

SB11がSB15に重複する。SB11は東西側が一部調査区外となり、SB15も検出範囲は一部で床面のみを検出であるが、97-2区-2SB1 (図76) と同一の遺構の可能性ある。

検出面から床面までの深さはSB11で24cm、SB15はそれよりも高い位置となっており、SB11・15とも貼り床の検出はない。遺構に伴う掘り込みは中央の東西方向にピットが3ヶ所並んでいる。この内のひとつは2段に掘り込まれたものである。

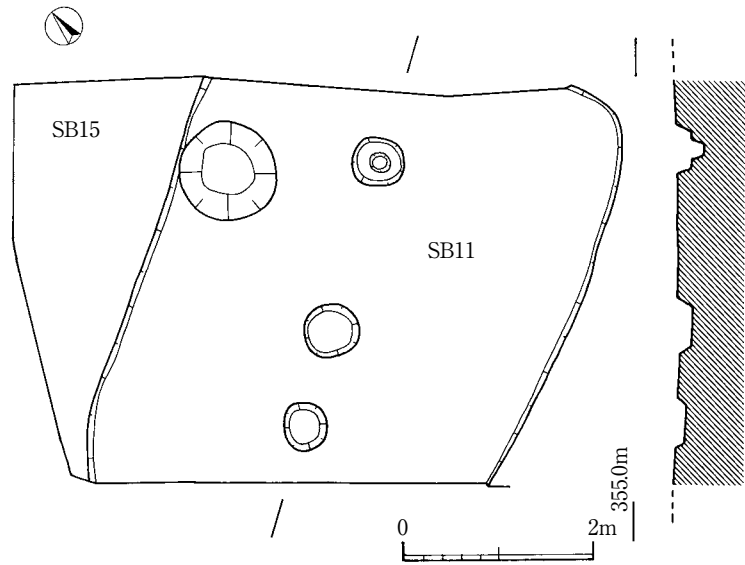


図83 99-③区-2SB11・15実測図 (1:80)



99-③区-2 SB11・15

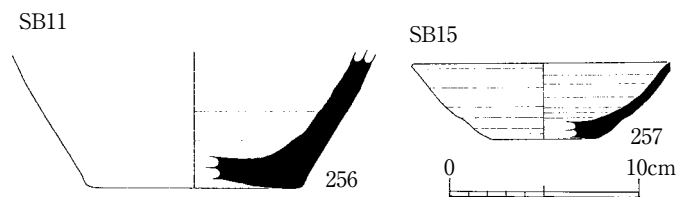


図84 99-③区-2SB11・15出土土器実測図 (1:4)

99-③区-2 SB14

調査区外にかかるため、西側1/3程の検出である。北側はSB13と重複する。遺構に伴う掘り込み等の検出はみられないが、床面は検出面から25cmの深さがあり、検出状況は明瞭である。



99-③区-2 SB14

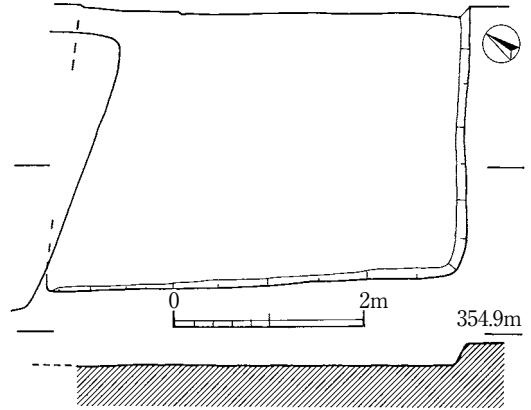


図85 99-③区-2SB14実測図 (1:80)

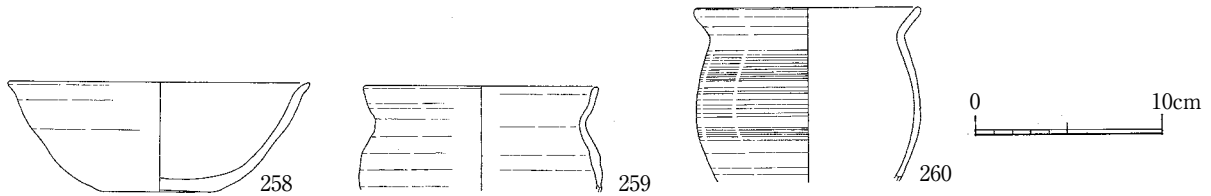
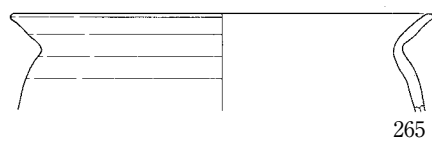
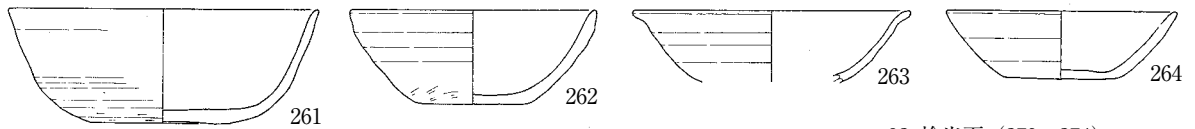


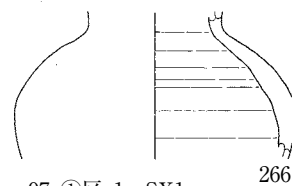
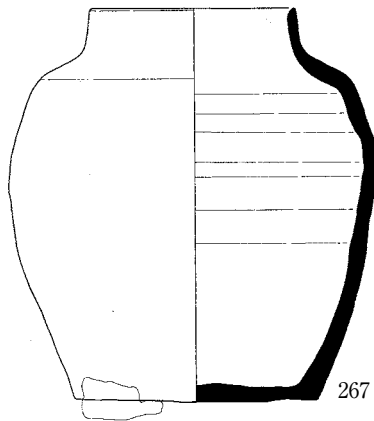
図86 99-③区-2SB14出土土器実測図 (1:4)

その他遺構・検出面

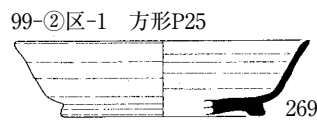
97-①区-1 SK1 (261~266)



97-①区-1 SK2



97-①区-1 SX1



99-②区-1 方形P25

92-検出面 (270・274)



97-②区-1 検出面



97-②区-2 検出面



99-②区-2 検出面

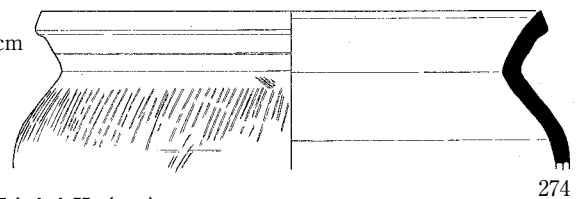
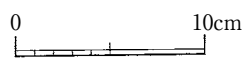


図87 他遺構・検出面出土土器 (1:4)

遺物の出土点数が最も多く、一遺構からの出土も良好である。住居からは、甕はケズリ・カキメ調整のものと、大形の須恵器のものが破片を含め多くみられる。また、これらと共に住居からは坏が多い。この中で線刻と墨書がみられ、線刻は底部に「×」がほとんどであるが図63-146は底部に「中道」と漢字が書かれる。墨書は胴部外面にあり、いずれも漢字であるが、同じ字を書いたものはみられない。坏は土師器と須恵器の底部回転糸切りまたはヘラ切りが共存する例が多い中、99-①区-1SB1では実測固体はすべて土師器で内黒が大勢を占め、黒色土器を中心とした他と比べ新しい様相を呈する。

特記されるものとして高台付坏（図45-84）が挙げられる。特徴は胴部中央に断面が三角形のタガが一条回るものである。土器のつくりは、底面回転糸切りで内外面とも黒色であり、内面は暗文がみられる丁寧な作りであるが、現段階での類例はみられないものである。

### 92-SK2（ウマ埋納土坑）

調査区南、SB1の南側に接する位置にある。遺構からは、ウマの骨が一頭分検出された。長辺が1.3mあまりの楕円形で、南北方向を向く。獣骨は首と背を丸め、後ろ足を前へ伸ばした形で、頭は北を向く。検出面から獣骨が接する面までの深さは18～20cmを測るが、土坑自体はその下でもう一段掘り込まれており、2段に掘り込まれたものである。

検出の状況から、ウマは埋納されたものであると判断されるが、土坑は掘り方から、ウマの埋納のために掘られたものではなく、井戸を転用したものである。



92-①区 SK2ウマ出土状況

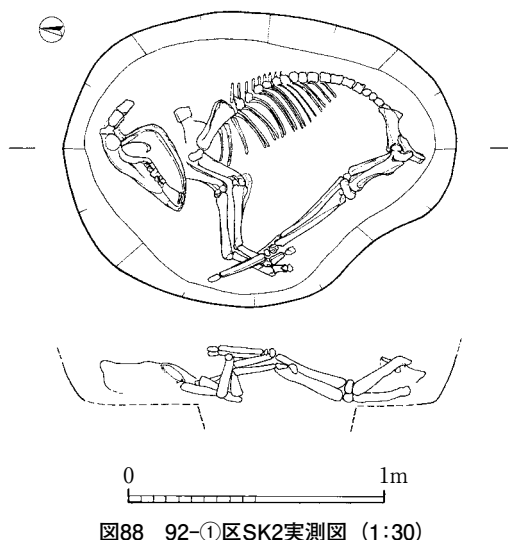


図88 92-①区SK2実測図 (1:30)



92-②区 SD5・Pit群

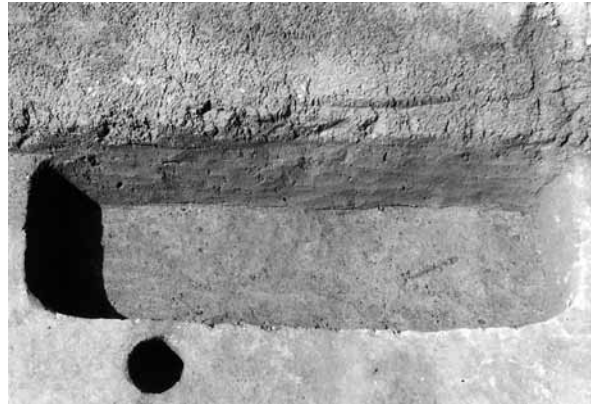


92-②区 SD3・4

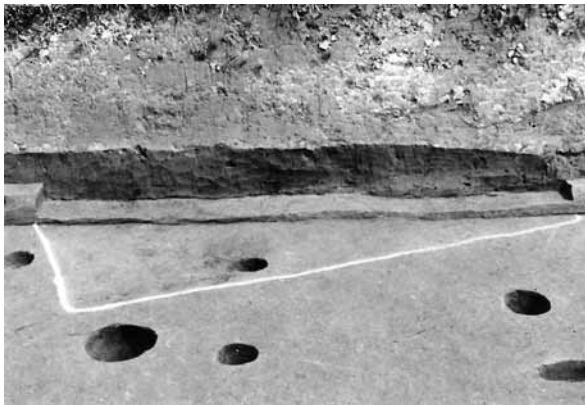




92-③区 SX2



97-①区-1 SB5



97-①区-2 SB1



97-②区-1 SB2



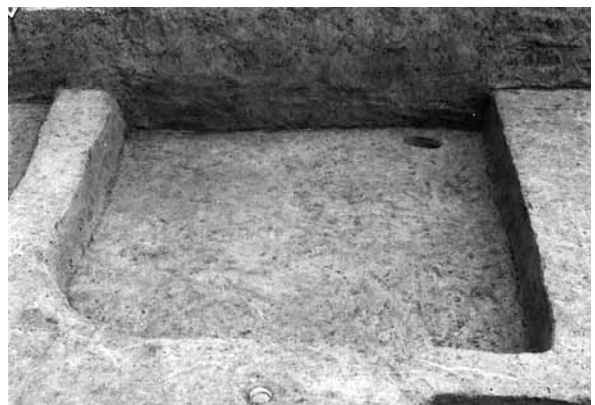
97-②区-1 SB6



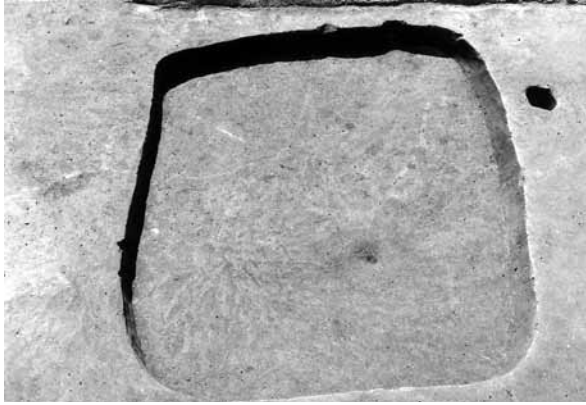
97-②区-2 SB3



97-②区-2 SB4



97-②区-2 SB6



97-①区-1 SK5



97-①区-1 SK14



97-①区-1 SD2



97-①区-1 SX1 · SK15



97-②区-1 SK17



99-①区-1 SE2



99-①区-1 SE3



99-①区-2 SX1

表5 土器観察表

図版	出土遺構						時 期	種 別	器 種	残存部		調整・その他
	図 No.	年 度	区	面	遺構	出土位置				部 位	量	
21	1	97	2	3	SB1	覆土	弥生後期	弥生土器	壺	胴部	1/5	赤彩
	2	97	2	3	SB1	覆土	弥生後期	弥生土器	ミニチュア	胴部～底部	1	
23	3	97	2	2	SB2	覆土	古墳前期	土師器	甕	口縁	1/5	ミガキ
	4	97	2	2	SB2	覆土	古墳前期	土師器	壺	胴部～底部	2/3	ミガキ
	5	97	2	2	SB2	覆土	古墳前期	土師器	台付甕	脚部	2/3	ミガキ
25	6	99	1	2	SB7	No.2	古墳前期	土師器	甕	完	1/2	ハケ
	7	99	1	2	SB7	No.7	古墳前期	土師器	高坏	口縁	1/5	ミガキ
	8	99	1	2	SB7	No.1	古墳前期	土師器	壺	底部	1	ミガキ
27	9	97	2	1	SB9	覆土	古墳前期	土師器	鉢	口縁～胴部	1/4	ミガキ
	10	97	2	1	SB9	覆土上層	古墳前期	土師器	高坏	杯部	1/2	
28	11	97	1	1	SD2	覆土	古墳前期	土師器	鉢	完	1/2	
	12	97	1	1	Pit41	覆土	古墳前期	土師器	小形丸底	胴部～底部	1	ミガキ
	13	97	1	1	SK5	覆土	古墳前期	土師器	小型丸底	完	1/2	
	14	92		1	SK6	覆土	古墳前期	土師器	小型丸底	底部	1	
	15	97	2	1	SK11	覆土	古墳前期	土師器	甕	胴部～底部	1/2	
	16	97	1	1	SK12	覆土	古墳前期	土師器	ミニチュア	底部	1/3	
	17	92		1	SX2	北 ズ中	古墳前期	土師器	甕	完	1/2	ハケ
	18	92		1	SX2	北	古墳前期	土師器	甕	胴部～底部	1	
	19	97	1	1	SX1	覆土	古墳前期	土師器	高坏	脚部	1	
	20	92		1	検出面		古墳前期	土師器	高坏	脚部	1/2	
	21	92		1	検出面		古墳前期	土師器	坏	完	1/4	
	22	97	2	1	検出面		古墳前期	土師器	坏	完	1/3	ミガキ
	23	92		1	検出面		古墳前期	土師器	甕	完	2/3	
29	24	92		1	検出面		古墳前期	土師器	二重口縁壺	口縁	1/5	ミガキ
	25	97	1	1	検出面	TR-B'	古墳前期	土師器	坏	口縁～胴部	1/4	ハケ - ミガキ
31	26	92		1	SB4	覆土下層	古墳中期	土師器	小型丸底	完	1/2	
	27	92		1	SB4	覆土	古墳中期	土師器	鉢	完	1	
	28	92		1	SB4	覆土	古墳中期	土師器	坏	完	1/3	
	29	92		1	SB4	床面下	古墳中期	土師器	坏	完	2/3	
	30	92		1	SB4	覆土～床面	古墳中期	土師器	甕	口縁～胴部	1/5	ミガキ・黒斑
	31	92		1	SB4	覆土～床面	古墳中期	土師器	鉢	完	1/5	
	32	92		1	SB4	床面	古墳中期	土師器	甕	完	2/3	ミガキ・黒斑
	33	92		1	SB4	覆土～床面	古墳中期	土師器	坏	口縁～胴部	1/5	
	34	92		1	SB4	覆土～床面	平安	須恵器	坏	底部	1/2	回転糸切
	35	92		1	SB4	覆土下層	古墳中期	土師器	高坏	脚部(底)	2/3	ミガキ
33	36	97	1	1	SB4	Pit	古墳中期	土師器	短頸壺	完	1/5	ミガキ
	37	97	1	1	SB4	覆土	古墳中期	土師器	坏	底部	1/2	ミガキ
	38	97	1	1	SB4	No.4	平安	灰釉陶器	高台付杯	底部	1	
34	39	97	2	1	SB4	覆土～床面	古墳中期	土師器	高坏	脚部	2/3	ミガキ
37	40	97	2	1	SB3	覆土	古墳中期	土師器	坏	底部	1/3	
38	41	97	2	1	SB5	覆土	古墳中期	土師器	甕	口縁	1/5	
	42	97	2	1	SB5	覆土	古墳中期	土師器	杯	完	2/3	
40	43	97	2	2	SB7	覆土	古墳中期	土師器	直口壺	口縁～胴部	1/2	
	44	97	2	2	SB7	覆土	古墳中期	土師器	高坏	脚部	1/3	スカシ(円形) ミガキ
	45	97	2	2	SB7	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/3	木葉痕
42	46	97	2	2	SB8	覆土	古墳中期	土師器	坏	完	1/5	
44	47	99	3	2	SK3	覆土	古墳中期	土師器	坏	口縁	1/5	ミガキ
	48	99	3	2	SK3	No.2	古墳中期	土師器	坏	完	1	ミガキ
	49	99	3	2	SK3	No.1	古墳中期	土師器	坏	完	1	ミガキ
	50	99	3	2	SK3	覆土	古墳中期	土師器	坏	完	1/5	ミガキ
	51	99	3	2	SK3	覆土	古墳中期	土師器	坏	口縁	1/5	ミガキ・内黒
	52	99	3	2	SK3	覆土	古墳中期	土師器	坏	胴部～底部	1/3	ミガキ・内黒
	53	92		1	SD3	覆土	古墳中期	土師器	小型壺	完	2/3	
	54	92		1	SD3	覆土	古墳中期	土師器	小型壺	完	2/3	
	55	92		1	SD3	覆土	古墳中期	土師器	小型壺	完	2/3	

図版		出土遺構					時 期	種 別	器 種	残存部		調整・その他	
図	No.	年 度	区	面	遺 構	出土位置				部 位	量		
44	56	92		1	SD3	覆土	古墳中期	土師器	高坏	脚部	2/3	ミガキ	
	57	92		1	SD3	覆土	古墳中期	土師器	高坏	脚部	1		
	58	92		1	SD3	覆土上層	古墳中期	土師器	高坏	脚部	1	ミガキ	
	59	92		1	SD3	覆土中層	古墳中期	土師器	ミニチュア	完	1		
	60	92		1	SD3	床面付近	古墳中期	土師器	坏	完	2/3	内黒	
	61	92		1		検出面	古後～奈	土師器	壺	口縁	1		
	62	92		1		検出面	古後～奈	土師器	高坏	脚部	1/2		
	63	92		1		検出面	古墳中期	土師器	高坏	杯部	1/2		
	64	92		1		検出面	古墳中期	須恵器	蓋	完	2/3		
	65	92		1		検出面	古墳中期	須恵器	蓋	完	1/2		
	66	97	2	1		検出面	No,2	古墳中期	土師器	甕	口縁～胴部	2/3	
	67	97	2	1		検出面		古墳中期	須恵器	坏	完	1/3	
	68	92		1		検出面		古墳中期	土師器	坏	完	1	ミガキ
	69	97	2	1		検出面		古墳中期	土師器	高坏	杯部	1/3	
	70	97	2	1		検出面	TR-B'	古墳中期	土師器	甕	口縁～胴部	1/3	ミガキ・内黒
	71	97	2区	1面		検出面		古墳中期	土師器	高坏	杯部	1/3	
	72	97	2	1		検出面		古墳中期	土師器	高坏	杯部	2/3	ミガキ
	73	97	2	1		検出面	No,1	古墳中期	須恵器	甗	完	1	自然釉
	45	74	92		1	SB5	カマド周辺	古後～奈	土師器	甕	胴部	1/3	ハケ・黒斑
75		92		1	SB5	床面下	古後～奈	土師器	甕	口縁	2/3	ハケ・黒斑	
76		92		1	SB5	床面下	古後～奈	土師器	壺	胴部～底部	1/2		
77		92		1	SB5	床面下	古後～奈	土師器	坏	完	1	ハケ・黒斑	
78		92		1	SB5	床面下	古後～奈	土師器	坏	完	1	ハケ・黒斑	
79		92		1	SB5	覆土～床面	平安	土師器	坏	完	1/3	回転糸切/ミガキ・内黒	
80		92		1	SB5	覆土～床面	平安	土師器	坏	完	1	回転糸切/ミガキ・内黒	
81		92		1	SB5	覆土～床面	平安	土師器	坏	完	1/2	回転糸切/ミガキ・内黒	
82		92		1	SB5	覆土～床面	平安	土師器	高台付坏	完	2/3	内外黒色・ミガキ	
83		92		1	SB5	覆土～床面	平安	土師器	杯	完	2/3	回転糸切/内黒	
84		92		1	SB5	覆土～床面	平安	土師器	高台付坏	完	1/2	内外黒色/胴部タガ	
46	85	97	2	1	SB10	覆土	古後～奈	土師器	高坏	脚部	少	内黒/スカシ (三角)	
	86	97	2	1	SB13	煙道	古後～奈	土師器	甕	口縁	1/2		
49	87	97	2	1	SB11	覆土	古後～奈	土師器	甕	口縁	1/5		
	88	97	2	1	SB11	No,2	古後～奈	土師器	甕	底部	1/2	タタキ	
	89	97	2	1	SB11	覆土	古後～奈	土師器	坏	完	1/2	ヘラケズリ	
	90	97	2	1	SB11	覆土	古後～奈	土師器	坏	口縁	1/2	内黒	
	91	97	2	1	SB11	床	古後～奈	土師器	壺	胴部～底部	1	ミガキ	
51	92	97	2	1	SB14	覆土	古後～奈	土師器	坏	口縁	1/3	ミガキ	
	93	97	2	1	SB14	ズ1	古後～奈	土師器	坏	完	1	回転糸切・墨書	
	94	97	2	1	SB14	No,2	古後～奈	土師器	坏	完	1	ヘラケズリ・内黒	
	95	97	2	1	SB14	No,6	古後～奈	土師器	坏	完	1	回転糸切・底部線刻「×」	
	96	97	2	1	SB14	No,5	古後～奈	土師器	坏	底部	1/2	ヘラケズリ・内黒	
	97	97	2	1	SB14	No,2	古後～奈	土師器	坏	完	1/5	ヘラケズリ・内黒	
	98	97	2	1	SB14	No,4	古後～奈	土師器	坏	完	2/3	ヘラケズリ・内黒	
	99	97	2	1	SB14	No,3	古後～奈	須恵器	坏	完	1	回転糸切	
53	100	99	1	1	SB4	覆土	古後～奈	須恵器	蓋	完	1/3		
	101	99	1	1	SB4	覆土	古後～奈	須恵器	高台付坏	胴部～底部	1/5		
	102	99	1	1	SB4	覆土	古後～奈	土師器	坏	完	2/3	回転糸切/墨書「廣刀自」	
	103	99	1	1	SB4	覆土	古後～奈	須恵器	壺	底部	1/3	ヘラケズリ	
	104	99	1	1	SB4	覆土	古後～奈	須恵器	坏	完	1/2	回転糸切	
	105	99	1	1	SB4	覆土	古後～奈	須恵器	坏	底部	1/5	ヘラ切・底部線刻「×」	
	106	99	1	1	SB4	覆土	古後～奈	土師器	鉢	完	2/3		
55	107	99	1	1	SB4	覆土	古後～奈	土師器	甕	口縁～胴部	1/3		
	108	99	2	2	SB8	覆土	古後～奈	須恵器	坏	完	1/5	ヘラ切	
	109	99	2	2	SB8	覆土	古後～奈	須恵器	高台付坏	底部	1/2	ヘラ切	
	110	99	2	2	SB8	カマド	古後～奈	土師器	甕	口縁～胴部	1/2		

図版	出土遺構						時 期	種 別	器 種	残存部		調整・その他
	図 No.	年 度	区	面	遺構	出土位置				部 位	量	
56	111	99	2	2	SB10	カマド	古後～奈	土師器	甕	口縁	1/5	
	112	99	2	2	SB10	覆土	古後～奈	須恵器	坏	完	1/2	ヘラケズリ
	113	99	2	2	SB10	カマド	古後～奈	土師器	甕	底部	1/5	木葉痕
59	114	99	3	2	SB12	覆土	古後～奈	土師器	坏	完	1/5	ミガキ
	115	99	3	2	SB12	覆土	古後～奈	土師器	坏	底部	1	ヘラケズリ
	116	99	3	2	SB13	覆土	古後～奈	土師器	坏	口縁～胴部	1/5	
	117	99	3	2	SB13	覆土	古後～奈	土師器	坏	底部	1/5	
	118	99	3	2	SB13	No.1	古後～奈	土師器	甕	口縁～底部	1/2	
	119	99	3	2	SB13	No.2	古後～奈	土師器	甕	底部	1/5	木葉痕
	120	99	3	2	SB13	覆土	古後～奈	土師器	鉢	完	2/3	内黒
	121	99	3	2	SB16	覆土	古後～奈	土師器	甕?	底部	2/3	
	122	99	3	2	SB17	No.1	古後～奈	土師器	坏	完	1	ミガキ
	123	99	3	2	SB17	No.1	古後～奈	土師器	甕	口縁～胴部	1/2	ハケ-ミガキ
60	124	92		1	検出面		古後～奈	土師器	坏	胴部～底部	2/3	内黒
	125	92		1	検出面		古後～奈	土師器	坏	完	2/3	ヘラ切
	126	92		1	検出面		古後～奈	須恵器	坏	完	1/3	ヘラ切
	127	92		1	検出面		古後～奈	須恵器	坏	完	1/2	ヘラ切
	128	99	1	1	検出面		古後～奈	土師器	坏	完	1/4	ミガキ
	129	99	3	2	検出面		古後～奈	土師器	坏	完	1/4	ミガキ
	130	99	2	2	検出面		古後～奈	土師器	坏	口縁	1/5	
	131	92		1	検出面		古後～奈	土師器	甕	底部	1/3	
61	132	92		1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	完	2/3	ケズリ・黒斑
	133	92		1	SB1	カマド周辺	平安	土師器	甕	胴部～底部	1/3	ケズリ・黒斑
	134	92		1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	完	2/3	回転糸切
	135	92		1	SB1	カマド周辺	平安	土師器	甕	口縁	1/2	黒斑
	136	92		1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	完	1/2	回転糸切
	137	92		1	SB1	カマド左Pit内	平安	須恵器	甕	底部	1/3	回転糸切
	138	92		1	SB1	カマド周辺	平安	土師器	坏	完	1	回転糸切/内黒
	139	92		1	SB1	カマド左脇	平安	土師器	高台付杯	完	1	ヘラ切り
	140	92		1	SB2	覆土 No.3	平安	土師器	甕	完	2/3	カキメ
	141	92		1	SB2	覆土 No.1	平安	土師器	坏	完	2/3	回転糸切/内黒
	142	92		1	SB2	床面	平安	土師器	坏	完	1	回転糸切
	143	92		1	SB2	覆土 No.1	平安	土師器	甕	底部	1	静止糸切
	144	92		1	SB2	覆土	平安	土師器	高台付坏	底部	1	静止糸切/内黒
	145	92		1	SB3	覆土	平安	須恵器	蓋	完	1	
	63	146	97	1	1	SB1	No.6	平安	土師器	皿	完	1/2
147		97	1	1	SB1	覆土上層	平安	土師器	坏	完	2/3	ヘラケズリ/内黒
148		97	1	1	SB1	No.3	平安	土師器	坏	完	1	ヘラケズリ/内黒
149		97	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	高台付坏	完	2/3	回転糸切/内黒
150		97	1	1	SB1	覆土～床面	平安	土師器	坏	完	1/3	回転糸切/内黒
151		97	1	1	SB1	No.1	平安	須恵器	坏	完	1	回転糸切
152		97	1	1	SB1	No.5	平安	須恵器	坏	完	1	回転糸切
153		97	1	1	SB1		平安	須恵器	坏	完	1/3	回転糸切
154		97	1	1	SB1	覆土～床面	平安	須恵器	坏	完	1/2	回転糸切
155		97	1	1	SB1	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/3	回転糸切
156		97	1	1	SB1	No.2	平安	土師器	甕	口縁	1/5	
157		97	1	1	SB1	No.2	平安	土師器	甕	口縁	1/5	
65	158	97	1	1	SB2	No.3	平安	土師器	甕	口縁～胴部	1/5	
	159	97	1	1	SB2	No.1	平安	土師器	坏	完	1	ヘラケズリ/内黒
	160	97	1	1	SB2	No.6	平安	土師器	坏	完	2/3	内黒
	161	97	1	1	SB2	覆土	平安	土師器	坏	完	1/3	内黒/墨書
	162	97	1	1	SB2	覆土	平安	土師器	皿	口縁～胴部	1/5	内外黒色
	163	97	1	1	SB2	覆土	平安	土師器	高台付坏	底部	1	内外黒色/底部線刻「×」
	164	97	1	1	SB2	覆土	平安	土師器	高台付坏	底部	1	内外黒色/底部線刻「×」
	165	97	1	1	SB2	覆土	平安	土師器	皿	完	1/2	回転糸切-ナデ

図版		出土遺構					時 期	種 別	器 種	残存部		調整・その他
図	No.	年 度	区	面	遺 構	出土位置				部 位	量	
65	166	97	1	1	SB2	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/3	回転糸切
	167	97	1	1	SB2	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/3	回転糸切
	168	97	1	1	SB2	覆土	平安	須恵器	坏	口縁~胴部	2/3	
	169	97	1	1	SB2	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/5	回転糸切/墨書「水?」
	170	97	1	1	SB2	覆土	平安	土師器	甕	底部	1/2	回転糸切
67	171	97	1	1	SB3	覆土	平安	須恵器	坏	底部	1/2	回転糸切
	172	97	1	1	SB3	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/2	回転糸切
	173	97	1	1	SB3	覆土	平安	須恵器	坏	底部	1/2	回転糸切
	174	97	1	1	SB3	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/2	回転糸切
	175	97	1	1	SB3	カマド	平安	須恵器	坏	口縁~胴部	1/2	回転糸切
	176	97	1	1	SB3	カマド	平安	須恵器	坏	完	1/2	回転糸切
	177	97	1	1	SB3	カマド	平安	須恵器	坏	完	1/3	回転糸切
	178	97	1	1	SB3	カマド No.2	平安	須恵器	坏	完	2/3	回転糸切
	179	97	1	1	SB3	カマド	平安	須恵器	坏	完	1/2	回転糸切
	180	97	1	1	SB3	カマド	平安	須恵器	坏	完	1	回転糸切
	181	97	1	1	SB3	No.3	平安	須恵器	高台付坏	完	1/2	ヘラケズリ
	182	97	1	1	SB3	カマド	平安	須恵器	坏	口縁~胴部	1/5	
	183	97	1	1	SB3	カマド	平安	須恵器	高台付坏	口縁~胴部	1/5	
	184	97	1	1	SB3	覆土	平安	土師器	坏	口縁~胴部	1/5	内黒
185	97	1	1	SB3	覆土	平安	須恵器	瓶	完	2/3	回転糸切/自然釉	
186	97	1	1	SB3	カマド	平安	土師器	甕	口縁~胴部	1/2		
69	187	97	2	1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	口縁	1/5	カキメ
	188	97	2	1	SB1	No.4	平安	土師器	甕	口縁	1/5	
	189	97	2	1	SB1	覆土~床面	平安	土師器	甕	口縁	1/2	
	190	97	2	1	SB1	覆土~床面	平安	土師器	甕			
	191	97	2	1	SB1	No.4	平安	須恵器	甕	底部	1/4	タタキ
	192	97	2	1	SB1	No.1	平安	須恵器	坏	完	1/2	回転糸切
	193	97	2	1	SB1	覆土	平安	須恵器	坏	完	1	回転糸切
	194	97	2	1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	底部	1	回転糸切
71	195	97	2	1	SB2	覆土~床面	平安	須恵器	坏	完	2/3	ヘラケズリ
	196	97	2	1	SB2	覆土~床面	平安	須恵器	坏	完	1/2	ヘラケズリ
	197	97	2	1	SB2	覆土上層	平安	須恵器	高台付坏	完	1/4	
	198	97	2	1	SB2	覆土	平安	土師器	甕	口縁	1/5	
	199	97	2	1	SB2	覆土	平安	須恵器	蓋	天井~縁	1/5	
	200	97	2	1	SB2	覆土~床面	平安	須恵器	甕	胴部	1/2	タタキ
	201	97	2	1	SB2	覆土~床面	弥生後期	弥生土器	高坏	脚部	2/3	赤彩/スカシ(円形)
	202	97	2	1	SB2	No.5	古墳前期	土師器	小型甕	口縁~胴部	1/2	ハケ
73	203	97	2	1	SB7	覆土	平安	土師器	甕	完	1	回転糸切
	204	97	2	1	SB8	覆土	平安	須恵器	蓋	完	1/5	
	205	97	2	1	SB8	覆土	平安	須恵器	坏	完	1	回転糸切
	206	97	2	1	SB8	覆土	平安	土師器	坏	底部	1/2	ヘラケズリ/内黒
	207	97	2	1	SB8	覆土	平安	土師器	甕	底部	1	回転糸切
	208	97	2	1	SB8	覆土~床面	平安	土師器	坏	底部	1	ヘラケズリ/内黒
	209	97	2	1	SB8	覆土	平安	土師器	甕	口縁	1/4	
	210	97	2	1	SB8	No.1	平安	土師器	甕	口縁	1/5	ナデ
	211	97	2	1	SB8	炉周辺	平安	土師器	甕	口縁	1/5	ナデ
	212	97	2	1	SB8	覆土~床面	平安	土師器	甕	口縁	1/5	カキメ
	213	97	2	1	SB8	覆土	平安	土師器	甕	口縁	1/4	カキメ
	214	97	2	1	SB8	炉周辺	平安	土師器	甕	胴部~底部	1/3	
	215	97	2	1	SB7・8	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/4	
	216	97	2	1	SB7・8	覆土	平安	須恵器	坏	底部	1/2	回転糸切
217	97	2	1	SB7・8	覆土	平安	須恵器	坏	底部	2/3	回転糸切	
218	97	2	1	SB7・8	覆土	平安	土師器	坏	完	2/3	回転糸切	
219	97	2	1	SB7・8	覆土	平安	土師器	坏	完	1/2	内黒/墨書	
220	97	2	1	SB7・8	煙道	平安	須恵器	蓋	天井~縁	1/5		

図版		出土遺構					時 期	種 別	器 種	残存部		調整・その他
図	No.	年 度	区	面	遺 構	出土位置				部 位	量	
75	221	97	2	1	SB12	No,1	平安	土師器	甕	口縁	1/5	ケズリ
	222	97	2	1	SB12	覆土～床面	平安	土師器	坏	完	2/3	
	223	97	2	1	SB12	覆土～床面	平安	須恵器	高台付坏	完	2/3	自然釉
	224	97	2	1	SB12	覆土	古墳前期	土師器	甕	完	1/3	
	225	97	2	1	SB12	覆土～床面	古墳前期	土師器	壺	口縁	1/5	ミガキ
77	226	97	2	2	SB1	覆土	平安	須恵器	坏	底部	1	底部線刻
	227	97	2	2	SB5	覆土	平安	須恵器	坏	完	2/3	回転糸切
	228	97	2	2	SB5	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/5	回転糸切
79	229	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	坏	完	1/3	回転糸切
	230	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	坏	完	1/5	回転糸切
	231	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	坏	完	1/5	回転糸切
	232	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	坏	完	1/5	回転糸切/内黒
	233	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	坏	完	1/3	回転糸切/内黒
	234	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	坏	口縁	1/5	回転糸切/内黒
	235	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	坏	底部	2/3	回転糸切/内黒
	236	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	皿	完	1/3	内外黒色
	237	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	鉢	口縁	1/5	内黒
	238	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	皿	完	1/3	回転糸切/内外黒色
	239	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	坏	完	1/3	回転糸切/内黒
	240	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	高台付坏	底部	1	回転糸切/内黒
241	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	高台付坏	底部	1	回転糸切/内黒	
80	242	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	口縁～胴部	1/4	ナデ・ケズリ
	243	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	口縁～胴部	1/4	カキメ
	244	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	口縁～胴部	1/3	ナデ・ケズリ
	245	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	底部	1/4	
	246	99	1	1	SB1	覆土	平安	土師器	甕	底部	1/4	
82	247	99	2	2	SB9	覆土	平安	須恵器	甕	胴部	1/2	タタキ・自然釉
	248	99	2	2	SB9	床面	平安	須恵器	短頸壺	完	2/3	タタキ
	249	99	2	2	SB9	覆土	平安	土師器	甕	口縁	1/5	カキメ
	250	99	2	2	SB9	覆土	平安	須恵器	坏	底部	1/2	回転糸切
	251	99	2	2	SB9	覆土	平安	土師器	甕	完	1/5	
	252	99	2	2	SB9	覆土	平安	土師器	坏	完	1/5	ヘラケズリ /内黒
	253	99	2	2	SB9	覆土	平安	土師器	坏	底部	1	ヘラケズリ /内黒
	254	99	2	2	SB9	覆土	平安	土師器	坏	底部	1	ヘラケズリ /内黒
	255	99	2	2	SB9	床面	平安	土師器	坏	底部	1	ヘラケズリ /内黒
84	256	99	3	2	SB11	No,1	平安	須恵器	瓶	底部	1/5	タタキ
	257	99	3	2	SB15	覆土	平安	須恵器	坏	完	1/5	回転糸切
86	258	99	3	2	SB14	覆土	平安	土師器	坏	底部	1	回転糸切/ミガキ
	259	99	3	2	SB14	覆土	平安	土師器	甕	口縁	1/5	
	260	99	3	2	SB14	覆土	平安	土師器	甕	口縁～胴部	1/3	
87	261	97	2	1	SK1	覆土	平安	土師器	坏	完	1/2	ヘラケズリ /内黒
	262	97	1	1	SK1	覆土	平安	土師器	坏	底部	1	ヘラケズリ /内黒
	263	97	1	1	SK1	覆土	平安	土師器	坏	口縁	1/5	ヘラケズリ /内黒
	264	97	1	1	SK1	覆土	平安	土師器	坏	口縁	1/2	回転糸切
	265	97	1	1	SK1	覆土	平安	土師器	甕	口縁	1/5	
	266	97	1	1	SK1	覆土	平安	須恵器	壺	胴部	1/5	灰釉
	267	97	1	1	SK2	覆土	平安	須恵器	壺	完	2/3	
	268	97	1	1	SX1	覆土	平安	須恵器	高台付坏	完	1/5	
	269	99	2	1	方形P75	覆土	平安	須恵器	高台付坏	底部	1/5	
	270	92		1	検出面		平安	須恵器	坏		1/3	
	271	97	2	1	検出面		平安	須恵器	坏		1/4	
	272	97	2	2	検出面		平安	須恵器	高台付坏	完	1/2	
	273	99	2	2	検出面		平安	須恵器	坏	完	1/5	回転糸切
	274	92		1	検出面		平安	須恵器	甕	口縁	1/2	タタキ

※残存部・量は、残存部位に対しての割合を示す。



4



6



17



20



12



27



13



32



42



54



53



55



75



64



73



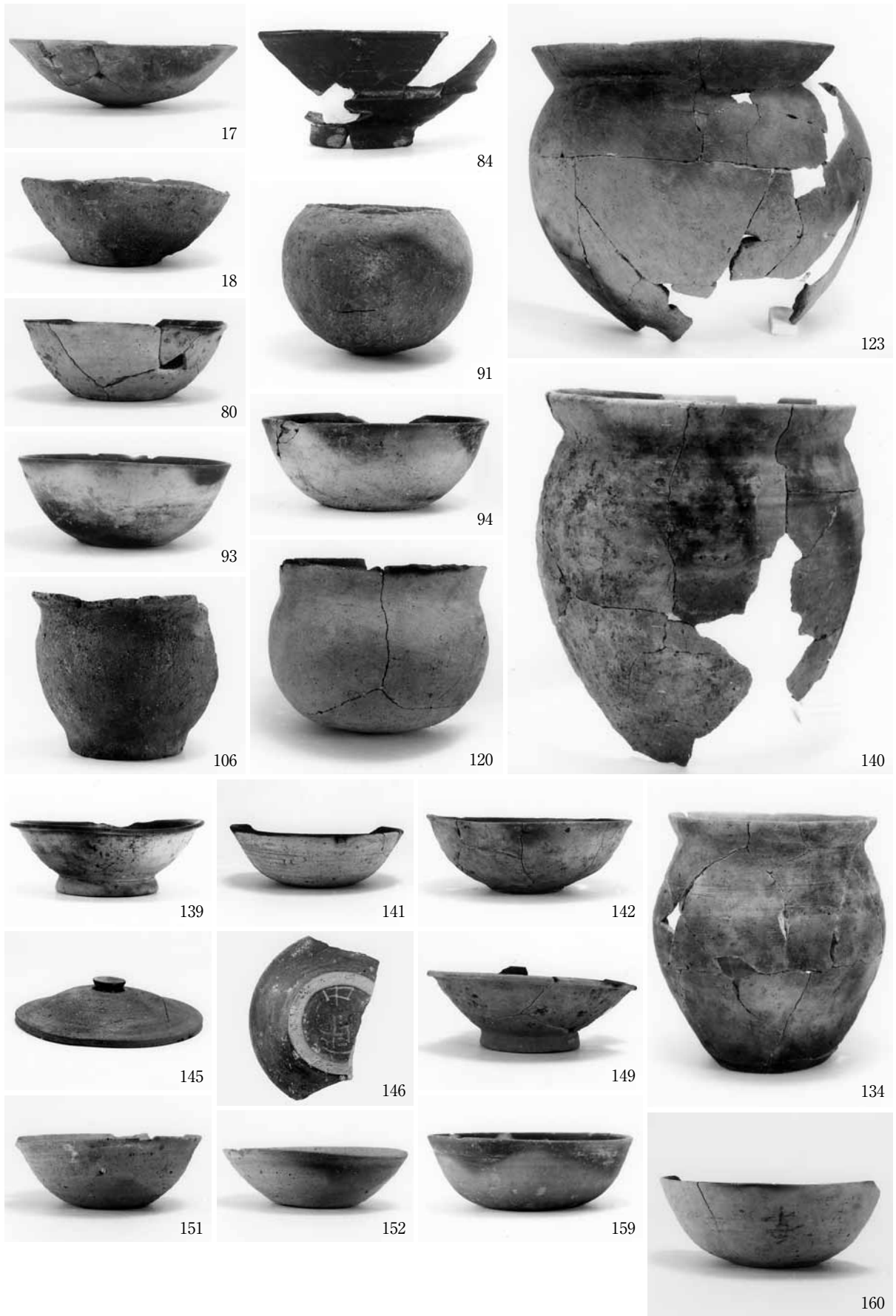
68



76

出土土器写真① (番号は実測図と同じ)





出土土器写真② (番号は実測図と同じ)



163



183



196



226



185



201



203



248



267

出土土器写真③ (番号は実測図と同じ)

## V その他遺物

### 1 石製品

**砥石 (図89-1~7)** 1~5は石材を加工したもの、6・7は河原石をそのまま使用したものである。1は上部に穿孔が一箇所ある提砥石。1~5までは、小口面以外の面で砥ぎ痕がみられるが、特に一面が船底状に大きく窪む。6は縦方向の砥ぎ痕のある平らな面がみられる。7は残存量1/4程であるが、やや大型の平石である。

**くぼみ石 (図89-9・10)** 自然石に叩打による窪みのあるもの、9は中心より端に寄った位置に浅く、10は中心に深い窪みがある。

**ミガキ石 (図89-11~13)** 11・13は9~10.5cm大のレキで、全体にミガキ痕がみられる。12は小型の三角形を呈するもので、この内一面に自然面が残る。

**軽石 (写真のみ)** 大きさは4~10cm程。この内3点で砥面が明確にみられる。この他にも風化がみられるもので、用途は同じとみられる。

**石製模造品 (図90-1~11)** 1は剣形、2~11は有孔円板。有孔円板は大きさが径2.5cmと2.0cmのものに分けられる。

**琴柱形石製品 (図90-12)** 長さ3cm、幅最大2.7cm。滑石製で全体に磨かれている。穿孔は上から円形2、長方形3、その下に三日月形が3つ並ぶ。穿孔は長方形と三日月形ものは両側からされている。また、長方形の上下の位置、横幅が大きくなる所には6条の細い横方向の沈線が描かれる。底部のみ片方のやや高い位置に三日月形状の抉りが入り、左右非対称となる。

### 2 石器

**刃器 (図89-14)** 上部に自然面が残る剥片。刃部には使用によるものと断定はできないが、細かな剥離がみられるものである。

### 3 玉類

**管玉 (図90-13~15)** 13は緑色凝灰岩製の細形。14・15は同形で穿孔は両側からとみられるが、特に15は身の部分に対して穿孔が大きく、端部断面が尖った状態となっている。

**白玉 (図90-16~19)** 滑石製で、18のみやや大きい他はほぼ同じ大きさである。

### 4 土製品

**土錘 (図90-20~25)** 20~24は同じ遺構(住居)からの出土で、長さ5cmの筒状を呈し、表面は調整がみられるものの凹凸を残す。両端には製作時に粘土を巻きつけた芯棒を抜いた痕が残る。25は1/3のみであるが、端部を細くした形で、表面をナデで丁寧に仕上げている。

**紡錘車 (図90-26)** 断面台形を呈する。表面はやや凹凸残るが、ナデが施されている。

### 5 鉄製品

**鉄鏃 (図90-27)** 平面は三角形を呈する。欠損しているが、逆刺があるものとみられる。

**刀子 (図90-28)** 刃部、基部ともに断面は三角形を呈し、関がみられる。両端は欠損する。

表6 ほか遺物観察表

図版	出土遺構						種別	遺存量	重量(g)	石材・備考	
	図No.	年	区	面	遺構	位置					
89	1	92			SB4	床面	石製品	砥石	完	82	穿孔1 (提砥石)
	2	92			検出面		石製品	砥石	完	114	
	3	97	2	1	検出面		石製品	砥石	完	156	
	4	97	1	1	SX2		石製品	砥石	2/3	130	
	5	97	2	1	検出面		石製品	砥石	完	129	
	6	92			Pit8	覆土	石製品	砥石	完	353	河原石
	7	92			検出面		石製品	砥石	1/4	357	河原石・大型
	8	92			SX2		石製品	敲石	3/4	416	
	9	92			SD5	覆土	石製品	凹石	1/2	2,337	
	10	97	1	1	SB2		石製品	凹石	完	1,142	
	11	92			SD5	覆土	石製品	ミガキ石	完	553	
	12	92			SD3	覆土	石製品	ミガキ石	完	73	自然面あり
	13	92			SK9	覆土	石製品	ミガキ石	一部欠	233	
	14	92			検出面		石器	刃器	完	33	刃部剥離
90	1	99	3	2	SB13	覆土	石製品	剣形	一部欠	4.3	滑石
	2	99	3	2	SB13	覆土	石製品	有孔円板	一部欠	5.8	滑石
	3	99	3	2	SB13	覆土	石製品	有孔円板	一部欠	3.6	滑石
	4	99	3	2	SB13	覆土	石製品	有孔円板	3/4	3.4	滑石
	5	99	3	2	SB13	覆土	石製品	有孔円板	完	1.7	滑石
	6	99	3	2	SB13	覆土	石製品	有孔円板	完	1.6	滑石
	7	99	3	2	SB13	覆土	石製品	有孔円板	3/4	1.6	滑石
	8	99	3	2	SB13	覆土	石製品	有孔円板	完	2.2	滑石
	9	99	3	2	SB13	覆土	石製品	有孔円板	1/3	0.7	滑石
	10	99	3	2	SB13	覆土	石製品	有孔円板	1/5	0.7	滑石
	11	99	3	2	検出面	覆土	石製品	有孔円板	完	3.7	滑石
	12	99	1	1	SE3	覆土壁面	石製品	琴柱形石製品	完	3.3	滑石
	13	97	2	2	SB5	覆土	玉類	管玉	一部欠		細形・緑色凝灰岩
	14	97	2	2	SB7	覆土	玉類	管玉	完		緑色凝灰岩
	15	92			SD3	覆土	玉類	管玉	2/3		緑色凝灰岩
	16	92			SD3	覆土	玉類	白玉	完		滑石
	17	92			SD3	覆土	玉類	白玉	完		滑石
	18	92			SD3	覆土	玉類	白玉	完		滑石
	19	99	2	2	方形Pit	覆土	玉類	白玉	完		滑石
	20	99	3	2	SB11	覆土	土製品	土錘	一部欠	17.7	柱状
	21	99	3	2	SB11	覆土	土製品	土錘	完	25.3	柱状
	22	99	3	2	SB11	覆土	土製品	土錘	一部欠	21.8	柱状
	23	99	3	2	SB11	覆土	土製品	土錘	完	20.5	柱状
	24	99	3	2	SB11	覆土	土製品	土錘	一部欠	21.2	柱状
	25	92			SD5	覆土	土製品	土錘	4/5	8.1	端部細
	26	97	2	1	SB3	覆土	土製品	紡錘車	1/4	51.9	断面台形
	27	97	1	1	SB3	覆土	鉄製品	鉄鎌	一部欠		
	28	97	1	1	SB3	覆土	鉄製品	刀子	2/3		
写真のみ	1	92			SX2	覆土	石材	軽石	完	20	砥面あり
	2	92			SB2	覆土	石材	軽石	完	50	砥面あり
	3	92			SX2	覆土	石材	軽石	完	11	砥面あり
	4	97	2	1	検出面		石材	軽石	完	23	
	5	92			SX2	覆土	石材	軽石	完	103	



图89 石製品・石器実測図 (S=1:3)

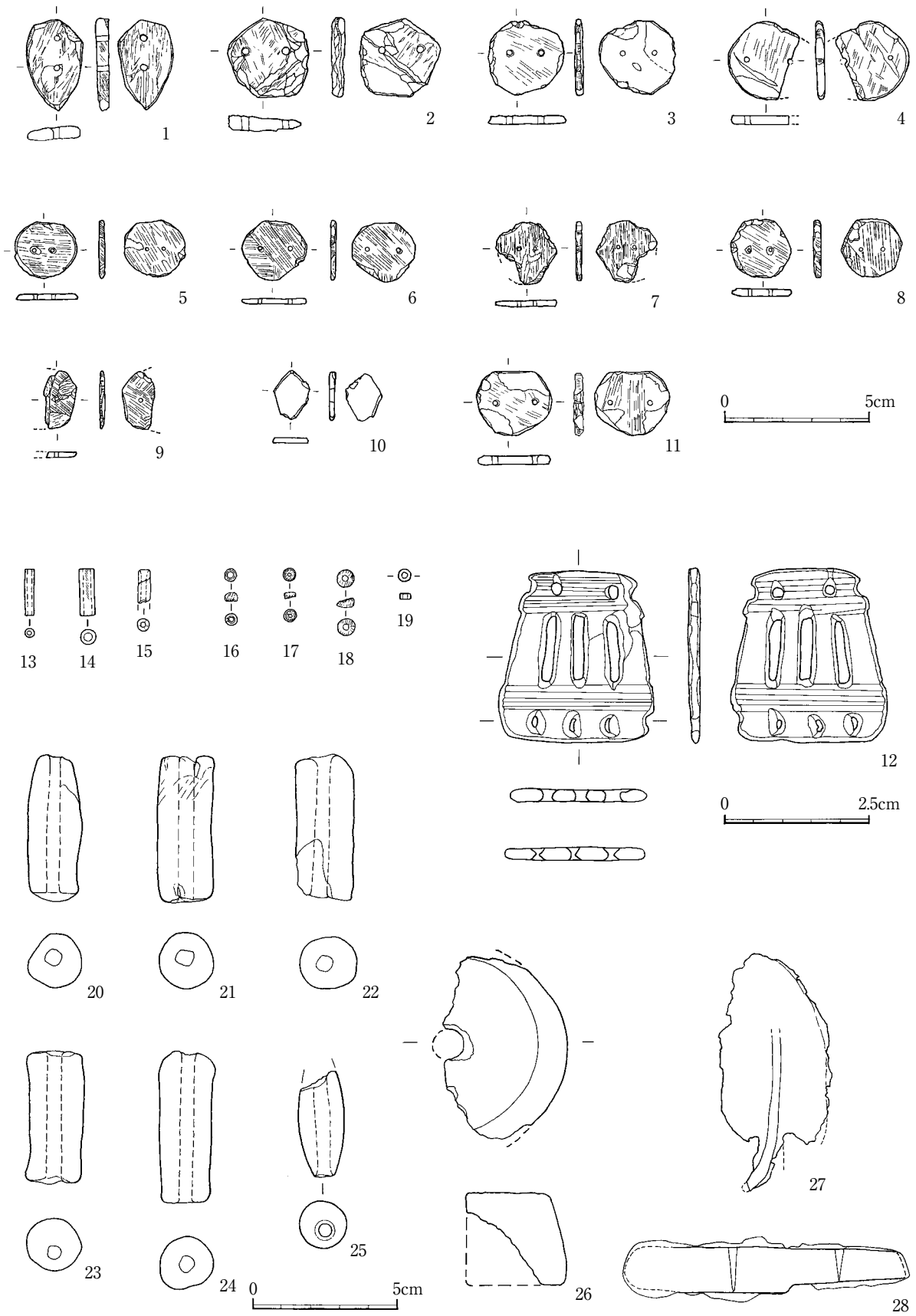


図90 石製品・玉類・土製品・鉄製品実測図 (S=1:2、12のみ1:1)



出土石製品写真①（番号は実測図と同じ）



89-11



89-13



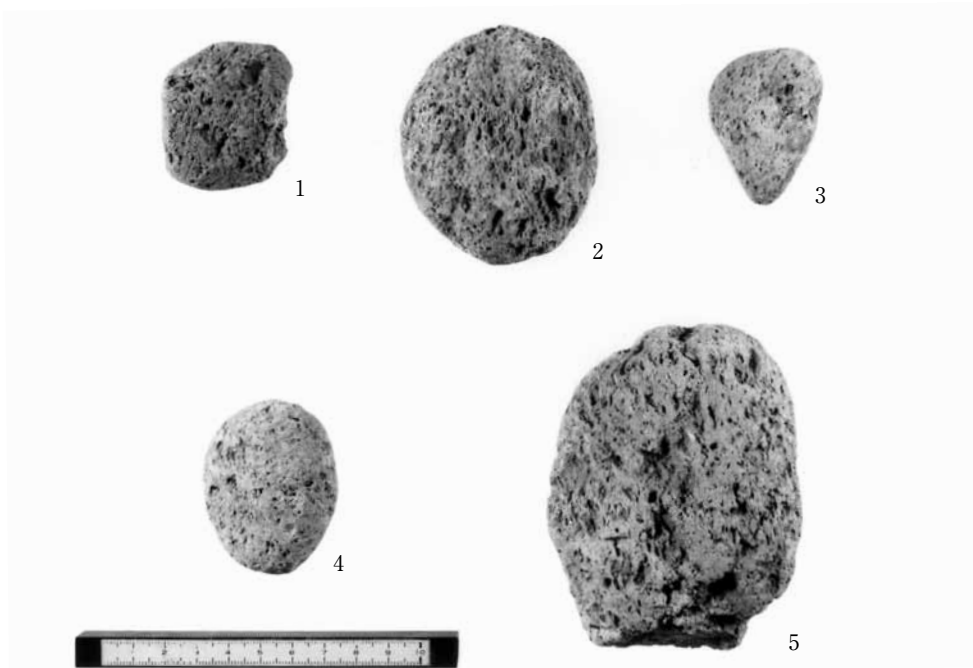
89-12



89-14

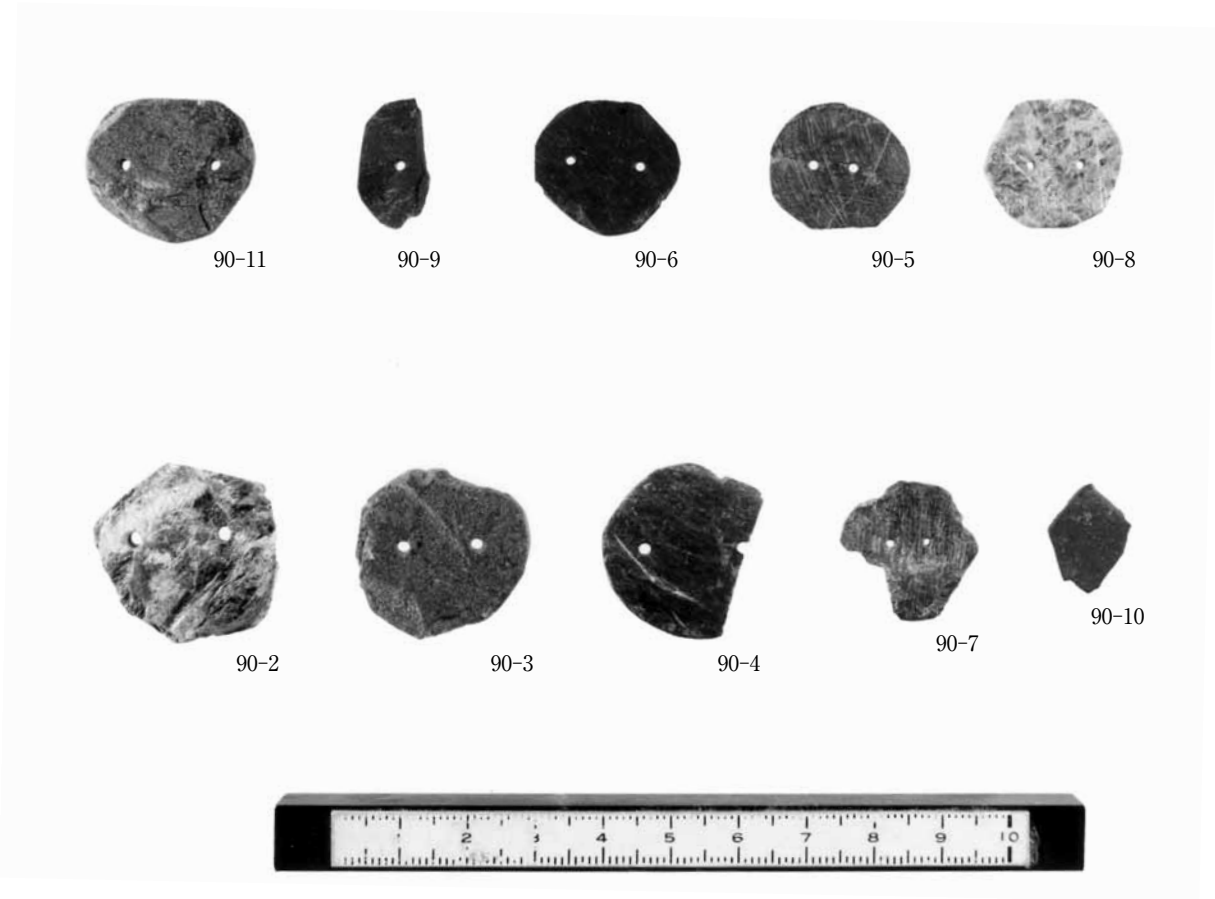


89-8



出土石製品写真② (番号は実測図と同じ)





出土石製品写真③ (番号は実測図と同じ)



90-21



90-23



90-20



90-22



90-24



90-25



90-28



90-27

出土土製品・鉄製品写真（番号は実測図と同じ）

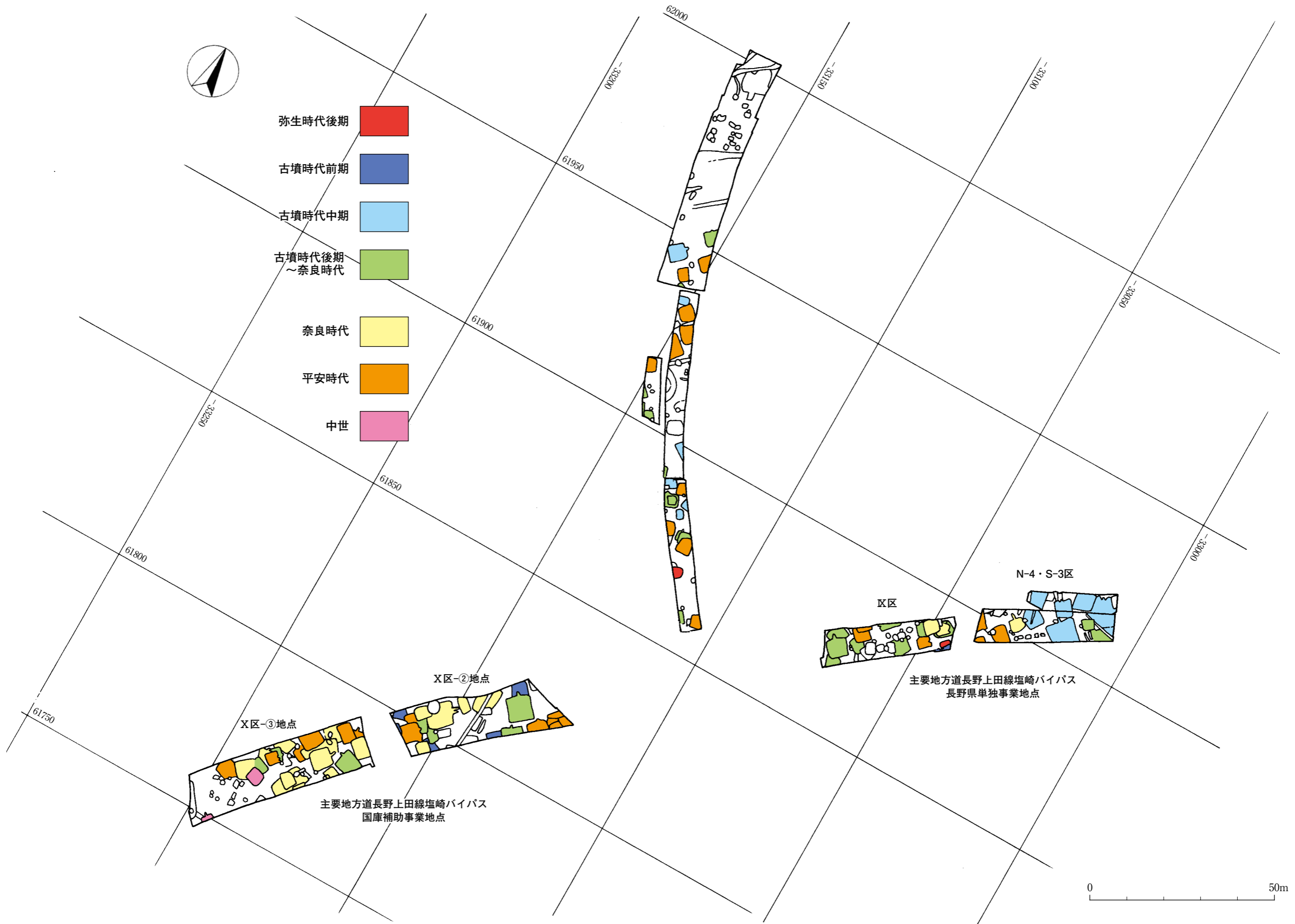


図91 周辺調査区遺構位置図 (S=1:1,000)

## VI 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

篠ノ井遺跡群（長野県長野市篠ノ井塩崎地内）は、長野市の南部、千曲川左岸に形成された自然堤防上に立地する。本遺跡群は、これまでの発掘調査の結果、弥生時代中期から中世までの遺構・遺物が確認される複合遺跡であることが明らかとされている。

本報告では、篠ノ井遺跡群（塩崎中央線地区）の発掘調査で出土した獣骨について同定を行い、獣骨の種類や部位、およびその特徴について検討した。

### 1. 試料

試料は、平安時代の井戸跡（SK2）上部から出土した獣骨である。獣骨は、発掘調査時の記録などから、一体分の遺骸がほぼ解剖学的位置を保った状態と判断される。これらの遺骸は、概ね部位毎に取り上げられており、硬化剤によって補強され土壌ごとに取り上げられたものも含まれる。

なお、取上げられた試料と発掘調査時の記録と照合したところ、調査時の記録と対照できない試料が含まれていた。そのため、同定結果は各試料が収納されたテンバコ名を記すとともに、個々に仮Noを付して明示した。

### 2. 分析方法

前処理として、試料に付着した土壌を乾いた筆・竹串などで可能な限り除去する。なお、土壌の除去により形質を保てないと判断したものに関しては、そのままの状態としている。また、一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。これらの前処理を行った後、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から種類および部位の特定を行う。

### 3. 結果

結果を表1、各部位の名称を図1に示す。同定の結果、SK2から出土した獣骨はウマ（*Equus caballus*）に同定された。いずれも火を受けた状態は確認されず、保存は良好である。また、右大腿骨（No.2、No.66～69）および中手骨/中足骨などで部位が重複することから、SK2には2個体のウマの存在が示唆される。なお、中手骨/中足骨（No.1）を含む土塊には右下顎骨が認められ、後述する頭蓋（No.4）と関連する可能性がある。

本報告では、以上の状況を踏まえ、便宜的にウマ1（No.1～3）、ウマ2（No.4～89）として表記した。以下に、結果を示す。

#### (1) ウマ1

いずれも土壌塊として取上げられた試料である。No.1は、右下顎骨と中手骨/中足骨が観察される。右下顎骨は門歯～第2前臼歯部まで破損し、第2前臼歯～第3後臼歯が植立する。臼歯列長は167mmを測る。中手骨/中足骨は、近位端が欠損する。No.2は、かろうじて形質を確認できる程度で、右大腿骨と推定した。全長は300mm以上である。No.3は、土壌塊中に骨片が確認できる程度で、いずれも部位不明である。

#### (2) ウマ2

確認された部位は、頭蓋、椎骨、仙骨、肋骨、左・右肩甲骨、左・右上腕骨、左・右橈骨、左・右尺骨、左・右橈

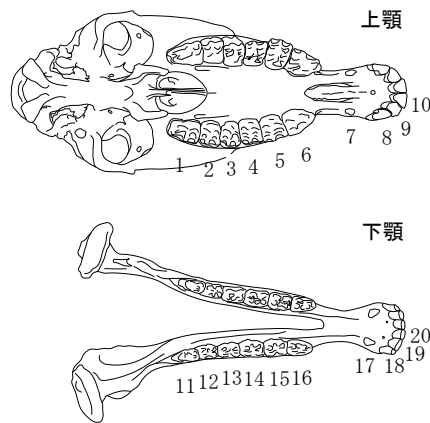
遺構	取上番号	No.	種類	部位	左	右	部分	数量	備考	計測値 (mm)
SK2	-	1	ウマ	下顎骨		右	破損 (土塊状)	1		
	-		ウマ	中手骨/中足骨			破損 (土塊状)	1		
	-	2	ウマ	大腿骨		右	破損 (土塊状)	1		
	-	3	ウマ	不明			破片 (土塊状)	3 +		
	-	4	ウマ	頭蓋			破損 (土塊状)	1 +		
	-	5	ウマ	椎骨			破片 (土塊状含む)	50 +	椎骨板未化骨外れ	
	-	6	ウマ	肋骨			破片 (土塊状含む)	65 +		
	-	7	ウマ	四肢骨			骨端	1		
	No.13他 (首の骨)	8	ウマ	残渣				273.6 g		
		9	ウマ	椎骨・肋骨			破片 (土塊状)	17 +		
		10	ウマ	肩甲骨	左		破片	1		
		11	ウマ	肩甲骨		右	破片	1		
		12	ウマ	上腕骨	左		近位端	1	未化骨骨端	
		13	ウマ	上腕骨		右	近位端片	1	未化骨骨端	
		14	ウマ	上腕骨		右	近位端片	1		
	No.12 (骨盤)	15	ウマ	寛骨	左	右	破損 (土塊状)	1 +		
		16	ウマ	仙骨			破片 (土塊状含む)	5		
		17	ウマ	不明			破片	68.3 g		
		18	ウマ	残渣				278.1 g		
	No.7-8-9 (左前足)	19	ウマ	上腕骨	左		近位端部破損	1	近位端未化骨外れ	
		20	ウマ	橈骨	左		遠位端部破損	1	遠位端未化骨外れ	GL280.5、Bp66.1、Bd58.6
		21	ウマ	橈骨	左		遠位端	1	未化骨骨端	
		22	ウマ	尺骨	左		破損	1		
		23	ウマ	橈側手根骨	左		ほぼ完存	1		
		24	ウマ	中間手根骨	左		ほぼ完存	1		
		25	ウマ	尺側手根骨	左		ほぼ完存	1		
		26	ウマ	副手根骨	左		ほぼ完存	1		
		27	ウマ	第2手根骨	左		ほぼ完存	1		
		28	ウマ	第3手根骨	左		ほぼ完存	1		
		29	ウマ	第4手根骨	左		ほぼ完存	1		
		30	ウマ	第2中手骨	左		破片	1		
		31	ウマ	第3中手骨	左		ほぼ完存	1		GL195、Bp41.1、Bd41.6
		32	ウマ	第4中手骨	左		破片	1		
		33	ウマ	前肢基節骨	左		遠位端破損	1		
		34	ウマ	前肢中節骨	左		破損	1		
		35	ウマ	前肢種子骨	左		破損	1		
		36	ウマ	不明			破片	9		
		37	ウマ	残渣				107.0 g		
	No.4-5-6 (右前肢)	38	ウマ	上腕骨		右	近位端欠	1		Bd63.5
		39	ウマ	橈骨		右	破損	1	遠位端未化骨外れ	
		40	ウマ	橈骨		右	遠位端片	1	未化骨骨端	
		41	ウマ	尺骨		右	破片	1+		
		42	ウマ	橈側手根骨		右	破片	1		
		43	ウマ	第3手根骨		右	破片	1		
		44	ウマ	第2中手骨		右	破片	1		
		45	ウマ	第3中手骨		右	ほぼ完存	1		GL195、Bp40.8、Bd41 ±
		46	ウマ	第4中手骨		右	破片	1		
		47	ウマ	前肢基節骨		右	遠位端破損	1		
		48	ウマ	前肢中節骨		右	遠位端欠	1		
		49	ウマ	不明			破片	8		
		50	ウマ	残渣				54.6 g		
	No.1-2-3 (左後足)	51	ウマ	大腿骨	左		大転子片	1		
		52	ウマ	大腿骨	左		骨頭	1		
		53	ウマ	大腿骨	左		ほぼ完存	1	両端未化骨外れ	
		54	ウマ	大腿骨	左		遠位端片	2	未化骨骨端	
		55	ウマ	脛骨	左		近位端片	1	未化骨骨端	
		56	ウマ	脛骨	左		遠位端部破損	1	近位端未化骨外れ	Bp66.3
		57	ウマ	距骨	左		破損	1		
		58	ウマ	中心足根骨	左		破片	1		
		59	ウマ	第3足根骨	左		破片	1		
		60	ウマ	第3中足骨	左		遠位端欠	1		
		61	ウマ	第3中足骨	左		遠位端破片	1		
		62	ウマ	後肢基節骨	左		破片 (土塊状)	1 +		
		63	ウマ	後肢種子骨	左		ほぼ完存	1		
		64	ウマ	不明			破片	33		
		65	ウマ	残渣				70.7 g		
	No.10-11-12 (右後足)	66	ウマ	大腿骨		右	大転子	1	未化骨骨端	
		67	ウマ	大腿骨		右	骨頭	1	未化骨骨端	
		68	ウマ	大腿骨		右	ほぼ完存	1	両端未化骨外れ	
		69	ウマ	大腿骨		右	遠位端	1	未化骨骨端	
		70	ウマ	大腿骨	左		遠位端片	1	未化骨骨端	
		71	ウマ	脛骨		右	近位端	1	未化骨骨端	Bp74 ±
		72	ウマ	脛骨		右	遠位端部破損	1	遠位端骨化弱 近位端未化骨外れ	
		73	ウマ	距骨		右	破損	1		
		74	ウマ	踵骨	左		破片	1		
		75	ウマ	踵骨		右	ほぼ完存	1		
		76	ウマ	不明			破片	24		
		77	ウマ	中心足根骨		右	ほぼ完存	1		
		78	ウマ	第1+2足根骨		右	破損	1		
		79	ウマ	第3足根骨		右	ほぼ完存	1		
		80	ウマ	第4足根骨		右	ほぼ完存	1		
		81	ウマ	第2中足骨		右	破損	1		
		82	ウマ	第3中足骨		右	ほぼ完存	1		GL231、Bp43.0、Bd40.4
		83	ウマ	第4中足骨		右	ほぼ完存	1		
	84	ウマ	後肢基節骨		右	遠位端欠	1			

表1. 骨同定結果 (1)

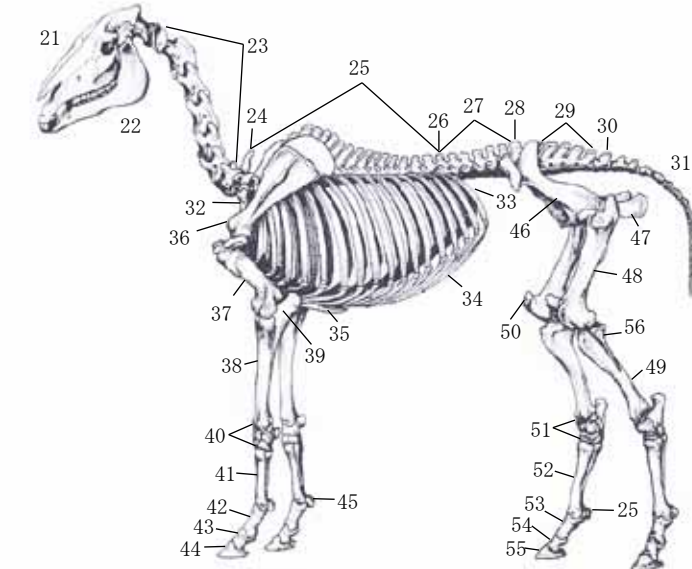
SK2	No.10-11-12 (右後足)	85	ウマ	後肢種子骨	右	ほぼ完存	1			
		86	ウマ	残渣				22.6 g		
		87	ウマ	不明			破片	2		
		88	ウマ	不明			破片	7		
		89	ウマ	残渣				172.2 g		

GL: 全長、Bp: 近位端幅、Bd: 遠位端幅

### 頭蓋



### 全身骨格



1. 上顎第3後臼歯、2. 上顎第2後臼歯、3. 上顎第1後臼歯、4. 上顎第4前臼歯、5. 上顎第3前臼歯、6. 上顎第2前臼歯
7. 上顎犬歯(雄のみ)、8. 上顎第3門歯、9. 上顎第2門歯、10. 上顎第1門歯、11. 下顎第3後臼歯、12. 下顎第2後臼歯
13. 下顎第1後臼歯、14. 下顎第4前臼歯、15. 下顎第3前臼歯、16. 下顎第2前臼歯、17. 下顎犬歯(雄のみ)、
18. 下顎第3門歯、19. 下顎第2門歯、20. 下顎第1門歯、21. 頭蓋、22. 下顎骨、23. 頸椎、24. 第一胸椎、25. 胸椎
26. 最後位胸椎、27. 腰椎、28. 最後位腰椎、29. 仙骨、30. 第一尾椎、31. 尾椎、32. 第一肋骨、33. 最後位肋骨
34. 軟肋骨、35. 剣状軟骨、36. 肩甲骨、37. 上腕骨、38. 橈骨、39. 尺骨、40. 手根骨、41. 中手骨、42. 指骨(基節骨)
43. 指骨(中節骨)、44. 指骨(末節骨)、45. 基節骨種子骨、46. 腸骨、47. 坐骨、48. 大腿骨、49. 脛骨、50. 膝蓋骨
51. 足根骨、52. 中足骨、53. 趾骨(基節骨)、54. 趾骨(中節骨)、55. 趾骨(末節骨)、56. 腓骨

(全身骨格は、加藤・山内, 2003に加筆)

図1. ウマの骨格

側手根骨、左尺側手根骨、左中間手根骨、左副手根骨、左第2手根骨、左・右第3手根骨、左第4手根骨、左・右第2中手骨、左・右第3中手骨、左・右第4中手骨、左前肢種子骨、左・右前肢基節骨、左・右前肢中節骨、左・右寛骨、左・右大腿骨、左・右脛骨、左・右距骨、左・右踵骨、左・右中心足根骨、右第1 + 2足根骨、左・右第3足根骨、右第4足根骨、右第2中足骨、左・右第3中足骨、右第4中足骨、左・右後肢種子骨、左・右後肢基節骨、四肢骨骨端である。土壌塊として取上げられた頭蓋は、上顎下顎の門歯、左上顎第2・3前臼歯と第1・2後臼歯、左下顎第2前臼歯～第2後臼歯が植立する。なお、左上顎第2・3前臼歯は、乳臼歯であり、永久歯がみられる。また、椎骨椎体板、上腕骨近位端、橈骨遠位端、大腿骨近位端(骨頭・大転子)、大腿骨遠位端、脛骨近位端は未化石である。

計測値は、左橈骨(No.20,21)が全長280.5mm、近位端幅66.1mm、遠位端幅58.6mm、右上腕骨(No.38)が遠位端幅63.5mm、左第3中手骨(No.31)が全長195mm、近位端幅41.1mm、遠位端幅41.6mm、右第3中手骨(No.45)が全長195mm、近位端幅40.8mm、遠位端幅41mm前後、左脛骨(No.56)が近位端幅66.3mm、右脛骨(No.71)が近位端幅74mm前後、右第3中足骨(No.82)が全長231mm、近位端幅43.0mm、遠位端幅40.4mmを計る。

### 4. 考察

SK2出土獣骨からは、ウマが2個体確認された。ウマ1は、中手骨/中足骨や大腿骨の大きさ、および大腿骨の骨端が化石化していることから、3.5歳以上に達していたと推定される。また、大腿骨とみられる骨が現長

300mm以上に達することから、体高100cm以上と推定される。なお、確認される部位が極めて少ないことから、これらの試料は解剖学的位置を保っていないとみられ、軟質部が無くなり、骨となった状態で埋められた可能性がある。

一方、ウマ2は、ほぼ全身の骨格が確認された。発掘調査時の記録によれば、首を曲げ、寛骨部から後肢を前肢側に屈曲させるなど、小さく折りたたむ状況が窺える。また、四肢骨骨端の化骨化が終了してない部位が多いことから、比較的若い個体と判断できる。確認された骨格のうち、脛骨は遠位端の化骨化が終了し、近位端が未化骨で外れている状況が確認された。Scmid (1972) を参考とすると、ウマ2は2～3.5歳程度と推定される。また、西中川ほか (1991) および林田・山内 (1957) を参考に、橈骨、中手骨、中足骨の計測値から推定すると、成長段階であるが少なくとも体高115cm前後であり、トカラ馬程度の小型馬と推定される。

遺跡出土のウマ・ウシについては、検出状況や出土骨の状態から、自然死や事故死、屠殺、儀礼に分類できるとされている (松井,1997)。ウマ2についてみると、ほぼ全身骨格が出土していることや解体痕が認められないことから、屠殺や儀礼に伴う可能性は低いとみられ、死後、解体することなく埋めたものと推定される。

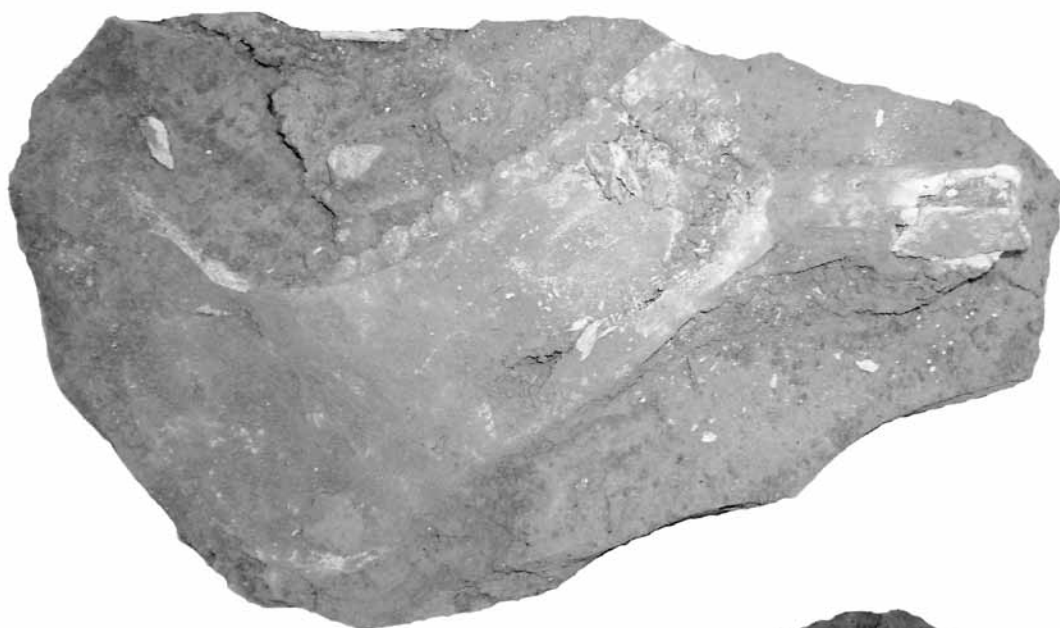
#### 引用文献

林田重幸・山内忠平,1957,馬における骨長より体高の推定法,鹿児島大学農学部学術報告6,鹿児島大学農学部,146-156.

西中川 駿・本田道輝・松元光春,1991,古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究.平成2年度文部省科学研究費補助金 (一般研究B) 研究成果報告書,99p

Scmid, Elisaveth ,1972, Atlas of Animal Bones. Elsevier Publishing Company, 159p.

図版1 出土骨(1)

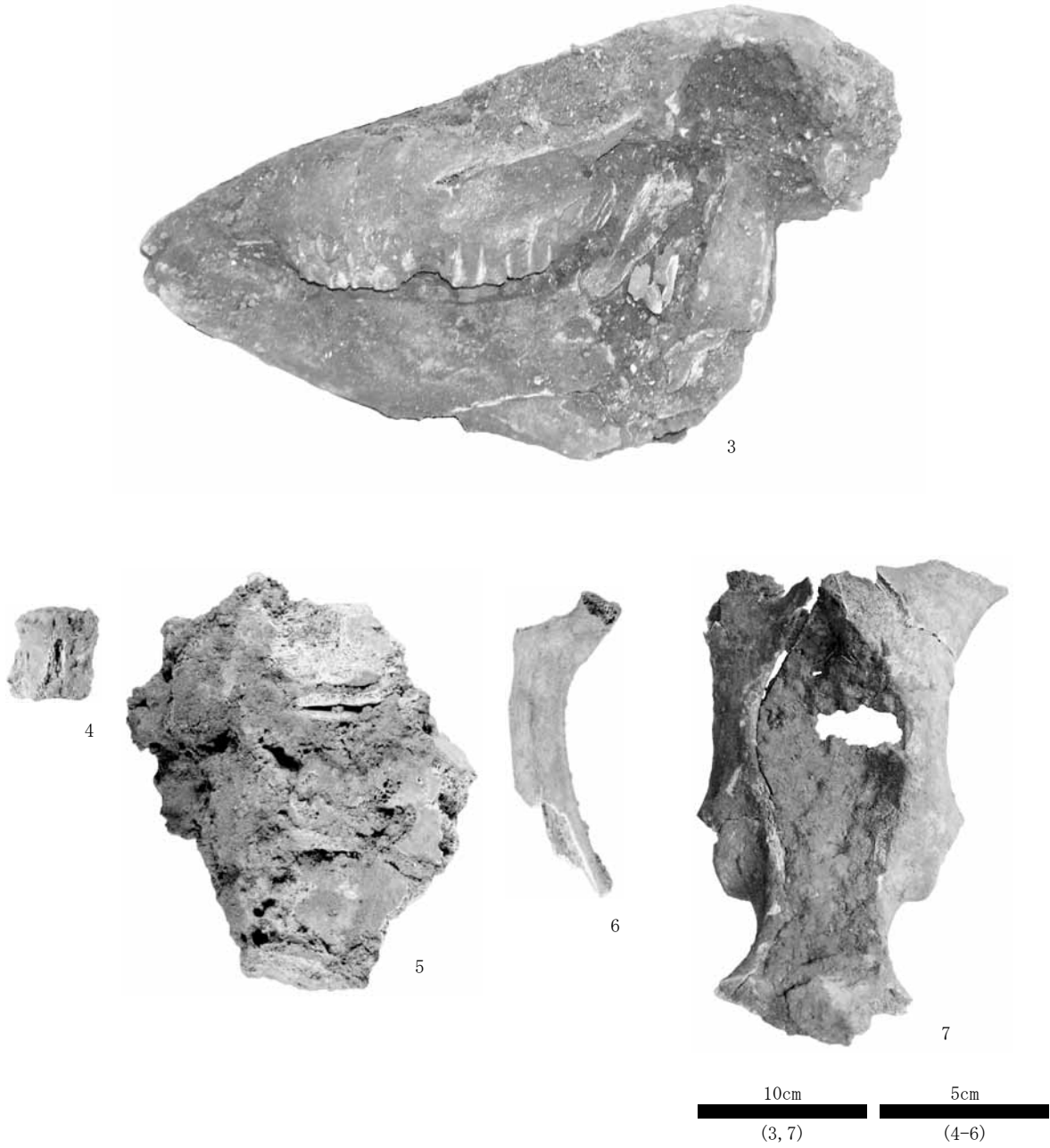


1. ウマ下顎骨+中手骨/中足骨 (No.1)
2. ウマ右大腿骨 (No.2)

5cm



図版2 出土骨(2)



3. ウマ頭蓋(No.4)  
6. ウマ肋骨(No.6)

4. ウマ椎骨(No.5)  
7. ウマ左右寛骨(No.15)

5. ウマ仙骨(No.16)

図版3 出土骨 (3)



- |                         |                       |                       |
|-------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 8. ウマ右肩甲骨 (No.11)       | 9. ウマ左肩甲骨 (No.10)     | 10. ウマ右上腕骨近位端 (No.13) |
| 11. ウマ右上腕骨 (No.38)      | 12. ウマ右橈骨 (No.39)     | 13. ウマ右橈骨遠位端 (No.40)  |
| 14. ウマ右尺骨 (No.41)       | 15. ウマ右第3中手骨 (No.45)  | 16. ウマ右前肢基節骨 (No.47)  |
| 17. ウマ左第3中手骨 (No.31)    | 18. ウマ左前肢基節骨 (No.33)  | 19. ウマ左尺骨 (No.20)     |
| 20. ウマ左橈骨 (No.20)       | 21. ウマ左橈骨遠位端 (No.21)  | 22. ウマ左上腕骨近位端 (No.12) |
| 23. ウマ左上腕骨 (No.19)      | 24. ウマ右大腿骨大転子 (No.66) | 25. ウマ右大腿骨骨頭 (No.67)  |
| 26. ウマ右大腿骨 (No.68)      | 27. ウマ右大腿骨遠位端 (No.69) | 28. ウマ右脛骨近位端 (No.71)  |
| 29. ウマ右脛骨 (No.72)       | 30. ウマ右距骨 (No.73)     | 31. ウマ右踵骨 (No.75)     |
| 32. ウマ右第3中足骨 (No.82)    | 33. ウマ右後肢基節骨 (No.84)  | 34. ウマ左第3中足骨 (No.60)  |
| 35. ウマ右第3中足骨遠位端 (No.61) | 36. ウマ左脛骨近位端 (No.55)  | 37. ウマ左脛骨 (No.56)     |
| 38. ウマ左踵骨 (No.74)       | 39. ウマ左距骨 (No.57)     | 40. ウマ左大腿骨骨頭 (No.52)  |
| 41. ウマ左大腿骨大転子 (No.51)   | 42. ウマ左大腿骨 (No.53)    |                       |

## Ⅶ まとめ

3年度にわたる調査において、弥生時代後期から平安時代、平安時代以降の遺構および遺物を検出した。遺構確認面は北側の92年度調査区では1次面、南側の97・99調査区では3次面まで設定し、南側ほど遺物包含層が厚く、深くなっている。検出された遺構は0次面（99年度調査区）で平安以降の方形ピット群、1・2次面では古墳時代前期～平安時代、3次面からは弥生時代後期の住居跡を検出しており、遺物包含層が厚く、遺構確認面が深い南側ほど、より古い時代の遺構を検出している。

遺構は住居跡を中心とし、溝跡・土抗などがみられる。これらは調査区南半部で住居跡を中心として比較的蜜に分布するが、北側では住居跡はなく、溝跡・土抗が疎らにみられるのみとなる。調査区北端部では覆土中に土器を含む落ち込み状の自然地形が確認され、自然堤防から後背湿地に移行する地形変換点と把握できる。

住居跡は全体の南半の範囲までに収まっており、住居分布域が自然堤防上での居住域の北端に当たるものとみられる。また、検出された住居群は時期によって分布域の変化が認められる。弥生時代後期は調査区南端部に一軒のみが検出されたに過ぎず、また、古墳時代前期も疎らな分布と弥生時代後期～古墳時代前期は本地点では展開がほとんど認められない。続く古墳時代中期も居住域全体への広がりが認められるが、遺構数は卓越しない。これに対して古墳時代後期から平安時代にかけては調査区南半部全体に分布し、遺構数も増加している。こうした時期別の遺構分布状況は、南側で接続する県道バイパス地点でも同様な傾向が把握されている。特に古墳時代中期については、県道バイパス地点Ⅷ区を中心に確認された集落域の北西端部を示すと捉えられ、Ⅻ区を中心に確認された中期古墳群との空間構造を伺ううえで重要な知見となる。また、古墳時代後期以降は居住域の拡大傾向が認められており、本地点における遺構数の増加も一連の動向の中に位置づくと考えられる。0次面で検出された方形ピット群は列の並び等の規則性は見出し難く、また、時期を決定する根拠も得られなかった。ただし、県道バイパス地点においても広い範囲で確認されていて、平安時代以降の新たな土地利用の痕跡と捉えられる。

出土遺物の中で特筆されるものとして、琴柱形石製品が挙げられる。本村型の琴柱形石製品<sup>1)</sup>に該当し、垂飾品と考えられている。県内においては鬼釜遺跡（池田町）に次いで2例目となる。後世に掘削された井戸壁面内からの出土であることから、調査区外に展開する別遺構に伴うと判断される。このため、出土状況や相伴遺物の把握できないが、形態的特徴から古墳時代前期後半の所産と考えられる。なお、古墳時代前期後半の遺構分布が希薄な本地点において他例をみない垂飾品の出土は、川柳將軍塚古墳足下の該期遺構の展開を想定するうえで提起する問題点は少なくない。また、99-③区2 SB13の覆土中からは石製模造品有孔円板9点と剣形1点が出土している。さらに、有孔円板1点がSB13に近い検出面で出土しており、他に石製模造品がみられないことからSB13 覆土より出土した有孔円板9点・剣形1点と同時使用されたと判断される。なお、県道バイパスⅦ～Ⅸ区でも複数の遺構から石製模造品の出土がみられ、Ⅷ1-S-3(2) SB24からは10点の有孔円板が出土するなど、石製模造品の使用において同様な状況が指摘できる。

篠ノ井遺跡群は、高速道路をはじめとした道路建設等に伴い広範囲にわたり調査が行われ、これまでに数多くの遺構が確認されたきた。ただし、調査地点は図91（85～86頁）にみるように東西方向の調査事例が主となり、南北方向への広がりについては明らかでない点が多かった。こうした中で、本地点で遺跡群内での居住域の北端部の把握ならびに後背湿地への移行地形の確認、さらには居住域以北の土地利用状況の確認ができたことは、自然堤防上での遺跡展開を理解するうえで新たな情報を提供するものと評価されよう。

註 1) 亀井正道 1973「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第八号

# 報告書抄録

ふりがな	しののいせきぐん なな
書名	篠ノ井遺跡群（7）
副書名	市道塩崎中央線地点
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第131集
編著者名	遠藤恵実子 風間栄一
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2012（平成24）年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しののい 篠ノ井 いせきぐん 遺跡群	長野県長野市 篠ノ井字古寺	20201	E-⑤	36° 33′ 28″	138° 07′ 47″	1992.4.14～ 1992.10.29 1997.7.30～ 1998.3.16 1999.7.12～ 1999.9.4	2,940 ㎡	道路 改良
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
篠ノ井遺跡群	集落跡	弥生時代後期		住居		弥生土器		
		古墳時代前期		住居		土師器・琴柱形石製品		
		古墳時代中期		住居		土師器・須恵器・石製模造品		
		古墳時代後期～ 奈良時代		住居		土師器・須恵器・砥石		
		平安時代		住居・ウマ埋納土坑		土師器・須恵器・砥石		
		中世		土坑 井戸				
要約	弥生時代後期から平安時代にかけての集落。住居以外の遺構はほとんどみられないが、時期により遺構の数や位置に変化がみられ、既存の調査区と合わせて広範囲におよぶ篠ノ井遺跡群内における居住域北端の様子が確認された。遺物では、住居より一括で出土した石製模造品と遺跡群内では出土例のない古墳時代前期の琴柱形石製品が特筆される。							

長野市の埋蔵文化財第131集

## 篠ノ井遺跡群 (7)

— 市道塩崎中央線 —

平成24年3月23日 印刷

平成24年3月30日 発行

発行 長野市教育委員会  
編集 文化財課埋蔵文化財センター  
印刷 大日本法令印刷株式会社